空の騎士テッカマンエビル

天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また

【小説タイトル】 空の騎士テッカマンエビル

Vロード N1062P

【作者名】

天使

【あらすじ】

ルの物語が始まる。 と化した!だが神の悪戯なのかネウロイと戦うストライクウィッチ - ズ達の前に漆黒の摩神が現れた!そして彼・ このもう一つの地球は、 ネウロイの出現により人々が怯える世界 ・テッカマンエビ

中傷的な感想や悪質な感想は、 出さないで下さい。

0 İψ 永遠の孤独です。

第一話:別次元から来た騎士 (前書き)

考えるのに色々苦労しました・・・ (苦笑) ストライクウィッチー ズと宇宙の騎士テッカマンブレードの作品を

第一話:別次元から来た騎士

1939年それは、 何の前振りも無く我々人類の前に現れた。

我々は、それをネウロイと名づけた。

た。 攻撃により人々が生まれ育った町を国を追われた事は、 ネウロイが何処から何の為に来たのか誰にも解らなかっ 事実であっ たが彼らの

人類は、 対ネウロイ用に新兵器を開発をし徹底抗戦に打って出た。

ストライカー ユニット

それは、 力を可能とした魔法の箒である。 ネウロイに唯一対抗出来魔法力を増大させその力で飛行能

それを装着する為魔法使い魔女が世界各国から集められた。

空団は、 対ネウロイ用に編成せれた精鋭部隊連合軍第501部隊統合戦闘航 彼女等をストライクウィッチーズと呼んだ。

らないでいた。 しかし、 彼女達の目の前に異世界からの英雄が来る事になる事を知

青年

(此処は・・・そうだ。確か・・・)

暗い空間に漆黒の魔神は、漂っていた。

漆黒の魔神

[これで最後だ!ブレード!]

エビルは、ブラスター 化した肉体の限界を感じてエビル:相羽シン

ヤの兄相羽タカヤ:テッカマンブレードと決闘をしていた。

テッカマンエビル/テッカマンブレード

[[ボルテッカァァァァァァァ ! ! !]]

ブラスター 化したブレー ドとエビルのボルテッカがお互いに直撃し てエビルは、 気付いたらこの空間に居た。

シンヤ

(ん?)

シンヤは、体から何かが出て来る事を感じた。

それは、 彼らテッカマンにする為のラダム虫であった。

シンヤ

(そうか・・・僕は・・・死ぬんだな・・)

ラダム虫が出て来ると言う事は、 彼らテッカマンの死を意味する。

シンヤ

(僕は、 勝ったのかな?ラダムに・ タカヤ 兄さんに

•

シンヤは、死を覚悟して目を閉じた。

1944年

扶桑皇国横須賀第四女子中学校

少女A

「芳佳ちゃん!危ないよ!」

少女が芳佳と呼ぶ少女は、崖に生えた枝の上にいた。

少女A

「やっぱり先生呼んでこようか!?」

芳 佳

「だ・・大丈夫・・何とかするから。」

芳佳は、 枝から降りられなくなった子猫を助ける為に上った。

芳 佳

「絶対助けるから!」

芳佳は、それでも子猫を助けたい一心。

しかし、 の後先生に怒られた。 枝が折れて落ちたが怪我一つも無く子猫も無事だったがそ

い帰る。 その帰りに芳佳の親友の美智子の祖父の乗り物に一緒に乗せてもら

ドカアァァァァァァァァンンンソー!

「うわああ!!」美智子の祖父

美智子/芳佳

「「きゃあああああ!!!」.

突然空から何かが森の中に落ちて来て芳佳達は、 驚いた。

芳 佳

「何だろ?」

芳佳は、森の方に行った。

ザッザッ!

芳佳は、森の茂みを退かしながら奥に進む。

芳 佳

!

た。 よく見ると大きなクレーターの真ん中に変な服を着た男が倒れてい

芳 佳

「あの!しっかりしてください!」

青年

•

芳佳の声にも男は、反応しない。

スッ!

芳佳は、 男の人の手を握ると脈が弱まっていた。

カサカサ!

芳 佳

?

ラダム虫

【ガアアアアッ!!】

芳佳が振り向くと変な形の虫が襲い掛かる。

芳 佳

「おやああああ!虫イイイイ!

ゴツン!

芳佳は、 近くに有る大きな石を持ち上げて潰した。

ラダム虫

【ガアァァァ・・・・・

ラダム虫は、体から緑色の体液が出て死んだ。

キィィィィンンンン!!

尾が出て来た。 芳佳が両手を男に翳すと周囲が光出して芳佳の体から柴犬の耳と尻

芳佳

「絶対に助けますから・ ハアッ ハアッ 八アツ」

芳佳は、 が上がっていた。 治癒魔法の力を持っているが初めて魔法で治療するので息

女性A

「落ち着け宮藤。

芳佳の後ろから右目に眼帯を付け白い軍服を着た女性が立っていた。

女性A

んだ。 「集中し しろー 意識を乱すな肩の力を抜いて魔法をコントロー ルする

芳 佳

(魔法をコントロール・・・)

女性の言葉に従い魔法を使う。

そして男の人の顔色も生気が蘇る。

芳 佳

(良かった・・・あれ?)

芳佳は、 治療が終わると目の前が真っ暗に成った。

青年

「ん・・此処は?」

青年・ 相羽シンヤは、 目覚めると何処かの診療所の中で眠って

いた。

「気が付きましたか?」

シンヤは、振り向くと二人の女性が居た。

人は、 シンヤより18歳以上年の離れた女性と初老の女性が居た。

女性 B

脈も正常ですしゆっくり休養すれば良くなりますよ。

女性が言う。

シンヤ

「ありがとうございます。

女性B

いいえ。 私達は治療をしていません。 治療をしたのはこの子です。

_

女性が別のベッドで眠っている少女だと指差す。

芳 佳

「はっ!」

少女:芳佳が勢い良く目覚めた。

女性 B

「大丈夫よ。」

芳佳

「えつ!?おかあさん。」

芳佳の母

「貴女の御蔭でこの人は、無事でいるわ。

「やぁ!」

シンヤは、笑顔で芳佳に言う。

芳 佳

「良かった・・・」

芳佳は、安心の表情に変わる。

芳佳の祖母

「相変わらず力の使い方が成っちゃいないね。 気持ちばかり先に出

• • •

芳佳

「····」

芳佳は、祖母の言葉に何も言い返せなかった。

芳佳の祖母

方を覚えないと自分の命を落とすことに成るんだよ。 「みんなの為に何かしたいって気持ちは解るけど私達の力は、 使い

シンヤ

(何を言っているんだこの人達は?)

シンヤは、 会話の意味が解らなくて混乱している。

芳佳

「だって・ 私だって・ 私だっておかあさんやお祖母ちゃ

ん様に皆を助けたいの!それに・ ・約束したから・

シンヤは、少女が誰かと約束した事に気付く。

シンヤ

「大丈夫だよ。」

芳佳

「ありがとうございます。.

????

「そうだぞ。そう落ち込むな。」

芳佳

「うん・・・えっ!?」

芳佳は、 振り向くと椅子にあの時の女性が座っていた。

女性

「お前の才能は、 ずば抜けている。 使い方さえ学べば立派なウィッ

チに成れるはずだ!」

シンヤ

「あの・・・

女性

「何だ?」

シンヤ

「取り込み中悪いんだけど・ ・何でスカートを履かないの?」

女性

「スカート?何だそれは?」

シンヤ

「いや・・・軍服の下に履いているのは?」

女性

「ズボンだが?」

「ズボンよ。」

芳佳の祖母 「ズボンだよ。」

芳佳

「ズボンですよ。

一同は、何の迷いも無く言う。

シンヤ

(あれ?僕の感覚がおかしいのおオオオオオオオオオオオオオ

シンヤは、心の中で突っ込んだ。

女性

「本題に戻って。ウィッチに入らんか?」

芳 佳

「あの・・」

女性

「何だ?」

芳 佳

「貴女何方ですか?」

女性

少佐だ。 1統合戦闘航空団・ 「ああ・ ・すまない。 通称ストライクウィッチー ズ所属坂本美緒 挨拶がまだだったな。 私は、 連合軍第50

芳 佳

「こんにちは。.

芳佳の母

「この人と貴女を此処まで運んで来れた人よ。

芳佳

「運んで?」

美緒

だ。 「私達は、 お前の力は見せてもらった。 強大な魔力を秘めた招来有望なウィッチを探しているん 荒削りだが良い物を持っている。

芳佳

「ありがとうござます。

美緒

「と言うわけでその力を生かして供にネウロイっと戦おう!」

芳佳

「はい!・ ・ってえええ!!?」

その言葉で芳佳だけでなく母や祖母も驚いた。

シンヤ

軍隊・

芳佳

「お断りします。私学校卒業したらこの診療所を継ぐんです!」

美緒

ſΪ だが、 その力をもっと必要としている人達がいるんだ。 まあお前が診療所を継ぎたいっと言う気持ちはすばらし

シンヤ

「まって!」

美緒

「何だ?」

シンヤ

出るように誘導して、足りない人員を補強しようって魂胆ですか?」 「僕の名前は、相羽シンヤです。 話を聞いていましたが協力を申し

美緒

「何が言いたい?」

美緒は、シンヤを睨む。

シンヤ

「文字通りの意味ですよ。.

シンヤは、今までと違い冷たい瞳をして美緒を見つめる。

美緒

ふう・ ・まあ良い。 だが、宮藤お前は、 必ず私の所に来る。

芳佳

「な!何でですか!?」

美 緒

行きたくなったら来い。 いる場所に導かれる。 では港で待っている一週間滞在しているから 「ん?勘だよ勘。だが力の有る者は、 もっともその力を必要として

美緒は、そう言うと診療所を後にした。

芳佳

「ベーーーー!!なんなの!もう!」

芳佳は、不愉快だった。

シンヤは、芳佳達の診療所の手伝いをしていた。

配達員

「郵便でーす!」

芳 佳

「はーい!」

芳佳は、郵便を受け取った。

芳 佳

「っ!?おかあさん!お婆ちゃん!」

芳佳は、その手紙を見ると診療所の二人の所に駆け出す。

シンヤ

「どうしたんだろ?」

シンヤも診療所に向かった。

芳 佳

「どうしておとうさんから手紙が?」

どうやら芳佳の父からの手紙らしい。

芳 佳

「おとうさん死んだんじゃないの!?」

シンヤ

「えつ?」

シンヤは、驚いた。

明るい芳佳にそんな辛い過去がある事に。

芳佳の祖母

「落ち着きなさい。」

シンヤ

「お祖母さんの言う通りだよ。」

芳佳の母

「ブリタニアから投函されてるわね。」

芳佳の母は、手紙の宛先を見て答える。

芳佳の祖母

「何故今頃に成って?」

そう言いながらも手紙から二枚の写真が出て来た。

枚目は、 眼鏡をかけた優しそうな男の写真だった。

芳佳

「おとうさん。」

シンヤ

「この人が芳佳のお父さん?」

シンヤが聞くと芳佳は、頷いた。

シンヤ

「もう一枚は・・・ん!?」

シンヤが最後の一枚の写真を見ると一同は驚く。

は、奇妙な機械が置いてあった。 先日来た坂本と言う女性と芳佳の父が映っているのと中央の部分に

芳佳

「あの人がおとうさんを知っている・・・」

シンヤ

あ心細いと思うから。 「芳佳行くんだろ?だったら僕も一緒に来ても良いかい?一人じゃ

芳佳

「シンヤさん・・・ありがとうこざいます!」

芳佳は、急いで外に出る。

シンヤも外に出ようとすると

芳佳の母

「芳佳の事をお願いします。」

芳佳の母と祖母は、シンヤに頭を下げた。

シンヤ

「頭を上げてください。 解りました。 芳佳は、 責任を持って守りま

シンヤも芳佳の後を追う。

芳佳とシンヤは、街に着くと早速港の方に向かう。

向かうと美緒が立って待っていた。

美緒

だな。 な。 「来たな。 いやよく決心してくれた。 自分の力を活かす気成った様

芳佳

「あの・・・・」

美緒

せておけ!」 「大丈夫!何も心配するな。 入隊手続きは、 学校の事は全部私に任

っ 皇 う ヤ

「違うよ!それとは別件で芳佳は来たんだよ。

美緒

「はっはっはっはっはっ!」

美緒は、 笑って誤魔化したがワケを芳佳から聞く。

美緒

「宮藤博士から手紙?」

美緒は、顔色を変えて考える。

芳佳

「あの!坂本さんはおとうさんの事・・・」

美緒

られる。 「ああ!博士は、 恩人だ。 博士の研究があったから私は今此処にい

芳佳

「おとうさんは、生きているんでしょうか?」

シンヤ

「芳佳・・・」

シンヤは、芳佳の気持ちが痛い程理解していた。

ッカマンとしてシンヤの父は、兄のタカヤを助けて、そしてアルゴ 取り込まれて自分もテッカマンエビルとして覚醒するまで不要なテ アルゴス号で宇宙の調査に行っていた相羽家や乗組員は、ラダムに ス号ごと自分を自爆して月面に落ち死んだからその気持ちが解る。

美緒

リタニアに!行っておとうさんの事を確かめたいんです!」・ 「それは、 解らん。 だが確かめて 連れて行って下さい!ブ

バシッー

シンヤと芳佳の肩を叩く。

美緒

「良い目だ!数日後に出航だ!」

芳佳

「ありがとうこざいます!」

シンヤ

· ありがとう。」

二人は、美緒に感謝した。

美緒

「ところで入隊手続きだか・・・

芳 佳

「入りません!」

シンヤ

「だろうね...」

芳 佳

「戦争だけは絶対しませんから!」

美緒

「はっはっはっはっ!解った解った。

した。 こうして芳佳とシンヤは、坂本美緒に連れられてブリタニアに出航

た。 出航してから数時間が経ち夕暮れ時に芳佳は、寂しそうな表情だっ

シンヤ

「寂しいかい?」

すると隣にシンヤが心配に芳佳を見る。

美緒

「どうだ赤城の乗り心地は?」

美緒も来た。

芳 佳

あっはい。凄い快適です。」

美緒

戦う最前線だ。 筈だ。ブリタニアがどうなっているか。 「そうか・・ だが快適なのは船の上だけだぞ。 大陸を制圧したネウロイと お前も知っている

シンヤ

「ネウロイって何?」

シンヤは、勇気を持って美緒に聞く。

美緒

「貴様それも知らんのか!?」

美緒は、驚く。

美緒

が何者なのかも何処から来たのかも何も解らない。 も現実だ。 敵である事には変わらない。 「まぁ良い。 ネウロイは、 突如この世界に来た謎の敵だ。 多くの人々が故郷を捨て逃げているの だが我々人類の ネウロイ

シンヤ

「そんな事が・・・」

シンヤは、驚く。

美緒

「宮藤に聞く。 本当に父親の事を確認するだけか?」

芳佳

「ブリタニアには、 困っている人達が沢山居るんですよね?」

美緒

「ああ。大勢いる。

芳佳

立ってたいんです!おとうさんと約束したんです!」 「私・・・守りたいんです。 傷付いた人沢山の人の為に私の力を役

シンヤ

(そうか・ ・芳佳は、 お父さんとそんな約束をしたのか。

シンヤは、芳佳が人々を助けたい理由を理解した。

芳 佳

やります。 「坂本さん。 何かする事はありませんか?掃除でも洗濯でも何でも

美緒

「よ~しっ!

バシッ!

美緒は、芳佳の肩を叩く。

美緒

「その意気だ!はっはっはっはっ

芳佳は、 洗濯や掃除を。

シンヤは、 料理を始める。

シンヤ 「芳佳~ !居るかい?」

シンヤは、 探し始めた。

シンヤ 「ん?」

シンヤは、 何故かカーテンがかかっている乗客ベッドを見つける。

ザッ!

芳佳

「きゃつ!/

芳佳が着替えている所を知らずにシンヤが見てしまい芳佳が顔を真

っ赤にする。

シンヤ ツ

シンヤは、直ぐに廊下に出ると大量の鼻血を出して廊下を鼻血で汚 して倒れた。。

芳佳とシンヤは、 そんな事が続いて1ヶ月後の事だった。 甲板の掃除をしている最中だった。

美緒

。 あ ~ たい物がある。 !宮藤!相羽!甲板に居るのか?そこを動くな。 6 見せておき

芳佳/シンヤ

「えつ?」

しばらくすると足に妙機械を履いた美緒が出て来た。

そう宮藤博士が送った手紙の写真の中に映っていた機械だった。

シンヤ

(そう言う為の物だったのか。)

シンヤは、妙な機械の意味を理解した。

美緒

「坂本美緒。これより飛行訓練を行う。」

美緒の頭には、犬の耳と尻尾が生えていた。

シンヤ

「芳佳あれって?」

芳佳

チに力をくれるんです。 「ウィッチには、 使い魔がいてそれぞれ違う動物の使い魔がウィッ

等と芳佳がシンヤに説明した。

すると美緒の足に着けているストライカーユニットの先端からプロ ペラが現れ回転し始め床から魔法陣が現れた。

ストライカーユニットが射出されると美緒は、 空を飛び始めた。

「うわっ~・・・・シンヤ/芳佳

を行っている。 二人が見ると直ぐに美緒は、 小さい豆粒位成るまで遠くで飛行訓練

芳 佳

「すごい・・・」

芳佳の目は、輝いていた。

飛行訓練を終えた美緒は、 に立っていた。 ストライカー ユニットを戻すとカンパン

芳 佳

「坂本さん!」

芳佳は、美緒に駆ける。

美緒

「どうだ?」

芳佳

でした。 「感動しました!あんなにカッコ良く飛ぶなんて!まるで鳥みたい

美緒

空を駆ける魔女・ 「あっはっはっはっはっはっ!鳥か!だが私達は、 ストライカーウィッチーズ!」 鳥にあらず。 青

芳佳

「ストライクウィッチーズ・・・」

シンヤ

「凄すぎる・・・」

美緒

士の・ 「そしてこれが私達の魔法の箒・ ・・お前の父上が成し遂げた仕事だ。 ・ストライカーユニット。 宮藤博

美緒の言葉から驚く事実が発覚した。

ストライカー ユニットは、 芳佳の父親が作った物らしい。

芳佳

「これがお父さんの!?」

美緒

なんだ。 戦える力を得た。 いたかもしれん。 「ストライカーユニットの開発によって私達は、ネウロイと互角に 宮藤博士は、 これが無かったら世界は、ネウロイに征服されて 私達にとっても人類にとっても恩人

芳 佳

「おとうさん 着けてみたら?」えっ?」

シンヤが芳佳に勧めた。

美緒

「相羽の言う通りだ。 お前の父上が開発した物だ。遠慮する事は無

芳佳は、 美緒やシンヤの言葉でストライカーユニットに触れる。

だが

芳佳

「止めときます。.

美緒

「そうか・・・」

芳佳

「おとうさんの仕事は、 よく解りました。 でも戦争は、 嫌です!」

「だってさ!」シンヤ

美緒

「ふつ・・・」

美緒も諦め顔に変わる。

美緒

. !

美緒は、 顔色を変えると空を見て右目の眼帯を外すと紫色の目で空

の彼方の見る。

坂本美緒の右目には、遠くまで見れる魔眼が宿っている。

美緒

「つ!敵襲!12時方向!距離4000!」

すると艦隊に警報音が響き渡る。

ろとしていた。 これから相羽シンヤ:テッカマンエビルとウィッチ達の物語が始ま

To be CONTINUED

第一話:別次元から来た騎士 (後書き)

カマンエビル」 空の騎士テッカマンエビル(第二話:敵か見方か?漆黒の魔神テッ た漆黒の摩神を見た少女の瞳は、絶望か?それとも希望か?次回 美緒「高音は、空気を裂き。少女の心を揺さぶる。そして突如現れ

テッカマンエビルの初登場です。

第二話:敵か見方か?漆黒の魔神テッカマンエビル

副官

「全艦隊。 進路を維持しつつ全速で回避行動をとれ。 繰り返す。

抗して回避行動に移っていた。 赤城の副官は、 他の戦艦に命令を出し砲台や飛行機でネウロイと対

しかし艦隊の攻撃等ネウロイに全くと言って良い程効いていない。

赤城司令官

「奴め。何故一思いに攻撃して来ない?」

副官

「我々をもて遊んでいるのでしょうか?」

赤城司令官

「全戦闘機隊に攻撃命令を出せ。」

副官

「はっ!」

副官は、 司令官の命令を聞き戦闘機隊に命令を出す。

赤城司令官

窮鼠猫を噛むと言う言技を奴に教えやれ。.

シンヤ

をしているが芳佳の顔が怯えて励ますシンヤ。 「芳佳大丈夫かい?」シンヤと芳佳は、美緒の命令で医務室に非難

芳 佳

「・・・・」

シンヤが話し掛けているが芳佳の耳に入らなく怯えたままだった。

シンヤ

「芳佳!」

シンヤは、軽く芳佳の肩を叩く。

芳 佳

「はっ!」

それでも不安一杯の顔だった。

芳 佳

「坂本さん戦っているんですね?」

「そうさ。」 シンヤ

シンヤは、解りきっている質問に答える。

シンヤ

「ん?」

シンヤは、医務室の薬や包帯を見た。

シンヤ

「芳佳。僕達の出来る事をしよう。

包帯や薬を持ってシンヤが言うと芳佳は、 頷く。

そしてシンヤと芳佳は、傷付いた人々の治療を始める。

ドカアアアアンン!

「うわっ!」シンヤ

芳 佳

「きやあぁ!」

突如真上からネウロイの攻撃が当たり天井の瓦礫に埋もれてしまう。

シンヤ

゙ ん・・・・?はっ!芳佳?芳佳!芳佳!ぁ!」

た。 シンヤは、 周りの人々より先に目を覚ますと瓦礫の中に埋もれてい

芳佳や他の傷付いた人々も同じだった。

シンヤが呼び掛けているが芳佳は、目覚めない。

シンヤ

(仕方ない!)

シンヤは、 芳佳達が気絶していると解り懐からクリスタルを出す。

シンヤ

「テックセクタアアアアアアア!」

シンヤは、クリスタルを翳すとクリスタルの形のフィ して体が黒い装甲を形成し頭部は、 漆黒のヘルメットの紅のバイザ ールドを形成

ーが出来上がった。

漆黒の魔神

『とう!

シンヤは、 漆黒の魔神に変身すると瓦礫から出て来た。

漆黒の魔神

『テッカマンエビル!』

エビルは、 瓦礫に埋もれた芳佳達を直ぐに助け出す。

た。 エビルは、 芳佳を安全な所に他の傷付いた人々と一緒に連れて行っ

芳 佳

「ん・・・」

芳佳が気が着き始める。

芳 佳

(誰かに抱き抱えられている?)

エビル

『・・・・・大丈夫かい?』

エビルは、 自分が人間出ない事が芳佳に理解されるのが怖がったが

勇気を出して言葉を言う。

しかし

芳 佳

「お・・・おとうさん?」

芳佳の目に映っていたのは、 エビル出なく父親の姿だった。

そして芳佳は、思い出した。

芳佳の父

ಠ್ಠ 【芳佳。 その力でみんなを守れる立派な人に成りなさい。 お前には、 お母さんやお婆ちゃんに負けない大きな力が有

「 はっ!」

芳佳は、目覚めるとエビルが居る事に気付く。

エビル

?

エビルは、近くに驚く物を芳佳より先に見つけた。

それは、 もう一つのストライカーユニットだった。

エビル

『それを着て君の守りたい人々の為に戦うんだ。

エビルは、ストライカーユニットを芳佳に見せた。

芳 佳

「解りました!そしてありがとうごさいます。 シンヤさん。

エビル

『えっ!?気付いていたの?』

エビルは、芳佳が自分を見て怖がると思ったが全く予想外だった。

芳佳

「だって声や言葉で解りましたよ。」

エビル

(芳佳・・・・恐ろしい子・・・)

エビルは、 何処かの少女漫画のキャラクター のセリフを心の中で呟

副官

「駆逐艦神風直撃!応答ありません!」

「もはやこ赤城司令官

「もはやこれまでか?総員!退艦準備!」

通信兵

「総員退艦準備!」

副官

「どうした?何が起きている?」

赤城司令官

?

副官が何かが起きた事に気付く。

副官

艦長。 中央エレベーターが作動中。 誰か居ます。

副官の言葉に赤城司令官は、外を見る。

芳佳とテッカマンエビルの姿が現れた。 其処には、 ストライカー ユニットを履いた柴犬の耳と尻尾の付いた

芳 佳

「私に出来る事・ ・約束を守る為みんなを守る為に!」

エビル

『そうだ!その通りだよ芳佳。』

赤城司令官

あの黒い魔神は一体!?」 「だ!誰だ!?何故ストライカーユニットを履いている!?それと

副官

「坂本少佐が連れて来た少女です。名前は・ 「宮藤芳佳です

赤城司令官

「宮藤?あの宮藤博士の!?だがあの黒い魔神は!?」

エビル

『テッカマンエビル!』

転させるとエビルも背中のブー ストで飛び上る準備をする。 エビルがそう言うと芳佳は、 ストライカー ユニットのプロペラを回

空の真上では・・・・

美緒

宮藤?それにアレは?」

美緒もエビルの存在に気にづき、 顔を向ける。

行きます!」

ブゥゥゥゥゥゥ

芳佳がストライカー ユニットを発進させるとエビルも背中のブース トで加速する。

ネウロイは、 芳佳達の存在に気付くと芳佳に目掛けて攻撃を放つ。

芳佳

「くつ!」

芳佳は、 バランスを制御するのが精一杯で回避出来ない。

エビル

『援護は、 僕に任せろぉ

高回転させながらネウロイの攻撃から芳佳を守った。 エビルは、 長い槍テックランサーを出すと十時に変形させて両手で

芳佳

「飛んでえええええ!」

芳佳は、 ストライカーユニットが飛ぶ様に頑張る。

美緒/エビル

『飛べえええええ!宮藤い い L١ ١١ ١١ (芳佳あああああ

そして・・・・

芳佳

「つ・・・」

芳佳が勇気を持って目を開けると空をエビルと一緒に飛んでいる。

芳 佳

「と!飛べた!」

芳佳は、喜ぶ。

美緒

「なんて奴だ。初めてストライカーを履いたと言うのに『そんなに

凄いの?』えっ?」

美緒の後ろには、エビルが居る。

美緒

「貴様は、一体!?」

エビル

『僕かい?』

美緒

「僕?それにその声は、相羽か!?」

美緒もエビルの正体に気付く。

芳 佳

「坂本さあああああん!」

芳佳は、エビルと美緒の前を通り過ぎる。

美緒

「おい。何処に行く!?」

エビル

『大丈夫かい?』

芳 佳

「私手伝います!」

ネウロイが芳佳に再び攻撃を放つ。

美緒

「宮藤!」

シュッ!

美緒が芳佳の名前を呼ぶとエビルは、 何時の間にかネウロイの後ろ

にいた。

エビル

『テアアアアア!』

ಠ್ಠ エビルは、 十時型のテックランサーをネウロイに投げて体勢が崩れ

エビル

『美緒!戦闘機隊を全員赤城に戻して!』

美緒

「何!?」

エビル

『僕らより彼等の方がネウロイの恰好の的に成ってしまう!それに

動き辛い!』

美緒

「解った!」

美緒は、 インカムで赤城司令官に言うと素直に飛行機隊を戻す。

美緒

(何て奴だ。 短時間で的確な指示を出すとは!)

美緒は、エビルの指揮能力を評価する。

芳佳

「おやあああ!

芳佳は、 ネウロイの放った攻撃をシールドで守って防ぐ。

美緒

イの背後にまわって攻撃を!?」 「なんて大きなシールドだ!?それに相羽は、 何時の間にかネウロ

美緒

「面白い!」

美緒は、二人の所に来る。

美緒

「美緒!相羽!よく来た!」

芳 佳

「坂本さん。鉄砲を。

芳佳は、 刀だけの美緒に鉄砲を渡そうとするが「それは、 お前のだ。

使え。」

芳 佳

「えつ?」

美緒

「守りたいんだろ?」

芳佳

「はい!」

エビル

『なら僕も全力で協力をするよ。

美緒は、エビルと芳佳を自分の左右の頬に顔を寄せると刀をネウロ

イに向ける。

エビル

(当たっている!美緒の暖かく膨らんでいるアソコに僕の背中が当

たっている!!!。)

エビルは、鼻血を吹きそうだが我慢した。

美緒

にお前達は、 「あの辺りに奴のコアが隠れている。 コアを壊すんだ。 出来るか?」 私が攻撃を引き付けている隙

芳佳

「はい。やります!」

エビル

『解ったよ!』

美緒

「良し!二つ数えたら私に着いて来い!」

美緒は、刀でネウロイを攻撃して引き付ける。

エビル

『大丈夫!自分を信じて!』

芳 佳

「はい!」

芳佳とエビルは、 ネウロイのギリギリ近くまで加速する。

エビル

『テアアアアア!』

エビルは、 テックランサーを投げてネウロイを引き付ける。

芳 佳

(信じるんだ宮藤芳佳!)

芳佳は、銃に狙いを定める。

バッバッバッバッバッバッ!!

芳佳は、 銃でネウロイの体を壊すと赤い石が現れる。

芳佳

(あれがコア!?)

エビル

『よくやった!美緒!芳佳!僕の後ろに来て早く!

美緒と芳佳は、エビルに考えがあると確信してエビルの後ろに来た。

エビル

『後は、僕に任せろぉぉぉ!』

出口が赤く輝き、そこに強大なエネルギーを持つ光を収束していく。 エビルの左右胸部に埋め込まれているレンズ部分..... ボルテッカ射

ネウロイは攻撃を仕掛けようとするがかまわずに収束を続ける。

距離は縮まっているが、 こちらも準備を終了させた。

エビル...シンヤは間髪入れずにそれを解き放つ。

エビル

『ボルテッカアアアアアアア!!』

ドカアアアアアアアンンン!!

エビルから巨大な光がネウロイに向かって放出される。

滅した ネウロイは巨大な光.....ボルテッカを避ける事が出来ず、 一瞬で消

美緒/芳佳

•

エビルのボルテッカを見た二人は、唖然とした。

芳 佳

「やった・・・のかな?」

止める。 すると芳佳は、 気絶してそれを解っていたのかエビルが優しく受け

美緒

お前な相羽。 「大した奴だ宮藤。 何の訓練も無しで此処までやるとはな。 そして

エビル

'いや・・僕は、何も・・・』

エビルは、照れ臭そうに言う。

美緒

「そんな事は無い。見ろ。

美緒が下を指すと赤城や他の戦艦隊の人々が手を振っている。

エビル

『!・・・・あれは?』

エビルが美緒に空の彼方から来るのを聞く。

美緒

ィッチーズだ。 「あれは、援軍の第50 部隊統合戦闘航空団・ ストライクウ

????

「坂本少佐ぁぁぁぁぁ!!」

眼鏡を付けた少女が美緒の所に来る。

た。 だが少女の映った美緒は、エビルと戯れている姿にしか見えなかっ

????

「何なのですの!あの小娘と魔神は!?」

エビル

(あれ?何だかあの娘に悪い事をしたかな?)

美緒

「ペリーヌご苦労だったな!あっ はっはっはっ はっ はっ

美緒が眼鏡を付けた少女をペリーヌと呼んだ。

????

何だ!? あの黒いロボットみたいな奴は

????

ペリー うっしっしっしっ!後でからかってやろーっと!」 ヌの奴・ 少佐に黒い変なのが仲良くして怒っている

きい女性と褐色の肌をした豹の耳と尻尾を付けた少女が来た。 向こうからウサギの耳と尻尾を付けた • 胸 の大

美緒と一緒に宮藤博士の居た場所に向かった。 こうしてストライクウィッチーズ達と合流したシンヤ達は、 直ぐに

場所に来た。 シンヤ達が着いた場所は、 もう建物も無いが微かな煉瓦の跡が残る

芳 佳

「此処が この手紙に書いてあった場所?」

美緒

いたんだ。 「ああ。 五年前まで宮藤博士は、 あの事故の日も。 此処でストライカー の開発をして

芳佳は、美緒の言葉を聞くと動かなくなる。

芳佳

「坂本さん 坂本さんは、 知っていたんですか?」

美緒

「すまん・・・」

美緒は、申し訳なさそうに言う。

芳佳

処まで連れて来て貰って感謝しています。 「そんな ・謝まらないで下さい。 私の方こそ我が侭言ったのに此

シンヤ

「芳佳・・・・」

結局芳佳の父親の消息不明のままでシンヤは、 無慈悲な現実を恨む。

美緒

渡された物だったんだろ。 「私も博士と此処で暮らして居たんだ。 その手紙もやはりその頃に

芳佳

が無いのかなぁ私達って・ 突然手紙が届いてもしかしたらって思ったけど・ って亡くなった知らせが届いたのが10才の誕生日。 「おとうさん何時も間が悪いんですよ。 小学校の入学の日に出て行 • 親子なのに縁 今頃に成って

ブリタニアにある芳佳の父親の墓を見ながら呟く芳佳。

シンヤ

あれ?」

シンヤは、墓石に彫られた文字を読む。

シンヤ

「その力を多くの人を守るために・・・」

美緒

ライカーユニットもそんな博士の思いから生まれた物だ。 「相羽、宮藤。 それは、 何時も宮藤博士が言っていた言葉だ。 スト

芳佳

「おとうさん・・・」

芳佳の目から涙が今にも流しそうだった。

ガシッ!

芳 佳

「えつ?」

シンヤが芳佳を抱き締めている。

芳佳

「シンヤさん?」

シンヤ

「泣きたいなら好きなだけ泣きなよ。 悲しい時に泣けない何て・

・悲し過ぎるよ!」

シンヤは、自分の死んだ母親から男が泣くな!っと言われたがシン ヤにはそんな機械的な考えが出来なかった。

芳 佳

「シンヤさん・ ・うううっ・ ・うわああああああああ

芳佳は、シンヤの胸の中で好きなだけ泣き始める。

そして陽も夕暮れ時に成り始めた。

美緒

「そろそろ行くか?」

シンヤの胸の中で泣き続けていた芳佳も泣き終わったのを見て言う。

芳 佳

「はい。あ、あの・・・」

美緒は、芳佳の言葉を聞いて止まる。

美緒

「何だ?」

芳 佳

「あの 坂本さん。 私をストライクウィッチー ズに入れて下さ

し! !

美緒

「 何 ?」

美緒は、 芳佳から信じられない言葉を聞いて驚く。

芳佳

為に。 「 此処に残って私の力を使いたいんです。 もっと沢山の人達を守る

シンヤ

「決まったんだね?」

芳 佳

「はい!」

芳佳は、決意の瞳でシンヤに言う。

美緒

「宮藤。」

芳佳

「きっとおとうさんもそう願っていると思っています。

美緒

ィッチにビシビシ鍛えてやるからな覚悟しとけよ!」 「そうか・ ・はっ!よ~~しっ !後は、 私に任せる!一人前のウ

シンヤ

「なら僕も芳佳の手助けをするよ!」

美緒

「そうか!そうか!あっはっはっはっはっはっ!!」

行く事となった。 こうして宮藤芳佳と相羽シンヤは、 第501部隊統合戦闘航空団に

o be CONTINUED

第二話:敵か見方か?漆黒の魔神テッカマンエビル (後書き)

リーネ

勇気」 あの・ も凄く出来る人だったら・・・・えっ?自分を信じてかんばって? 「新人さんが入隊しました。どんな人かな私よりも上手かな?もし ・・貴方は? 次回 空の騎士テッカマンエビル 第三話

第三話:勇気

???

無事扶桑からの増援と補給が届いた様だな

赤髪の女性

待遇としてます。 「坂本少佐及び補充員一名宮藤芳佳が着任しました。 ᆫ 通常通り軍曹

ばした中年男が赤髪の女性の報告を聞いている。 ブリタニアのとある会議室で体格の良い中年男と軍服を着て髭を伸

体格の良い中年男

「戦力の強化は、有り難い事だ。.

体格の良い中年男:ブリタニアの首相は、 喜ぶ。

もう一人の中年男

しかしネウロイの襲来が不定期に成っているそうじゃないか。

マロニー将軍が赤髪の女性に揚げ足を言う。

赤髪の女性

す。 「確かに今までの週一回のパター ンから徐々に間隔狭まって来てま

ブリタニア首相

告は、 先程のネウロイの戦いで漆黒の魔神がウィッチ達と戦ったとの報 あるが何か解ったか?」

赤髪の女性

ません。 「いいえ。突如現れ直ぐに去ってしまったので我々にも検討がつき

ブリタニア首相

「そうか・・・」

マロニー 将軍

「今のままでいくワケには、いかんだろうな。」

マロニー将軍は、またまた揚げ足を言う。

赤髪の女性

「現場を無視した空論を押し付けられるのは、 お断りしたはずです

が。

マロニー将軍と赤髪の女性は、お互いに睨む。

ブリタニア首相

んん!」

ブリタニア首相は、咳き込んだ。

ブリタニア首相

「結果が出せれば良いのだよ。」

赤髪の女性

「ご安心ください。 チーズが守ってみせます!」 ブリタニアの いえ世界の空は、 私達ウィ

赤髪の女性

「ふう・・・」

とホッとした。 赤髪の女性は、 報告を終えてストライクウィッチー ズの基地に戻る

ラシフヤ

「うううう!」

! ? 赤髪の女性

赤髪の女性は、昨日芳佳と一緒に来た男:相羽シンヤの部屋から呻

き声を聞き驚く。

守る。 赤髪の女性は、部屋に入るとうなされているシンヤを心配そうに見

グザッ!

???

シンアは、立『ああつ!』

気付く。 シンヤは、 暗闇の中で誰かが何かに刺されて悲鳴を上げている声に

グザッ!

???

『あううっ!』

更に同じ声の誰かが刺される音で悲鳴を上げる。

声からして高いので女性の声は、確かだった。

???

『ブレードは、何処だ?何処に居る?』

シンヤ

「この声は?」

シンヤは、 聞こえた声が誰なのかという事に直ぐに気付く。

それが自分自身の声だと言う事に!

暗闇がだんだん明るくなると薄暗い古い建物の中に自分・ ル以外にも4人のテッカマンが居た。 エビ

エビルの隣に居る細いテッカマンは、 テッカマンソード。

後ろに居る白いテッカマンは、テッカマンランス。

更に後ろに居る緑のテッカマンは、テッカマンアックスだった。

磔にされたシンヤの妹のミユキ・・ そしてエビルの正面・ ・胸に傷を負い、自身のランサーによって ・テッカマンレイピアがいた。

ソード

『答えるんだ!』

エビルに続きソードも言う。

レイピア

『貴方達に殺させはしない!』

レイピアは、断固として言わない。

グザッ!グザッ!

エビルは、 情け容赦無くレイピアを斬りつける!

『ああっ!』レイピア

レイピアは、悲鳴を上げる。

エビル

『楽に成りたいだろ?』

エビルは、 人間の皮を被った化け物の様にレイピアを拷問する。

シンヤ

「止めろ!頼む!止めてくれええぇぇ!」

シンヤは、 叫びながら悲願するがこれがシンヤの記憶とは知らない。

レイピア

『あ・・ !貴方達に殺させはしなぁぁぁい!』

レイピアは、苦痛を耐えている。

ランス

『てえい!』

アックス

『てあ!』

ランス、アックスもレイピアを痛め付ける。

シンヤ

「止めろ!止めろぉぉ!!」

シンヤの目からは、涙が溢れ出る。

レイピア

『貴方達に殺させはしなぁぁぁぁぁぃ!!』

レイピアの体には、 光が溢れ出てそれが徐々に大きくなる。

レイピア

『貴方達に殺させは、しないわ!』

レイピアの仮面の中から涙が溢れる。

シンヤ 「止めろ!止めるんだぁぁ!ミユキィィィィィ!!」

シンヤは、

妹のミユキの最後の記憶を見て泣き叫んだ。

「はっ!」

シンヤは、 チーズの基地の寝室に寝ていた。 目を覚ますと第501統合戦闘航空団ストライクウィッ

赤髪の女性

「あの・・・貴方大丈夫?」

横を振り向くと赤髪の女性が此方を心配そうに見つめる。

シンヤ

に? 「貴女は、 ミーナ・ディードリンデ・ヴォルケ中佐。 どうして此処

ミーナ

ミーナは、 「相羽さん知らないの?貴方さっきまで凄くうなされていたのよ。 頭から汗を大量に流すシンヤをタオルで拭いた。

シンヤ

「 ありがとうございますミーナ・ディー ドリンデ・ヴォルケ中佐。

ミーナ

「いいえ。 堅苦しい言葉使いは、 いいわ。 ミーナで大丈夫よ。

シンヤ

「ありがとうミーナ。」

ミーナ

「それより何にうなされていたの?」

ミーナは、シンヤの顔を見る。

シンヤ

「遠い遠い昔の悪夢を思い出していたんだよ

ミーナ

「そう・・・・」

良いと判断し止めた。 ミーナは、 シンヤが辛そうだったのでこれ以上の質問をしない方が

ミーナ

「相羽さん。 私は、 これからする事が有るんで失礼するわね。

ミーナは、シンヤの部屋のドアを閉めた。

ミーナ

(何で美緒は、彼まで連れて来たのかしら?)

ミーナは、 美緒に何か考えがある事を解っていた。

ていた。 基本的にストライクウィッチーズは、 男性との関わりを固く禁止し

それは、 彼女の幼なじみで最愛の男性を失った。

た。 その為かこんな思いを二度としないと男性との関わりを固く禁止し

ミーナは、 古い過去を思い出しながら隊長室に向かう。

シンヤ

(そうか・ 今日から此処で暮らすんだな。)

シンヤは、 窓から外を見ると美緒が沖合いで真剣を素振りしている。

シンヤ

(行ってみるか。

シンヤは、 の上からGジャンを羽織り向かう。 沖合いに向かう為Gパンと赤と黒のネルシャツを着てそ

美緒

「はつ!やあつ!」

美緒は、 刀で素振りや剣舞の練習を休まずに続ける。

美緒

「相羽か。どうだ?良く眠れたか?」

シンヤ

「うん。美緒は、こんな時間から練習かい?」

美緒

「あっはっはっはっはっはっ!まぁそんな感じだ。ところで相羽お

前に聞きたい事があるのだが。」

「何だい?」シンヤ

美緒

「お前は、 宮藤の事を何時も気にかけているのだが?別に無理して

答え無くていいぞ。」

それを聞いたシンヤは、 エメラルドグリーンの長い髪をして微笑み

シンヤに手を振る少女を思い出す。

シンヤ

「妹に・・ミユキに似てるんだよ。」

美緒

「妹か・・・お前に妹がいるのか。」

シンヤ

「うん けど死んじゃったよ・・・」

シンヤは、悲しい表情に変わる。

美緒

「なっ!」

美緒は、言葉が出て来なかった。

美緒

(まさか!あの明るい相羽にそんな辛い過去があったなんて!)

美緒は、この重い空気を変えようと考えていた。

そんな時だ。

芳 佳

「坂本少佐!シンヤさん!」

芳佳も来た。

シンヤ

「芳佳おはよう。」

美緒

「宮藤おはよう。」

芳佳

「おはようございます。

芳佳は、二人に挨拶をする。

美緒

「お前と私は、海軍だから少佐は付けなくて良いぞ。

「はい・・・坂本さん・・・」

芳佳

芳佳は、ぎこちなく言う。

美緒

「そう。それでいい。(助かった・・・)」

美緒は、内心芳佳に感謝した。

ピカッ!

別の窓から誰か此方を覗いている。

ペリーヌ

んん!あの新人とお手伝い!坂本少佐とあんなに仲良くして・

何なの一体!?それにあのお手伝い坂本少佐とくっ付き過ぎでして よ!(、 o、)」

ペリーヌは、シンヤを睨む。

ゾクッ!

「うっ! (・・・・・)」シンヤ

シンヤは、突然の寒気が襲う。

美緒

「どうした相羽?」

芳 佳

「シンヤさん?」

二人は、シンヤを心配する。

シンヤ

「いせ・ ・何でも無いよ。 (何かに狙われているこの感覚は?)」

シンヤは、不安を抱きながら基地の中に入る。

朝、 のウィッチ達が座っている。 ミーナが芳佳とシンヤを連れて朝礼室に入ると美緒の他に9人

パンパン!

ミーナが手を叩いた。

ミーナ

手伝いさんを紹介します。 「はい皆さん。 宮藤芳佳さんと相羽シンヤさんです。 注目!改めて今日から皆さんの仲間になる新人とお 坂本少佐が扶桑皇国から連れて来てくれ

ミーナは、一同に言う。

芳 佳

「宮藤芳佳です。皆さん宜しくお願いします!」

シンヤ

くね!」 「相羽シンヤだよ。 色々解らない事があるかもしれないけどよろし

シンヤと芳佳は、一同に挨拶を済ませる。

ミーナ

げてね。 「宮藤さんの階級は、 軍曹なのでリー ネさんが二人の面倒を見てあ

「あっ!はい・・・」リーネ

気弱そうな少女:リー ネは、返事をする。

ミーナ

から。」 っ は い。 必要な書類、 衣類、 階級職、 認識標なんかはこの箱にある

ミーナは、 箱の上に置いて有る銃も渡そうとした時。

シンヤ

「待って。

シンヤは、芳佳の前に立つと銃だけミーナに返した。

ミーナ

「これはどう言うつもり?」

ミーナは、シンヤを睨むがシンヤも負けない位の冷たい目で睨む。

芳 佳

「すいません。私いりません。」

ミーナ

「そう・・・」

ミーナは、芳佳の意識もあり諦めた。

美緒

あっはっはっはっはっ!相変わらず面白い奴だな!相羽は!」

ミーナ

「じゃあ個別の紹介は、 改めてしましょう。 では解散!」

ミーナが言うとウィッチ達は、立ち上がる。

シンヤ

(可哀想だな。こんな年の子達が戦うなんて・

シンヤの心の何か痛んだ。

モニュッ!

解散が終了すると!

芳佳

「わうっ!///」

芳佳は、 後ろから誰かに胸を揉まれて顔を真っ赤にする。

シンヤ

「芳佳!ん!?」

気付く。 シンヤも自分の真ん中の大事な物の辺りを誰かに掴まれている事に

???

「どうだ?」

シンヤの後ろから触っている女性が芳佳のから胸を揉んでいる褐色 の少女に聞く。

褐色の少女

. ん~~~残念賞。_

褐色の少女は、ガッカリとした。

女性

「そうか・・・こっちは、一等賞モンだな。

ぽたっ!

シンヤの鼻から鼻血が一滴垂れる。

銀髪の少女

「リーネハ、胸ガ大キカッタ。ニヤリ!」

リーネ

· ////

リーネは、 顔を真っ赤にさせ机にうつ伏せになる。

女性

「あっはっはっはっはっ 私程じゃないけどな。

ポヨンポヨン!

女性の胸がシンヤの背中に当たる。

「ブゥーーーーッ!」シンヤ

バタン!

シンヤは、大量の鼻血を噴出すると倒れた。

女性

大尉だ。 「私は、 シャー シャー リーって呼んで。 ロット・E・イェーガー。 イベリオン出身で階級は、

シャーリーは、シンヤと芳佳に握手を求める。

芳 佳

「は、はい・・・」

ギュッ!

「うっ!」 対性/シンヤ

力強い握力に驚く。

シャー リー

「あっはっはっはっ

食べないと大きくなれないぞ!」

褐色の少女

「あ~~ つまんない・・・_

褐色の少女は、 シャー の胸の中に飛び込む。

銀髪の少女

ッ チデ寝テイルノガサーニャ 「エイラ・イルマタル・ ユーティライネン。 ・リトヴャク。 スオムス空軍少尉。 オラーシャ 陸軍中 \Box

褐色の少女

「私は、 フランチェスカ・ ルッキーニ。 ロマーニャ空軍少尉。

芳佳

「よろしくお願いします。.

シンヤ

「よろしくね。.

美緒

「よし。 午後から訓練だ。 自己紹介は、 其処まで各自任務につけ。 IJ ネと宮藤は、

芳 佳

「はい!」

美緒

「返事だけは良いな。」

美緒は、芳佳を誉めた。

美緒

「リーネ、 宮藤と相羽に基地の案内をしてやれ。

美緒は、リーネを見る。

リーネ

「りょ・・了解。」

リーネが席を立つと芳佳とシンヤが近付く。

芳 佳

「私、宮藤芳佳よろしくね。」

シンヤ

「相羽シンヤだよ。

リーネ

内気な感じの少女だった。

シンヤ達は、朝礼室を後にしてリーネが基地の案内をした。

リーネ

「宮藤さん。 相羽さん部屋の位置は解りますか?」

芳 佳

「うん大体は。

シンヤ

「僕もだね。」

シンヤも芳佳も自分の部屋の位置は、 大体把握している。

リーネ

・此処が私の部屋です。」

リーネは、足を止めると自分の部屋を教える。

芳 佳

「えつ!?私の部屋の隣だ!」

リーネ

「そうなんですか?」

シンヤ達は、先に芳佳の部屋を開けた。

リーネ

「空っぽですね。_

芳佳

「うん荷物まだ何も無いから。.

芳佳は、ミーナから貰った箱を部屋の机に置く。

リーネ

ったら今度案内しましょうか?」 「家具とか日用品ならちょっと遠いけれど良い店ありますよ。 良か

芳 佳

かな?」 「うわぁ ありがとう。 あたし大きな鍋が欲しがったんだけど有る

シンヤ

僕も軽くて使いやすい大きなフライパンが欲しいな。 _

リーネ

「はい。鍋やフライパンなら・・・」

リーネは、二人を食堂に来させた。

リーネ

「此処が食堂と厨房です。

シンヤ

「じゃあ此処が僕の持ち場かい?」

リーネ

はいそうですね。 たまにみんなが御国料理作ってくれますよ。

リーネが説明しながらシンヤ達は、厨房の中に入る。

芳佳

「 **~**~ 扶桑の料理食べてもらえるかな?」

リーネ

料理得意なんですか?」

シンヤ

ど芳佳の作ったお味噌汁が特に好きだな。 「芳佳の作る扶桑料理は、 美味しいよ。 僕は、 ᆫ 洋食しか作れないけ

芳佳

「はっはっはっはっ 得意って程じゃあ無いけど誰かに食べてもら

えるのが好きなの。」

芳佳は、シンヤに褒められて上機嫌だった。

シンヤ達は、 厨房を後にすると次に・ ・浴場 (地獄) に来た。

リーネ

此処で訓練が終わった後や疲れを取る為に入ります。

リーネが浴場内 (地獄) に入ろうとすると・

シンヤ

「ちょっと待った!」

シンヤが芳佳とリーネを止める。

リーネ

「何ですか相羽さん?」

シンヤ

ら入るのそれとも先に?」 「当たり前だと思うけど誰か入って無いよね?それに男性は、 後か

リーネ

後からに決まっているらしいので。 思いますよ。 「それなら大丈夫ですよ。 ミーナ隊長から相羽さんが入る時間帯は、 それにこの時間入って居ないと

シンヤ

「それなら安心だね。」

シンヤは、 内心ホッとした。

ガラッ!

シンヤ 「うわ~~ ・広いな・

芳 佳

「本当に広いですね。

芳佳とシンヤは、浴場の大きさに驚く。

「あれ?宮藤に相羽じゃないか?」

「えつ!」 シンヤ

シンヤは、何処かで聞いた声を聞いてオイルが切れたロボットの様

に声のした方に首を向いた。

シャー 「よっ!」 IJ

シャーリーだった。

しかも何の恥じらいも無く堂々と胸を隠していない。

シンヤ

「ブゥーーーーッ!」

バタン!

芳佳

「うわわっ!シンヤさん!」

リーネ

「しっかりしてください相羽さん!」

二人がシンヤの意識を確認したが鼻血を噴出した後目を回していた。

シャー リー

「おいおい大丈夫か?」

シャーリーは、面白そうに見る。

シンヤ

(i) 地獄だ・ 助けて・ 死んじゃうよ・

芳佳とリーネは、 そのままシンヤを連れて外に出た。

シンヤの意識が回復すると次に訓練所に来て様々な施設を説明する。

パシャパシャ!

基地の入り口前には、 少女を撮ったりインタビューをしている。 沢山のカメラや記者が金髪のショー トカット

あの人は?」

シンヤ

「確か朝礼の時居たね。

リーネ

すよ。 ハルトマン中尉ですね。 ネウロイの撃墜数が200機成ったんで

芳佳/シンヤ

「に!200機!?」

シンヤと芳佳は、驚く。

芳佳

「今までそんなに沢山のネウロイ戦ってきたんだ・

芳佳は、凄すぎると実感する。

リーネ

ネウロイ制圧されていたと思います。 長も160機超えていますし。 三人が居なかったら此処もとっくに 「バルクホルン大尉ですね。 大尉なんて250機ですよ。 ナ隊

芳 佳

「凄いね。」

リーネ

くれてるんです。 他のみんなも凄い魔法の技を持っていて沢山の人の故郷を守って 本当に凄いですウィッチーズは!」

芳佳

「私なんて治療しか出来ないよ。_

シンヤ

「僕なんか戦いに成れば怯えてばかりだよ。_

苦笑いするシンヤ。

芳佳

(シンヤさんやっぱりエビルの正体を明かしたく無いんだ。

芳佳は、 言わないで欲しいと頼まれた。 ウィッチーズに入る前に美緒と一緒に自分の正体を誰にも

リーネ

ですから。 「それでも宮藤さんは凄いです。 私なんて何も出来ない足手まとい

芳佳

「そんな事無いよ。.

リーネ

「では次に逝きましょう・・・ゴン!痛ッ!」

リーネは、壁に頭をぶつけてしまった。

シンヤ

「大丈夫かい?」

シンヤは、リーネに手を差し伸べる。

リーネ

「はい大丈夫です!ごめんなさい!」

シンヤ

「リーネ・・・それ人じゃないから。

シンヤは、優しくリーネを見守る。

美緒

午後に成り芳佳とリーネは、訓練所に来ている。

「さぁ!ビバシバシ!行くぞ!」

美緒は、片手に竹刀を持って言う。

芳佳/リーネ

「はい!」

リーネと芳佳は、気合い良く言う。

シンヤ

「じゃあ僕も参加させて貰えるかな。

シンヤも来ていた。

美緒

「相羽貴様も訓練をするのか!」

美緒は、シンヤに関心する。

ちなみにシンヤは、今着ているのは柔道着だった。

美緒

「まずは、走る事から始めるんだ!」

美緒が言うと芳佳とリーネそしてシンヤが走り始める。

こうして訓練が始まった。

そして夕方・・・・

リーネ/芳佳

「はぁつ!はぁつ!はぁつ!」

芳佳とリーネは、 もう体が動けない状態だった。

シンヤ

「大丈夫?」

美緒

日の訓練は、 し魔法力のコントロールもバラバラ。 基礎体力も空っきしだな。 「もうへばったのか宮藤、 此処まで。 リーネ?まぁ初日ならこんな物か。 しか 今

訓練は、終わった。

夕飯を食べて浴場で1日の疲れを流して部屋に戻ろうする二人だっ たが・・

??

せえい!はっ

!りやっ

シュッ!シュッ!シュッ!!

芳 佳

「何だろう訓練所からだ。

「行って見ますか?」リーネ

二人は、訓練所に向かう。

「はっ!りゃっ!トリャアァ!!」

???

二人は、訓練所に着くとその声が大きくなる。

「あれは!」リーネ

芳 佳

「シンヤさん!」

腹筋、走り込みを繰り返している。 芳佳とリーネは、 よく見るとシンヤが組み手の練習や腕立て伏せに

シンヤ

「ん?芳佳にリーネどうしたんだい?こんな夜遅くに?」

シンヤは、二人の存在に気付いた。

芳 佳

(はっ!そうだ!)

芳佳は、ひらめいた。

芳佳

「シンヤさん!どうやったらもっと上手く出来ますか?」

シンヤ

「そうだな・・・」

シンヤは、考え込む。

シンヤ

「まずは今日美緒がした訓練のおさらいでもする?リーネは?」

リーネ

わ・私も上手くなりたいです。

リーネの目も芳佳同様に良い目で答える。

シンヤ

「良い返事だ。

た。 た点を言い何が原因か改善点を教えそれを実際やって直す様にさせ こうして美緒の訓練が終わると50分間は、 シンヤが二人に悪かっ

数日後

美緒

「 随分コントロー ルも上手く成ったな宮藤とリー ネは。

ミーナ

「最初の頃は、 不安だったけど大分上達して来たわね。

ミーナと美緒は、 芳佳とリーネの飛行訓練を見ていた。

シンヤ

「まぁ最初の頃より上達しているね。

エプロンと三角巾を被ったシンヤがリー ネと芳佳を優しく見守る。

美緒

「相羽あの二人に何かしたのか?」

シンヤ

善出来そうな範囲を教えたりしているだけだよ。 「そう言うワケじゃないけどただ訓練を終えて悪い所を言ったり改

美緒

「そうか・・・・」

複雑な気持ちだった。 美緒は、シンヤの指導力で二人が良くなったが喜ぶのか悲しいのか

えて貰う。 そして訓練が終えると二人は、シンヤと一緒に今日改善する所を教

????

「そこの新人。」

芳 佳

「はい?」

芳佳は、振り向くとバルクホルン大尉が居た。

バルクホルン

れば帰れ。 「此処は、 最前線だ。 即戦力だけが必要とされている死にたく無け

シンヤ

「だから何?」

シンヤは、バルクホルンに向かって堂々と言う。

バルクホルン

「貴様は?」

「僕かい?最初に言わなかったけ?相羽シンヤだけど。

バルクホルン

「民間人が口を出さないでくれないか?」

シンヤ

「いやだな・ ・だったら此処が最前線なら結果を出せば良いんだ

バルクホルンは、 睨んでいます。

けどシンヤは、笑っています目が笑っていませんが。

「・・・・・・」バルクホルン

した。 バルクホルンは、芳佳を少し見ると悲しい表情のまま訓練所を後に

翌朝

基地に警報の音が作動した。

ヤ、シンヤだった。 基地で待機しているのは、芳佳、 リーネ、ミーナ、エイラ、 サーニ

芳 佳

「行つちゃったね。」

芳佳とリーネは、出撃しに行ったウィッチ達を見送った。

芳佳

「今出来る事って何だろ?」

リーネ

「足手まといの私に出来る事なんて・・・

芳 佳

「リネットさん!」

リーネは、走り去る。

シンヤ

「リーネ・・・

シンヤは、 その奥に居て走り去るリーネを見て心配する。

ミーナ

「宮藤さん。ちょっと良いかしら?」

芳佳の所にミーナが来た。

ミーナ

リーネさんは、このブリタニアが故郷なの。」

シンヤノ芳佳

「えつ!」

奥で聞いて居たシンヤも驚く。

ミーナ

ね? 「ヨーロッパ大陸がネウロイに制圧されているのは知っているわよ

芳佳

「はいリネットさんに。

ミーナ

んは、 「欧州最後の砦そして故郷でもあるブリタニアを守る事。 プレッシャーで実戦だと駄目に成っちゃうの。 リーネさ

ミーナからリーネの事情を説明した。

ミーナ

「宮藤さんは、どうしてウィッチーズ隊に入ったの?」

芳佳

「はい。困っている人達の力に成りたくて。」

ミーナ

忘れないで。 「うふっ!リ そうすればきっとみんなの力になれるわ。 ネさんが入隊した時も同じだったわ。 その気持ちを

ミーナが去ると芳佳は、 リーネの部屋に向かう。

シンヤ

「リーネ。少し良いかな?」

シンヤは、先にリーネの部屋の前に来ていた。

シンヤ

達の力になりたいって理由で入ったんだよ。 「芳佳がウィッチーズ隊に入りたいって言う理由は、 困っている人

リーネ

. !

自分と同じだと聞き驚いた。 リーネは、 シンヤの言葉から芳佳がウィッチー ズ隊に入った理由を

ジリイイイイイ!

シンヤノリーネ

. !

突如の警報に驚く。

ミーナ

出られるのは、 エイラさんと私だけね。 サーニャさんは?」

エイラ

夜間警備デ魔力ヲ使イ果タシテイル。 無理ダナ。

ミーナ

「そうじゃあ二人で行きましょう。 「待って下さい!」ん?」

芳佳とシンヤの姿があった。

芳 佳

「私も行きます!」

ミーナ

「まだ貴女が実戦に出るには早すぎるわ!」

芳佳

「足手まといに成らない様に精一杯頑張ります!」

ミーナ

「訓練が充分じゃない人を戦場に出すわけには行かないわ。それに

撃つ事に躊躇いがあるわ。」

シンヤ

「大丈夫だ!」

芳佳

「撃てます。守る為なら。

ミーナ

「けど!」

リーネ

「私も行きます!二人合わせれば一人分位には成ります!」

芳佳とリーネは、目がやる気で満ちていた。

シンヤ

「だったらさらにサービスを付けるか

シンヤは、懐からテッカクリスタルを出す。

シンヤ

「テックセッタアアアアアアア!」

バイザーが出来上がった。 を形成して体が黒い装甲を形成し頭部は、 シンヤは、テッククリスタルを翳すとクリスタルの形のフィールド 漆黒のヘルメットの紅の

エビル

『とぅ!テッカマンエビル!』

リーネ

「あ・・相羽さん?」

エイラ

「嘘ダロ・・・・」

ミーナ

「貴方がこの前の戦いで活躍した漆黒の魔神・

シンヤがテッカマンエビルに変身するとリーネ、 エイラ、 ミーナが

驚いた。

エビル

『早くしろ!急がないとネウロイが此方に来る。 6

ミーナ

「解ったわ!」

向かう。 ミーナは、 残りのウィッチー ズ隊とエビルと共にネウロイの撃墜に

ミーナ

攻するから此処でバックアップをお願い。 「敵は、三時の方向から基地を狙っているわ。 私とエイラさんが先

リーネ/芳佳

「はい!」

エビル

了解!』

ミーナ

「じゃあ頼んだわよ!」

ミーナとエイラは、ネウロイの先攻に向かう。

リーネ

「宮藤さん、 相羽さん。 私本当は、 恐かったんです。

芳佳

「私だって恐いよ。

エビル

時なんだよ。 『今君達がしようとしているのは無謀じゃない!本当の勇気を試す **6**

芳佳

「リネットさん!シンヤさん!あれ!」

芳佳が指差す方からネウロイが向かって来る。

エビル

『どうやらミーナ達の攻撃を突破して来たようだ。 **6**

リーネ

「わっ!わわ!」

リーネは、慌てて緊張している。

バキューン!バキューン!

リーネは、 緊張のせいで銃を上手く狙い撃ち出来ない。

リーネ

「駄目全然当てられない!」

エビル

『大丈夫だよ!』

リーネ

駄目私ストライカーに集中していて銃が上手く出来ないんです!」

芳佳

「じゃあ私が支えてあげる。」

エビル

『だったら撃つのに集中出来るね。』

芳佳がリーネの肩車に成りリーネが銃に集中出来る様にした。

リーネ

「宮藤さん私と一緒に撃って。

芳 佳

「うん!」

芳佳も銃を構える。

リーネ

「今です!」

バッバッバッバッバッバッ!!

避ける方向に向かった時を狙い。 リーネと芳佳は、 ネウロイに目掛けて一斉射撃をするとネウロイが

バキューン!

ドカーン!

ネウロイがリーネの弾丸に当たり煙を出した。

「ヤッタアアアアア!!」リーネ/芳佳

二人は、喜んだ。

だが!

ネウロイのコアがまだ無事な為か加速を続ける。

エビル

『今度は、僕が相手だあああああああ!

二人の前にエビルが立っている。

出口が赤く輝き、そこに強大なエネルギーを持つ光をネウロイが来 るのを最初から予想していたかの様に収束していた。 エビルの左右胸部に埋め込まれているレンズ部分.....ボルテッカ射

エビル

『ボルテッカアアアアアアア!!』

ドカアアアアアアアンンン!!

エビルからボルテッカがネウロイに向かって放出される。

ボルテッカを避ける事が出来ず、 一瞬で消滅した

エビル

『よくやったね。芳佳、リーネ・・

6

エビルは、少し成長した二人を喜んだ。

リーネ

やった・ ・やったよぉぉぉ!宮藤さん相羽さん!」

リーネは、 そのまま胸の谷間に挟まれエビルを抱きしめる。

エビル

『もう・ ・ダメ・・ブゥ

エビルがバイザーから鼻血を噴出すると三人は、 海面に落ちた。

芳佳

「これからは私の事を芳佳って呼んでリーネちゃん。

リーネ

「うん私もリーネって呼んで芳佳ちゃん。

リーネ/芳佳

「アッハッハッハッハッハッ!」

笑顔で笑う二人の少女。

一方

ミーナ

「何だったのあの光は?」

エイラ

「ナンダ?彼処ダケ海真ッ赤ダゾ?」

れているのを確認すると直ぐに救助して治療した。 二人は、下に降りると・・・変身を解いたシンヤが鼻血を出して倒

O BE CONTINUED

シンヤ

えええ!僕の貞操がああああ!」 テッカマンエビル 第四話 コックリさんは恐いよ・・・ だか危ない雰囲気だけど・・・芳佳どうしたの? 次回 空の騎士 「あれ?みんなで何やって居るんだろ・・・てコックリさん!?何 助けて

第四話:コックリさんは怖いよ・・・

ネウロイの襲撃から数日後平和は、 日々をおくっていた。

とある夜

「ふう」、「スツミリシンヤ

「ふう〜 ・スッキリしたな。

から出て自室に向かう最中だった。

シンヤは、

自分の仕事が終わると空手の練習を行い汗を流す為浴場

ルッキーニ

「おっかしいでしょ?実戦と訓練の、

あの落差!?」

ルッキー 二の声が響く。

(彼処からか?)シンヤ

ヤーリー、 シンヤは、 エイラ、 ルッキー 二の声が聞こえる部屋を覗くとルッキーニ、シ サーニャ、 リーネ、 ペリーヌが床に座って話し

ている。

コンコン!

「開いてるよー!」ルッキーニ

ルッキー ニに言葉で部屋に入るシンヤ。

シンヤ

「お邪魔するよ。」

リーネ

「あっ!相羽さん。どうしたんですか?」

シンヤ

んだけど。 「いせ・ 部屋に向かう最中にみんなの声がしたから気になった

ルッキー ニ

「シンヤ、シンヤ。芳佳の実戦と訓練の差は何なの?」

リーネとシンヤが話している間にルッキーニが入って来た。

なっていた。 ルッキー 二が言うには、 芳佳がまだ訓練で上達していない事に気に

シンヤ

ちゃう場合があるんだよ・ 良くなったと思うよ。 「確かに芳佳は、 みんなより訓練の上達がまだまだだけど最初より 急いで上手にさせようとするとあえて失敗し • • • ?

シンヤが言うと一同がポカンと目を丸くしてシンヤを見た。

エイラ

相羽オ前スゲエナァ。

シャーリー

「何か教師の様に的確な言葉を言うよな。

サーニャ

「相羽さんは、何者何ですか?」

シンヤ

「えっ?嫌だなぁ!そんな事無いよただの僕なりの発想だよ!(^

シンヤは、笑って誤魔化す。

「そこ~で!」

バンッ!

テーブルを叩くルッキーニ。

「あたしは、気がついちゃった。ルッキーニ

何に?」

「何にですの?」

「な、何です?」リーネ

「・・・・何ダヨ?」エイラ

「何にだい?」シンヤ

顔を寄せ合うシンヤ達。

「 芳佳には・・・ ルッキー ニ

一同を見渡し、一呼吸おいてからルッキーニが続ける。

「・・・何かが憑いている。」

「憑いている?」シャーリー/シンヤ

聞き返すシンヤとシャーリー。

「何がです?」

ルッキー ニ

「誰かの霊よ。それもかなり強力な。

ペリーヌ

やれやれですわ、 何を馬鹿な事を?」

ペリーヌは、 呆れ果てたといいように肩をすくめた。

ルッキーニ

「じゃあさ、ぺたんこ(ペリーヌ)に説明出来るの?芳佳の落差?」

ペリー ヌ「そ、それは・ ・ て ぺたんこって呼ぶのは止めなさい

シャー IJ

「ウィッチは、 使い魔を憑依させるからなぁ。 憑くって感覚が分か

らないでもないけどさ。 (苦笑)」

エイラ

「アホダナ。

小馬鹿にしたように舌を出すエイラ。

サーニャ

サーニャも頭を振る。

ルッキーニ

何よ、あんた達!?その疑いの目?」

ルッキーニは、膨れっ面になった。

シンヤ

「まぁ信じられないのも無理無いよ。

ルッキーニ

「疑うなら、調べてみましょうよ!」

リーネ

「調べるって、どうやってです?」

リーネは、眉をひそめる。

ルッキーニ

「交霊会よ。_

ルッキーニは、 ナイスアイデアと言わんばかりに胸を張った。

リーネ

「こ、交霊会?」

ルッキーニ

「芳佳に憑いている霊を呼び出すんだってば。

シャー リー

「面白そうだねえ。」

意外と乗り気な表情を見せるシャーリー

「フンッ!何を非科学的な。ペリーヌ

「わ、私は、反対ですよ!大反対!」リーネ

リーネは、ブルブルと頭を振った。

「あっれ~、怖いの~?」ルッキーニ

からかう様な口調になるルッキーニ。

リーネ

この基地には、 人もいないんですよ!」 「ル、ルッキーニちゃんは、 カーナッキもジョン・サイレンスもブラバッキー 夫 交霊会の恐ろしさを知らないんです!

説明するまでもないがリー 滅茶苦茶。 ネは、 心底怖がっているらしい。 それも

「と、とにかく、私は、嫌ですからね!」リーネ

顔を真っ青にしたリーネは、 部屋から飛び出した。

「僕も止めておくよ。

ルッキーニ

シンヤ

「えっ?シンヤも?」

ルッキー 二達は、意外と驚く。

シンヤ

あるの?」 「いや、霊を信じないけど・ 交霊会を一回でも成功させた事

「これが初めてだよ。」ルッキーニ

ルッキー 二は、素直に答える。

シンヤ

はそれなりの訓練を積まないと難しいから。 「じゃあ教えるよ。交霊会で霊を呼ぶのは誰でも出来るけど帰すに

シンヤは、 リーネが部屋から出ると廊下で芳佳が歩いていた。 そう言うと部屋を後にした。

芳佳

「あれ、リーネちゃん?」

送る。 芳佳に気づかずに通り過ぎて行くリー ネの背中を見て首を傾げて見

芳佳

「お腹でも壊したのかな?」

シンヤ

あれ芳佳?」

リーネに続いてシンヤが来た。

芳佳

「部屋に行くんですか?」

シンヤ

「うん。僕も朝の朝食を作らないといけないから。おやすみ芳佳。

芳佳

「おやすみなさい。

芳佳は、 シンヤを見送るとルッキーニ達の居る部屋に入った。

芳佳

あの~ どうしたんですリーネちゃん?」

ルッキーニ

「 ん 〜 。 何でもないって。 (ちょ~ど良い所に!)」

っ張って行く。 ルッキーニは、ニッと笑って芳佳の手を掴むとみんなのところに引

ルッキーニ

「ほらほらこっちに~。

芳佳

「な、 な、 な、 何なんです?」

芳佳は、戸惑いの表情を浮かべた。

ルッキー ニ

「まあまあ。 ねえ芳佳。 交霊会って知ってる~?」

芳 佳

「こ~れ~くゎい?」

キョトンとした表情の芳佳。

ルッキーニ

お遊びなんだけど。 「ウィジャ盤を使って霊を呼び出すっていう。 まっ!ちょっとした

芳佳

「ああ。 ひょっとしてコックリさんの事ですか?」

ルッキーニ

「へぇ、扶桑ではそう言うの?」

芳佳

ですけど。 「ええ。流行っていましたよ。女の子の間で。 私はやった事ないん

任を取りません。 けは、言います。 作者:天使の小学校や中学の時にも流行っていた。 コックリさんをして何が起きても作者は、 これは、 良い子も悪い子も約束だよ。 何も責

ルッキー ニ

扶桑式の交霊会のコックリさんのやり方、 ちょっと教えてよ。

芳 佳

「良いですけど・ したら大変なことになるんですから。 ・お遊びでやったらいけないんですよ。 下手

と言いながらも芳佳は、 いてゆく。 紙一枚取り出して、 鉛筆で文字や鳥居を書

「・・・・これ扶桑の文字?」シャーリー

ひらがなを見て眉をひそめるシャーリー。

芳佳「このマークは何ですの?」

ペリーヌ

ペリーヌ

「鳥居です。

「トリイ〜?」

芳 佳

「ええっと、 神 社 神殿の門ですよ・ ・たぶん。

芳佳にも詳しい説明は難しい。

ルッキーニ

「これじゃあたし達には分からないよ。 紙貸して。

ルッキーニは、 に書き直していく。 芳佳から別の紙を貰うとひらがなをアルファ ベット

ルッキーニ

ž E Ŕ NOでいいよね?」 Ć Ď É はい、 い いえ は Υ

芳 佳

「あ、あの~。

大胆な改変に口出し出来ない芳佳。

ペリーヌ

`このトリーとやらも美しさに欠けますわね。.

ペリーヌや勝手に鳥居を書き換え始める。

ペリーヌ

ほら!これぞ、 ロココの美!この凱旋門の方が断然優雅ですわ。

シャーリー

「へぇ意外と上手いなこういうの。」

ペリーヌ

の息女たるもの絵筆を握れば印象派、 トコフスキー、 はい。 当たり前ですわ。 映画のメガフォンを取らせれば・ 芸術は乙女の嗜みでしてよ。 オー ケストラを前にすればス クロステルマン家

流石にシャ IJ もペリー ヌの話に辟易していた。

エイラ

「ス、スデニ、コックリサンカラ何千マイルモ離レテイナイカ?」

たまたま並べたタロットカードの一枚を開くと其処には

エイラ

「・・・・ウ!」

死神の姿があった。

参加しようかどうしようか迷っていたエイラは、 ニャを下がらせる。 危険を感じてサー

ルッキーニ

「はい、これで完成!」

のウィジャ盤をテーブルの中心に置いた。 ルッキーニは、描き上がった多国籍軍バージョン・コックリさん用

次いて雰囲気を盛り上げる為にカーテンを閉じて照明を落とし燭台 の蝋燭に火をつける。

ルッキー ニ

. で、この後どうすんの?」

芳 佳

゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙ まずコックリさんが入って来やすいように北の窓を開けて

.

芳佳は、部屋の窓を開く。

だがカーテンは、 閉じているので部屋は薄暗いままだ。

芳佳

ころに置いてみんなで人差し指をこの硬貨の上に。 「一銭硬貨がないんで、 ーペニー を鳥居・ ・じゃ なく凱旋門のと

芳佳の言葉に従うルッキー ニ、シャーリー、 ペリーヌの三人。

それを興味半分、 警戒半分で見つめるエイラとサーニャ。

芳佳

で、 唱えるんです。

芳佳は、 歌うように召還の呪文を口ずさむと他の三人も続いて言う。

芳佳 / シャー リー / ルッキー 二 / ペリー らお入りください。 「コックリさん。 コックリさん。 いらっしゃいましたら、 ヌ 北の窓か

ペリーヌ

馬鹿らしい。

呟きながらもペリーヌは、 みんなと合わせて詠唱する。

芳佳

「次にこう唱えます。

芳佳/シャ

コッ クリさん。 コックリさん。 ノルッキーニノペリー いらっしゃ いましたら、 いい に

進んだください。」

シャー リー

「ここらへんは、普通のウィジャボードと同じっぽいな。

ニヤニヤするシャーリー・・・たが!

「!!?」 芳佳/シャーリー/ルッキーニ/ペリーヌ

ーペニーがゆっくりと゛はい゛に動き始めた。

その頃。

コンコン!

シンヤの部屋のドアからノックがして開けると・

リーネ

「あ、相羽さん!い、一緒に寝てください!」

シンヤ

だな・・・) (・o・・・)」 ゎ 解ったよ・ (コックリさんに今晩幽霊になって来そう

シンヤのベッドの隣では、 リーネが震えながら寝ている。

リーネ

~、ホットクロスバ~ン!」 「ホットクロスバ〜ン、ホットクロスバ〜ン、ーペニーで2つだよ

がリーネの胸の谷間に挟まって出られない。 シンヤは、大声で動揺を歌っているリーネが気付いていないが右腕

ぽたっ!

(死んじゃう・ 死んじゃうよぉ・ (TOT))

シンヤは、 涙と鼻血を出しながら苦しんでいる。

またまた変わってコックリさんをしている部屋では

ヘリーヌ

「だ、誰が動かしているんですの?」

ペリーヌは、三人を見る。

「 あたしじゃ ないけど?」シャーリー

「あたしでもないわよ!」ルッキーニ

芳 佳

「わ、私でもないでしよお~!」

三人は、自分の作為を否定する。

まった。 だが、硬貨は斜めに移動してやがて、YES、 と書かれた位置で止

芳佳

す?(止めたいなぁ~ッ・・・・)」 ・この後コックリさんに質問するんですけど。 もう止めま

芳佳は、ルッキー二達を見渡す。

ペリーヌ

てやりますわ!」 「こんなインチキ交霊会誰が動かしているのか、 絶~つ対、 見抜い

緊張した声のペリーヌ。

「じゃあ、あたし質問~。」ルッキーニ

ルッキー 二が真っ先に言う。

ルッキーニ 「コックリさん、コックリさん。芳佳の好きなのって誰ですか?」

芳佳 「わわわっ!何ですか、そのとんでもない質問!(0

ルッキー ニ 「ほらほら、 [< O <) コインから指離さないの。 コックリさん、 怒るよ~。

泣く泣く従う芳佳。 「うう・・・・(ToT)」

芳佳

するとーペニー貨は、 S・H・I・N・Y・Aの文字を示した。 移動して、 F A Н E R

「お父さんかあのお手伝い?」ペリーヌ

「あ~あ~・・・ガッカリ。

ルッキーニ

シャー

「お前さ、二股だったんだな。」

芳 佳

「そんな~、私が答えたんじゃないのに~。

芳佳は、少し傷つく。

ルッキーニ

「じゃあ、次の質問いってみようか?」

シャー リー

「ほ~い、あたし。

シャーリーが名乗り出る。

シャー リー

「コックリさん、コックリさん。 相羽は、童貞のままですか?」

ーペニーは、ゆっくりと動いてYESと書かれた位置で止まった。

「ハックシュンッ!」シンヤ

シャー いた。 がコックリさんで聞いた瞬間シンヤは、 くしゃ みをして

ペリーヌ

/あなた今絶っっっ対に動かしましたわね?」

顔を真っ赤にして睨むペリーヌ。

シャー

IJ

シャ は とぼける。

「知らないなあ~ (^O^)」

¬ ペリーヌ な人生ですか?」 んとやらが本物だと信じますわ。 ましょう。万が一、その答えが正解ならば私めも、このコックリさ いいですわ。 そう言い張るのなら誰もが答えを知らない質問をし あのお手伝いの過去は、 一体どん

ーペニー貨は、 移動を開始しとあるスペルが出て来た。

芳佳/シャー IJ ルッキーニノペリー

ヌ

· · · · · ·

シャーリー

「・・・・これ本当か?」

ペリーヌ

「さ、さあ?」

同が見たスペルは、 뫼 h と『lost』 が表示された。

芳佳

「地獄と失う?」

芳佳達は、 コックリさんの教えた意味が未だに理解出来ない。

ルッキーニ

「じゃあ、いよいよ本題。

ルッキーニは、この重い空気を壊して宣言した。

ルッキーニ

「コックリさん、 コックリさんであなたは芳佳に憑依いているんで

すか?」

芳佳

でください!」 「もう!ルッキー ニちゃん!さっきから変なことばっかり聞かない

芳佳は、頬を膨らませて抗議する。

動した。 ーペニー貨は、 静かに動き始めると・ YES」の真上に移

芳 佳

「えええ~っ!」

素っ頓狂な声を上げて芳佳は、目を丸くする。

芳 佳

「誰ですか!?今動かしたの!?」

「あたしじゃ・・・・・シャーリー

ペリーヌ

「ありませんわよ。」

二人は、顔を見渡せる。

ルッキーニ

「コックリさん、コックリさん。 あなたは一体誰ですか?」

ルッキーニは、続けたが反応が無い。

ルッキーニ

「コックリさん、 コックリさん。 あなたは一体誰ですか?」

ルッキーニは、もう一度繰り返した。

バンッ!

風にあおられた窓が開き、壁にぶつかって音を立て蝋燭の炎が大き く揺らめく。

ペリーヌ

「もう、窓がうるさいですわね!」

ペリーヌは、窓の閂をかけてまたカーテンを閉じる。

芳 佳

「だ!駄目ですよ!コックリさんが帰れなくなります。

ビュウッ!

「うわっ!」

突然、テーブルの上で旋風が起こり紙とペニー硬貨を巻き上げた。

蝋燭の火が消え部屋の中が真っ暗になる。

ペリーヌ

「ど!どうなったのですの?」

シャーリー

「ちょっと明かりは?カーテン開けてよ!」

「あ~ん!何か踏んじゃった!」ルッキーニ

シンヤの真下は、芳佳の居る部屋なので声が下から響く。

「きゃああああああり!リーネ

シンヤ

モニョモニョ!!

リーネは、 怖いまありシンヤの頭に強く抱き締めた。

「ブーーーーーッッ!!」シンヤ

シンヤは、 ネの胸の谷間に頭が挟まれると鼻血を吹く。

・ 下 で ・ ・何かあったみたいだから行くよ。

エイラ

「サーニャ、頼ム~。

エイラは、夜目の利くサーニャに声をかける。

サーニャ

「・・・・電気。」

サーニャは、扉にたどり着き照明のスイッチを入れた。

パッ !

照らし出される室内。

シンヤ

バタン!

「一体どうしたんだい!?」

扉から鼻にティッシュを詰めてシンヤがリーネを連れて来た。

シャーリー 「今のって霊の仕業じゃ ないよなあ?」

ペリーヌ

「単なる風のイタズラです!」

一同は、混乱している。

しかし!

「・・・・・ */ エイラ

・・・・・オイ、アレ。_

エイラが声を出し指差し一同は、その先をみると。

「ちょっと?」ルッキーニ

芳佳は、両手を真っ直ぐ前に伸ばしてテーブルに突っ伏している。

まるで凍りついたかの様に動かない。

シャー リー

「寝ているのか?」

シャー リーは、芳佳の肩に手をかけようとした、その時。

バシッ!

芳佳???

「・・・・無礼者。触れるでない!」

芳佳は、乱暴にシャーリーの手を払った。

シンヤ

「 芳佳 ? 」

シンヤは、何時もと違う芳佳に警戒する。

芳佳???

「芳佳?芳佳とは、何者・・・・・じゃ?」

キリッとした目に凛々しく結ばれた口元の芳佳だがシンヤを見ると

驚いている。

芳佳???

「義仲殿?」

「ふぇ?」 シンヤ

シンヤは、 芳佳の言う言動が理解出来なかった。

ガシッ!

芳佳は、シンヤを抱き締めた。

芳佳???

「摩利支天が・ ・我に最後の慈悲を叶えてくださったのか・

芳佳の目から涙が溢れる。

バタン!

「ふぇ?」 シンヤ

何時の間にか芳佳がシンヤを押し倒してシンヤの腹部上に座る。

芳佳???

「早速夫婦の契りを交わしましょう。」

芳佳は、 セーラー服とスクー ル水着を脱いで全裸になる。

「ブーーーーーッ!!!

シンヤは、 芳佳の全裸を見ると鼻血を吹き出す。

シンヤ

助けてよぉぉぉぉ!!」 「ちょっと?芳佳?う、 嘘だよね?嘘だよねぇ!って!みんな早く

シンヤは、 ルッキー 二達に助け舟を求めるが・

おおお (まぁっ) リー/ペリーヌ/リーネ/エイラ/サーニャ

エイラ

「オ前八、何者ダヨ!?」

芳佳???

「我は、中原兼遠が娘、 믾 旭将軍、 木曽義仲殿が従者。

エイラの質問に芳佳:巴が答える。

シンヤ

「助けてよぉぉぉぉ!」

シンヤは、顔に青筋立てながら一同に言う。

エイラ

「サーニャ。見チャイケナイゾ。_

サーニャ

「エイラ?」

エイラは、サーニャを抱えて安全圏まで非難した。

シャーリー

「何だ?何だ!?こりゃ面白そうな事が始まるかもな!」

ルッキーニ

「やれぇーーーーーッツ!芳佳ぁ

シンヤ

(やっぱり其処の二人は、そう成るのね!(ToT))

シンヤは、 シャーリーとルッキーニの予想を的中していた。

シンヤ

(リーネ・ ・ペリーヌ・ ・頼むよぉ・ ・助けてよ。)

えていた。 シンヤは、 残りのペリーヌとリーネに助け舟を出してくれと目で訴

ペリーヌ/リーネ

(助けるってどうやって (ですの)!?)

リーネとペリーヌは、窓を見る。

「あつ!あれは可!! ペリーヌ/リーネ

「あっ!あれは何!?」

芳佳:巴ノシャー IJ /ルッキーニ/エイラ/サーニャ

「何処(何)?」

見る。 シンヤの上に跨っていた芳佳:巴もリーネとペリーヌの言葉で窓を

芳佳:巴

「うっ!」

シンヤは、 その隙に巴から離れて全速力で部屋を後にした。

芳佳:巴

「あっ!待たれよ義仲殿ぉぉぉぉ!」

屋に残っ たルッキー 二達だけだっ シンヤの後を芳佳:巴が負けない た。 位の速さでシンヤを追いかけて部

「巴って誰?」ルッキーニ

「さあ?扶桑の人だと思うけど?」シャーリー

顔を見合わせるルッキー 二達。

エイラ

少尉 ノ異名ガ・ ソッ カ!聞イタコトアルゾ。 確力『扶桑海の巴御前』 スオムス義勇軍所属ノ穴拭 トカ・

ルッキー 二達は、 書架に行き扶桑関係の文献を探し始める。

エイラ

ヲ討チ 弔ッタ・ 曽義仲ノ討チ死二ノ直前二義仲ト別レ、 「エ〜ッ 破ッタ木曽義仲ノ従者。 トサレル。 アッタ。 色白デ美シイ女武将トシテ有名。 平安時代末期ノ伝説 ダトサ。 後二出家シテ義仲ノ菩提ヲ ノ女武将。 木

ペリーヌ

事が坂本少佐に知れたら、 どうするんですの!豆狸を元に戻さないといけませんわ! どんなにお叱りを受ける事か!」

シャーリー

「確かに、このままってのは・ ・拙いよなあ。

シャーリーも困った顔になる。

「八アッ!八アッ!八アッ!八アッ!八アッ!」シンヤ シンヤは、息が荒れる位逃げ回っている。

芳佳:巴

「待たれよ!義仲殿ぉぉぉぉ!」

後ろには、巴が未だに追いかけて来る。

芳佳:巴

「我が貴方様の全てを受け入れます!」

シンヤ

「受け入られても困るよぉぉぉ!」

芳佳:巴

「恥ずかしがる必要等ありませぬ。

シンヤ

「いや!断じて違うからね!」

芳佳:巴のボケにシンヤが突っ込みながら逃げまくる。

すると!

ボオオオオオオ!!

シンヤ

「何だ!まさかネウロイが!」

芳佳:巴

「何じゃこれは!?」

芳佳:巴にも警戒態勢に成る。

「こうしてはいられない!」シンヤ

ハンガーに向かうシンヤを見ていた芳佳:巴もシンヤの後を追う。

ミーナ

「全機、スクランブル!私も出ます!」

ミーナは、ウィッチ達に指示を出すと通信兵に尋ねる。

ミーナ

いる? 「どうしてこんなに発見が遅れたの?司令部からの言い訳は聞いて

通信兵A

「どうやら、 高度100m前後の超低空飛行で接近して来た様です。

美緒

「狙いがペヴンシー のレーダー 基地なのは確か?」

通信兵A

「はい!進行方向から見ても、確かと。

ミーナ

(ネウロイが我々の目を潰そうとしている? まかさね。

微かに眉をひそめるミーナ。

ミーナ

でも、こうも不規則にこられるとみんなの負担が心配だ

ミーナは、 ため息を漏してストライカーを装着した。

シンヤ

「ミーナ!」

倉庫の入り口からシンヤと巴御前が憑依した芳佳がやって来た。

シンヤ

「状況は!?」

ミーナ

「ペヴンシーのレーダー基地の方角に向かっているわ。 デとエーリカが先に行ったわ。 先にトゥル

シンヤ

解ったよ!」

シンヤは、テッククリスタルを翳した。

「テックセッタアアアアアアア!」シンヤ

バイザーが出来上がった。 を形成して体が黒い装甲を形成し頭部は、 シンヤは、テッククリスタルを翳すとクリスタルの形のフィールド 漆黒のヘルメットの紅の

『テッカマンエビル!』エビル

「相羽さぁーーーん!!」

リーネ

リーネ達も倉庫に来た。

「何だって!?」シャーリー

「あの黒いのがシンヤ!?」ルッキーニ

サーニャ「あのお手伝いの正体ですの!?」

ペリーヌ

「・・・凄い・・

さっきまでコックリさんをしていたリーネとエイラ以外メンバーが シンヤの正体に驚く。

エビル

『芳佳を頼んだよ。』

エビルは、 リーネ達に芳佳を託すとミーナと一緒に空へ飛ぶ。

リードネ

「ど、どうしましょう!?」

ペリーヌ

その後にしましょう!」 「とにかく、 この頭の壊れた豆狸を空に上げて・ ・考えるのは、

備させる。 要領の良いルッキーニや他のメンバーは、 リペリーヌとシャーリーが芳佳の両側から挟みながら芳佳:巴を準 ハンガー で発射準備に入

シャー リー

「良いのか?それで?」

ペリーヌ

「他に良い方法が?」

シャーリー

·・・・ないよな。

首を振るシャーリーとペリーヌ。

芳佳:巴

「出撃?・・・戦か?我も出よう。

ペリーヌ

「で、出てくださるの?」

芳佳:巴

「我は、戦しか知らぬ女子なれば義仲殿の一大事に行かねばならん。

L

芳佳:巴は、ストライカーに向かう。

シャーリー

「なあ今の宮藤にこいつの操作方法分かるのか?」

ペリーヌ

「あ!」

ペリーヌは、額に手のひらを当てた。

ルッキーニ

「ちょっと~、二人とも急ぎなよ~!」

ルッキーニは、すでにストライカーの装着を終えて声をかけてきた。

ペリーヌ

「あなたねぇ!この責任の一端、 いえ!八割方あなたになるのです

ルッキーニ

たら絶対に何時もより活躍するよ!きっと。 「ニッ!大丈夫。 今の芳佳って完全に巴御前って人何でしょ?だっ

ペリーヌ

「どう言う根拠でそんな事が言えるんです!」

ルッキー ニ

心配性だなあ、 ぺたんこ (ペリーヌ) は。

ペリーヌ

「ああ!坂本少佐に叱られます!」

巴にストライカーや武器の使い方を簡単に教えた。 ペリーヌが絶望的な表情で頭を抱えている間に他のメンバーが芳佳・

そして芳佳:巴は、ストライカーを身につけた。

ルッキーニ

「ほら、行くよ!巴御前!」

ルッキー 二がまず見本を見せる。

使い魔の耳と尻尾、 足元には魔法陣が現れ小さな体が宙に舞い上が

芳佳:巴

・・・なるほど、天翔ける馬というわけか。」

凄まじい魔力が芳佳:巴の周囲に小さな旋風を巻き起こす。

芳佳:巴

「飛べ!天馬!」

こうして平安の女武将は、 ブリタニアの夜空へと飛び立った。

先に先行していた美緒、 バルクホルン、 ハルトマン、ミーナがネウ

ロイを探す。

エビルは、 彼女達の真上で飛び何時でも援護態勢でいる。

美緒は、 がんだいを押し上げてネウロイの姿を探す。

美緒

・来た!二時方向!高度は 0 いや50

・超々低空の20Mだと!?」

ウィッチ達は、 一斉に高度を下げて交戦状態に突入する。

ペリーヌ

まるで空飛ぶお皿ですわね。

ミーナ達と合流したリーネ達は、 芳佳:巴を連れて連携態勢に入る。

エビル

『監視搭の情報よりも多い・・ ・十機編隊か!』

ってビームを放つ瞬間だけその姿が浮かび上がる。 美緒達が交戦状態に入るのを分かるとネウロイ達は、 こちらに向か

美緒

「バルクホルンとハルトマンが先行し、 他の者は援護に回れ!」

バルクホルン \neg

了解、 サムライ。

ハルトマン

了解。

息の合っ たハルトマンとハルトマンのWエースは、 ロッテ:||機編

隊を組、 ネウロイの編隊に突っ込む。

しかし

美緒

何だ、 あれは!?」

美緒は、 瞬、 自分の目を疑った。

白いセー ラー 服にストライカーを履いたそれは

美緒

「宮藤だと!?」

「あちゃ〜・・・」シャーリー

手のひらで顔を覆うシャーリー。

リーネ

「きゃあああ、芳佳ちゃん!」

近した。 芳佳:巴は、 猛スピードでWエースの間をすり抜け、 ネウロイに接

ミーナ

「宮藤さん!命令に従って!」

芳佳:巴

・・・・あれが敵、というわけじゃな。」

ミーナの声を無視した芳佳:巴は、 の一機に向けると、 無雑作にトリガーを引く。 1 3mm機関銃を小型ネウロイ

芳佳:巴

「我は巴!」

バキューン!

銃弾がネウロイの中心を貫き・ いた、 射抜くと言うべきか?

芳佳:巴

「まずは一騎。

黒い爆煙を上げながら崩壊し墜落してゆく円盤形ネウロイ。

美緒

「宮藤!?」

唖然とする美緒。

バルクホルンとハルトマンさえ、 一瞬動きが止まる。

ルッキーニ

「ほらほら!やっぱ、 あれって巴だよ!芳佳じゃないって!」

大喜びするルッキー 二。

シャーリー

「なあ、 本当に巴何とかが憑いたんじゃないか?」

芳佳:巴

「二の矢は、無用!」

させる。 芳佳:巴は、 ネウロイ編隊の中心に飛び込むと更にもう一機に墜落

ミーナ

「どう・・・・なっちゃったの?」

戸惑うミーナは、直ぐに作戦の変更をした。

ミーナ

「エーリカ、 トゥルー デ!美緒も宮藤さんをフォロー して!他は待

「 なんてスピー ドだ!」バルクホルン

「ついていけないよ!」ハルトマン

美緒

「どうなっているんだ!?」

美緒達は、 杯だった。 芳佳:巴のスピードについていけなく維持するのに精一

『仕方ない!』

ウィッチ達の真上で見ていたエビルは、 急降下をした。

エビル

『ミーナー今の芳佳は、 みんなの力でついていけない!僕が芳佳の

援護をする!』

エビルは、 変身する前に付けたインカムでミーナに言う。

ミーナ

「わかったわ!頼むわよ!相羽さん!」

領域だった。 何しろ今の芳佳:巴のスピードは、エビルでないとついていけない

芳佳:巴

「次!」

芳佳:巴は、 銃弾を放った後に目標の撃墜を確認した。

一撃で仕留めたと言う確信があるのだ。

芳佳:巴の後ろからネウロイがビームを発射した。

芳佳:巴

! ? -

芳佳:巴の動きが止まった。

エビル

『タアアアアツツ!!』

繋ぎネウロイに投げ出す。 エビルは、 テックランサーを十字に変形させるとテックワイヤーに

ネウロイは、 のと同時にコアが破壊され灰色に変わり海面に落ちた。 エビルが投げ出したテックランサーで半分に切断した

芳佳:巴

· ! ? .

芳佳:巴は、 自分を助けたエビルの存在に驚いた。

エビル

『芳佳!突っ込み過ぎだ!』

芳佳:巴

「義仲殿!?申し訳ありませぬ!」

芳佳:巴は、 エビルを義仲と確認すると謝罪をした。

エビル

『もう少し距離を置くんだ。 後は、 僕が精一杯支えるから。

芳佳:巴

「はっ!」

芳佳:巴は、元気良く返事を返すとネウロイを射撃をしてその後ろ からエビルがテックランサーを使って援護をした。

ハルトマン

「私達の援護なんか要らないね。

ようやく一機を撃墜したハルトマンが微笑む。

バルクホルン

・この戦い新人と漆黒の魔神に持っていかれたな。

肩をすくめるバルクホルン。

美緒

「何故だ!?」

魔眼で芳佳:巴を見た美緒は、 表情を曇らせていた。

美緒

「宮藤の姿が二重に?」

ずれている。 魔眼から映った芳佳:巴の姿が、 まるでピンボケ写真の様に微妙に

美緒

「何が起こっているんだ?」

「やれやれ!やっちゃえ~!」ルッキーニ

歓声を上げるルッキー ニ。

「 ブラボー !ブラボー!」ルッキーニ

その声に美緒は、振り返る。

美緒

「ルッキーニ?それに・・・」

よく観察するとシャーリーとペリーヌの様子も少しおかしい。

美緒

「・・・・なるほどな、アイツ等の仕業か?」

美緒は、 状況がようやく読めたっと言う顔になった。

美緒

ならば、まずは目の前の敵を片付ける!」

美緒は、 た。 刀を抜くと目標と定めたネウロイとの距離を詰めっていっ

エビル

『拙い!何時の間にかネウロイに囲まれている!?』

エビルは、一番にその事に気付く。

に向かって超高速で行く。 エビルは、 装甲を変形させて体をスリム化させるとネウロイの編隊

エビル

『クラッ シュ イントルゥゥゥゥゥゥドオオオオオオオオ ッ

.! -

ウロイ以外を破壊する。 エビルは、 超高速で突進しその衝撃波で美緒達が相手をしているネ

そして美緒達もネウロイを片付けるとエビルは、 いに見ていた。 芳佳:巴の目を互

エビル

かっていたのかい?』 『ごめん 僕は 義仲殿では、 無いんじゃな。 ? 分

芳佳:巴

我は、 そなたを義仲殿と面影を重ねていた様じゃ。 だが・

芳佳:巴の目尻から涙を流す。

芳佳:巴

「今宵だけは、義仲殿でいてくれぇっ!!」

エビルは、優しく芳佳:巴を抱きしめる。

エビル

エビルは、 仮面の下が笑顔の様な口調で芳佳:巴の名前を呼ぶ。

芳佳:巴

「義仲殿・ この巴の姫武者ぶり良かったでございますか?」

エビル

『良い戦いだったよ。』

芳佳:巴

「ありが・ とう・ ・ござい ま・ す ・

突然、芳佳:巴は、意識を失った。

プロペラが停止し海面に落ちそうに成るがエビルが抱き抱えた。

芳 佳

・・・ん、ん~ん?」

目を開く芳佳。芳佳

「 あれ?私・・・・ストライカー をつけてる?」

自分の姿を見て素っ頓狂な声を上げた。

リーネ

「さっきまでネウロイと戦ってたんだよ。

芳 佳

バ リさんをやっていて突然、風が吹いてペリーヌさんが立ち上がって・ ・そのあとの記憶が無い!)」 いつの間に出撃があったの~っ!? (部屋でみんなとコッ

シャー リー

「覚えていないのか?」

シャーリーは、芳佳に近づいて顔を覗き込む。

ペリーヌ

あなたのおかげで私たちは大、大、大迷惑でしたのよ!」

ペリーヌが怒鳴る。

芳佳

っ わ 私のせいって・ 私のせい、 何ですか?」

ペリーヌ

「決まっているでしょう!」

芳 佳

「うう・・・・ごめんなさい・・

エビル

るんだから。 『まぁまぁペリー **6** ヌ。 芳佳のせいじゃないって!僕達にも責任があ

エビルがフォローをする。

やがて、 他のウィッチ達も芳佳のまわりに集まってくる。

サーニャ

••••

る サー ニャは心配しているか、 怯えているのか分からない表情に変わ

ミーナ

いしい 今回の行動は命令違反で・ 宮藤さん?あなたの潜在能力が開花したのは嬉しいけれど、

芳佳を注意しようとするミーナを、美緒とエビルが視線で制した。

美緒

「さあて。

を見渡す。 美緒とエビルは、 ルッキー二達 (リーネ、 エイラ、 サーニャ以外)

美緒

「どう言う事態なのか、 説明してもらおうか?」

芳佳やエビル達の視線が、 ルッキー 二に集中する。

(え~、あたし?)ルッキーニ

小さく自分を指さし、 顔をしかめるルッキーニ。

コクン!

頷く一同。

「じ、実はですね・・・.ルッキーニ

しぶしぶ説明し始めた。

込んだ宮藤を、そのまま出撃させたわけだな?」 「ほう、それでお前らは、コックリさんで何かに憑依かれたと思い

話を聞き終わった美緒は、呆れた顔で一同を見渡した。

美緒

その言い回しから察すると、 いたとは思っていない様だ。 どうやら美緒は本当に巴御前の霊が憑

「でも、 ルッキーニ でも!毎日出撃前にコックリさんをやれば、 戦力倍増です

ルッキーニは、瞳をキラキラさせて美緒を見上げた。

美緒

「ほうほう、そうか。なかなか良い提案だな。.

美緒は、 笑顔 (目が笑っていない) でルッキーニの前に立つと!

ゴンッ!

拳をルッキー 二の頭に降らせた。

美緒

「というわけ無かろう!」

ルッキーニ

・・・・つつつ~っ!」

涙目で頭を抱えるルッキーニ。

美緒

「どうする?この連中?」

美緒は、ミーナを振り返った。

ミーナ

「そ、そうねえ・・・・」

ミーナは、困って顔を見せる。

エイラ

「・・・終身トイレ掃除ッテノハドウデスカア~。

エビル

(と、とんでもない提案するねエイラは。

ルッキー ニ

- 1J-6> !あんただって止めなかったじゃない!」

ルッキーニは、あまりにも恐ろしい提案に顔が青ざめる。

エイラ

「ンジャア、終身草ムシリ?」

ルッキーニ

「だ・か・ら!提案しなくていいの!」

ミーナ

しての処罰は一切行いません。 「取りあえず、 情けなくて報告書にも書けないので、 でも・ この一件に関

ミーナは、微笑みながら宣告した。

ミーナ

「以降、基地内でのコックリさんは禁止。」

「了解~。」シャーリー

「了解です。」ペリーヌ

ホッとするシャーリーとペリーヌ。

ミーナノ美緒

「いいわね(な)、ルッキーニ少尉も?」

場では小さくなって頷いていた。ミーナと美緒の目が笑っていない事に気付いたルッキーニは、 そね

ウィッチ達の居る地点から真上で灰色の堕天使の姿をした者が観察 をしていた。

『ほお・ 誰かと思えばエビルか・ ・これから先が楽しみだ・

・アッハッハッハッハッハッハッ!!』

灰色の堕天使は、直ぐに大空から消えてしまった。

エビル

! ?:

エビルは、

誰かに見られていた視線に気付き上を見る。

美緒

「どうした相羽?基地に帰還するぞ。

『うん!分かったよ。エビル (何だこの感覚は?)』

エビルは、気になりながらも基地に帰還した。

数日後

シンヤ ダルクになっちゃったよ!」 「 ミー ナーペリー ヌがルッキー ニのダウジング占いで!ジャンヌ・

シンヤは、 レイピアで刺し傷や切り傷を負ってミー ナの所に駆け込

んで来た。

ミーナ

・・・ルッキーニ少尉を此処に呼んで。」

ミーナは、こめかみを押さえて頭を振った。

その数日後

芳 佳

います!」 でカラミティ・ジェーンになってシンヤさんを逆強姦しようとして 「ミーナ隊長!シャーリーさんが、ルッキーニちゃんのダイス占い

どこかはかシンヤの悲鳴とシャーリーの淫魔の笑い声が響く。

バンッ!

「ルッキーニ少尉を呼びなさい!」ミーナ

またまた数日後

シンヤ

国のアリスになっちゃったよぉ!」 「ミーナー今度は、 リーネがルッキーニのルーン占いで、不思議の

完全に実在の人物でなかったりする。

ミーナ

「ルッツッツキイイイイイーニ少尉!」

ミーナは、髪をかきむしり、悲鳴を上げた。

その後、ありとあらゆるオカルト儀式が禁止になった事は、 でもない。 言うま

第四話:コックリさんは怖いよ・

バルクホルン

の堕天使 ら離れない!? もう戦う事以外何も無い!たった一人になっても何故貴樣は、 「我が祖国は、 ネウロイと灰色の堕天使に蹂躙され炎の中没した。 次回 空の騎士テッカマンエビル 第五話 灰色 私か

第五話:灰色の堕天使(前書き)

芳 佳。 は 第 5 0 けで初戦果をあげる。 そして芳佳とリネットは、 友情を手に入れられた。 の日々をおくる。 自分が役立たずだとの思いからだったがテッカマンエビルの助 彼女は、自分と同じ新人のリネット・ビジョップと共に訓練 1統合航空団。 しかし、 通称ストライクウィッチーズに入隊した宮藤 何故か芳佳に対して心を閉ざすリネット 心強い兄の存在で

第五話:灰色の堕天使

バルクホルン

! ?

事しか出来なかった。 上空で故郷の燃え盛る所をバルクホルン、ミーナ、 エーリカが見る

???

あの下等生物は貴様等の故郷を破壊するぞ?』 『ほう・ どうした?かかって来ないのか小娘?私を倒さないと

三人の目の前には、 に挑発する。 ネウロイの破壊を邪魔した灰色の墜天使が三人

バルクホルン

゙うおおおおおおおおおおお!!!.

灰色の墜天使の言葉に最初来たのがバルクホルンだった。

灰色の墜天使

た様なものだなぁ 『ふっはっはっはっ どうした?痛くも無いぞ?丸で蚊に刺され

果が無かった。 バルクホルンは、 無我夢中で灰色の墜天使に機関銃を発砲したが効

灰色の墜天使

『そろそろ遊びが飽きってきたな・・・

6

る 灰色の墜天使は、 町を破壊しているネウロイに向かって片手を向け

すると

落ちてきた。 ネウロイは、 体が粘土を潰す様に変形させると白い灰となって町に

灰色の墜天使

『ではな!』

灰色の墜天使は、この場から出て行った。

バルクホルン

!

せる。 バルクホルンは、 町の真ん中で泣いている女の子を見て顔を豹変さ

それは、 自分の妹:クリスティーヌ・バルクホルンだったからだ。

女の子の真上からネウロイの欠片が落ちてきた!

バルクホルン 「クリス!!」

彼女は、ベッドから起き上がるとこれが昔の過去である事に驚く。

バルクホルン 「なんであんな夢を・

リーネ

った子供の為に出動したんだって。」「ねぇ芳佳ちゃん。相羽さん聞きました?カウハバ基地で迷子にな

芳 佳

「へえ!そんな活動もするんだ。

シンヤ

「凄いね。」

二人は、食堂でシンヤの朝食の手伝いをしにきていた。

「うん。たった一人の為にね。!」。

芳佳

だもんね。 「でもそうやって一人一人を助けないとみんなを助けるなんて無理

シンヤ

(良い方向に向いて来て良かったよ。)

シンヤは、二人を後ろから優しく笑顔で見守る。

バルクホルン

「みんなを助ける?」

シンヤノ芳佳ノリーネ

?

朝食を持って行く。 芳佳達は、振り向くとバルクホルンが最初に来てお盆に載っている

バルクホルン

「そんな事は、夢物語だ。

バルクホルンは、三人にそう言うと席に着いた。

シンヤ

(何でそんなにネガティブ何だ?彼女は?)

シンヤは、バルクホルンの様子を心配していた。

しばらくすると他のウィッチ達も食堂に来て朝食を受け取り席に着

<

ミーナ

「どうしたの?トルゥーデ。浮かない顔ね。」

ハルトマン

「食欲も無さそう。

バルクホルンの左右の隣の席にミーナとハルトマンが座る。

バルクホルン

「そんな事はない。.

ハルトマン

「食事は、 しっかりと取るトルゥーデが手をつけない何て。

ハルトマンが言うとバルクホルンは、 無理やりに食べ始めた。

チラッ

バルクホルンは、芳佳の視線を置いた。

芳 佳

! ? .

「芳佳?」

芳 佳

「誰か見ている様な感じがしたんですけど・

リーネノシンヤ 「誰か?」

芳 佳

「気のせいかな?」

ルッキーニ 「おかわりー

ルッキーニがピラフのおかわりを要求する。

シンヤ

「はいはい。

シンヤがピラフを持ってルッキーニの所に来る。

シンヤ

「ん?」

シンヤは、 バルクホルンのお盆を見ると全く手につけていない状態

だった。

シンヤ

「どうかしたの?」

バルクホルンは、 何も言わずにお盆を片付ける。

シンヤ

?

「おかわり早く———!」ルッキーニ

「あっ!うん!」シンヤ

シンヤは、 ピラフのおかわりをルッキーニお皿に盛る。

ペリーヌ

ても食べられた物じゃありませんわ。 「バルクホルン大尉じゃなくてもこんな腐った豆なんて。 とてもと

ペリーヌは、納豆が苦手の様らしい。

「納豆は、

体に良いんだよ。

美緒だって好きだっていっていたし。

シンヤ

って・ み・み・み・?//

み!み!み!美緒ですって!?坂本少佐っとお呼びなさい

!私だ

ベリーヌは、顔を真っ赤にさせた。

シンヤ

たよ。 「良いじゃ ない。 同い年なんだし。 本人も気にするなって言ってい

ペリーヌ

んわ!」 「兎も角!少佐が好きでも!この臭いだけは絶対に我慢が出来ませ

ピッキ!

シンヤの何かが発動した。

シンヤ

「ダメだよぉ~。 ちゃんと残さずに食べなきゃね!」

手でペリーヌの口の中に入れた。 シンヤは、 ペリーヌの肩を片手で掴むともう一方の納豆を持った片

・ペリーヌ・

「んんんん!!!」

た。 ペリー ヌは、 逃げようとしたがシンヤの方が力があり負けてしまっ

いだ。 そして納豆が全てペリーヌの口に入ると食べ終わるまで手で口を塞

「相羽さん!ま・・ミーナ

「なんだい?ミーナ?」シンヤ

シンヤは、 て言い返せなかった。 笑顔だが目が笑っていない むしろミーナは、

た。 シンヤに無理やり食べさせられたペリーヌは、 しばらく動けなかっ

そしてミーナ達は、 食堂でシンヤに勝てないと理解した。

ブウウウウウウウウー!

芳 佳、 トマンが上空で飛行演習をしている。 シンヤ、リーネが洗濯物を干し終わるとバルクホルンとハル

芳佳

「わー 凄い!」

リーネ

「バルクホルン大尉とハルトマン中尉ね。」

三人は、 上空で演習をしている二人を見ていた。

シンヤ

て干す物忘れたから取りに行って来るよ。 (そうだ!まだ干す物があったな!) 芳佳、 リーネ少しやってい

「・・・・」バルクホルン

バルクホルンは、真下で洗濯物を干している芳佳を見て妹の面影を

思い出す。

「乗れていないな・美緒

「ええ、遅れがちね。ミーナ

た。 ナと美緒は、 ハルトマンと違いバルクホルンの異変に気が付い

シンヤ

「どうしたの?二人して?」

緒が居る事に気付き近づくシンヤ。 基地内から洗濯物を持って来ると入り口で双眼鏡を持つミーナと美

美緒

「相羽か。洗濯物を干すのかすまない直ぐに退こう。

シンヤ

「いや、 まだ大丈夫だよ。 それよりバルクホルンがどうしたの?

・ハルトマンと違ってフォー ムが崩れている?」

美緒

「流石だな。 おかしいんだ。

シンヤ

「何がだい?」

美緒

「完璧主義のバルクホルンらしく無いんだ。 次のシフト外した方が

良いか?」

美緒は、 隣に居るミーナに聞く。

ミーナ

エースが使えないと少し不安ね。」

シンヤ

だね。 「そうだね。 **芳佳とリーネも出来る様になってきても戦力的に不安**

美緒

「過労で体を壊したのか?」

ミーナ

「何か気にかかっているみたい。 宮藤さんが来てからよ。

シンヤ

「芳佳が?」

シンヤは、最初の頃を思い出した。

バルクホルンは、 みが含まれている雰囲気で気になっていた。 最初も芳佳に冷たく当たっ ていたがその瞳に悲し

美緒

「組ませてみるか?」

美緒は、 芳佳とバルクホルンを練習で組ませようと考えていた。

茶の準備をしていた。 洗濯物を終えるとシンヤは、 基地の掃除を芳佳とリーネは午後のお

キラキラ!

シンヤ 「 いい し し

ペチャ!

シンヤ 「え?」

シンヤは、振り向くとさっきまで掃除をしていたモップがペリーヌ の頭に当たってしまう。

ペリーヌ 「貴方ねぇ!」

シンヤ 「ごめん!ごめん!」

シンヤは、慌ててハンカチを出すとペリーヌの頭を拭こうとした。

「結構です!」

シンヤ

かなり怒っています。

廊下に人の気配を感じてみるとバルクホルンとハルトマ

シンヤは、

ンが何か話している。

「バルクホルン

!

た。 バルクホルンは、 シンヤの存在が分かると睨んでハルトマンと行っ

ペリーヌ

「相羽さん!聞いてますの!?」

その後ペリーヌは、シンヤを1時間位説教した。

シンヤ

・ペリーヌ未だに怒っていたよな・

シンヤは、 掃除道具を片付けようとすると人の声が聞こえた。

シンヤ

(確かこの辺りは、 バルクホルンの部屋の辺りだったよな。

バルクホルン

今頃思い出すなんて・

ガチャッ-

いた。 バルクホルンは、 部屋を出ようと開けるとシンヤが目の前に立って

シンヤ

い・・いや これは・ ・その

バルクボルン

「邪魔だ。 其処を退いてくれないか?」

シンヤは、 緊張しているせいかバルクホルンの言葉に従った。

バルクホルンが部屋を去ると一個の写真立てを見つけた。

シンヤ

「何で裏返しに?」

写真立てを見ると芳佳に似た少女とバルクホルンの笑顔で取れた写

真だった。

シンヤ

「もしかして・

シンヤは、 大体予想できた。

この少女が死んだか未だに昏睡状態のどちらかと言うことを。

キッチンでは、午後のお茶の準備をしている芳佳とリーネ。

芳 佳

「シンヤさん遅いな~・

シンヤ

「遅れてごめん!」

シンヤは、急いでキッチンに戻ってきた。

「どうしたんですか心配してたんですよ。リーネ

「いや~ごめんね。」シンヤ

シンヤも二人の手伝いを始めた。

リーネ

「ねぇリーネ。シンヤ

「はい?」

シンヤ

「バルクホルンって何時もあんな感じなの?」

リーネ

「バルクホルン大尉は、 誰にでもそんな感じですよ。

「へぇ~」

「ミーナ隊長とハルトマン中尉は、別ですけどね。

シンヤ

「ミーナとハルトマンだけ?」

リーネ 「戦いが始まった時からずっと一緒だったんですって。 あの三人。

「へぇ~ (じゃあ夜ミーナに聞いてみるとするか。)」シンヤ

テーブルに座る。 お茶の時間になり大きなバルコニー に入りウィッチー ズとシンヤが

ミーナ

「作戦室からの報告では、 ゆっくり鋭気を養ってください。 明後日が出撃の予定です。ですので皆さ

ミーナは、テーブルに座る。

美 緒

「宮藤とリーネの二人は、 この後訓練だからな。

リーネ/芳佳

「はい。わかりました。

芳佳は、 紅茶の入ったカップを持つと音をたててしまった。

ペリーヌ

「もう・・下品なんですから・・・

ペリーヌは、芳佳に呆れている。

芳 佳

「ふえ?」

「芳佳。紅茶は、音をたてたらダメだよ。シンヤ

芳 佳

「!/////////////

芳佳は、真っ赤になり恥ずかしがった。

その後芳佳、リーネは、美緒の訓練を行う。

最後にシンヤに改善できる範囲を直して今日の訓練が終わった。

そ の 夜

ハルトマン

\ \ !

ウィッチーズ達は、機嫌が良かった。

それは、 何故か紙袋を貰ったからだがある者を除いて。

ミーナ

「今回は、どうするの?」

バルクホルン

「また何時もの様にしておいてくれ。

ミーナ

「少しは手元に置いておかないと・・

バルクホルン

「衣食住全部出るのにそれ以外必要ない。」

バルクホルンがそう言うとミーナは、 諦めてシンヤと芳佳が食器を

洗っている厨房に来た。

ミーナ

「宮藤さん。相羽さん。

芳 佳

「はい?」

「なんだい?」シンヤ

ミーナ

「ちょっといらっしゃい。」

ミーナは、 手招きをすると二人に紙袋を渡した。

芳佳は、浴場から出ると困った顔に変わる。

芳 佳

を貰えるなんて思っていなくてびっくりしちゃった。 「リーネちゃん。ミーナさんからお給料貰ったんだけど・ 私お金

リーネ

「ふふふ・・芳佳ちゃんらしいね。」

芳佳

「ところで1ポンドってどの位の価値なの?」

リーネ

確か扶桑のお金は

芳佳

「円だよ。

リーネ

「そうすると

美緒

今は、 1ポンドが19 ·6 円だ。

すると美緒がやって来た。

芳佳

1 9 ・6円って事は・・ 大体米俵いっぴょう (60kg)って

事は・ ・8ポンドってご飯3200倍分!!?」

美緒

「ほう・ ・そうか・ ちゃんと計画的に使えよ。 ちなみに今回の俸

給は、 半月分だ。

芳佳

「え!?坂本さんなんでそんなに貰えるんですか?」

美緒

死ぬかも知れない危険と隣り合わせだ・ 「いいか?私達は、 何時も最前線で戦っているんだ。 だから・ それは、 明日

芳佳

「だから?」

美緒

慮だ。それと・・・宮藤とリーネの棒給は、 相羽がお前達の面倒を見ていたからな。 「悔いを残さないようにせめてお金だけでも困らないようにとの配 2割天引きしてある。

そう言うと美緒は、浴場を後にした。

芳 佳

「私・・欲しくないな・・

リードー

「それでも私は、実家に仕送り出来て助かるけどね。

芳 佳

「仕送り?」

リーネ

「私には、兄弟が沢山いるから。」

芳佳

「そうなんだ。私もおばあちゃんとお母さんに送ろうかな。

芳佳は、 牛乳瓶を片手で持ち反対の手を腰に置いて飲んでいた。

ペリーヌ

「宮藤さん!あなたって人はどれだけデリカシーが無い人なんです

か !

芳 佳

?

ペリーヌ

むは!おまけに少佐とお話をするなんて!この豆狸!」 「今日と言う日は、 もう勘弁なりません事よ!紅茶を音をたてて飲

芳佳もペリーヌに此処まで言われたら黙っていられない。

芳 佳

「豆狸!」

ペリーヌ

「そうですわ!なければ駄犬ですわ!」

芳佳

「ひど~い!何で其処まで言われなければならないんですか!?」

ペリーヌ

「田舎者のクセに少佐と仲良くして。」

芳 佳

「田舎者って坂本さんとは、 同じ国ですけど!」

ペリーヌ

「だから少佐とお呼びしなさいと何度言えばわかるの!」

芳 佳

「さんって呼べって言われたからそうしてるんです!」

芳佳とペリーヌは、お互いに睨んでいる。

ミーナノシンヤ

「はいはい!其処まで!」

ペリーヌと芳佳が振り向くとミーナとシンヤがいた。

ミーナ

「喧嘩は、 厳禁よ。もう一度やったら罰として・

シンヤ

「わかってるよねペリーヌ?」

ペリーヌの目の前にシンヤが笑顔で言う。

ペリーヌは、酷く怯えいる。

ミーナ

「一週間トイレ掃除です。」

シンヤノミーナ

「はいは?」

芳佳/ペリーヌ

「はい。」

ミーナ

「よろしいじゃ解散。

シンヤは、 その夜自分の部屋隣のミーナの部屋を訪れた。

ミーナ

「相羽さん?どうしたのこんな夜中に?」

シンヤ

「実はねミーナに聞きたい事があるんだ。」

ミーナ

「何かしら?」

シンヤ

ビ 「今日バルクホルンは、芳佳を見て様子がおかしかったんだ。 バルクホルンがこんな物を見つけたよ。 それ

シンヤは、 バルクホルンと少女の写っている写真を見せる。

ミーナ

一人の妹がいたの。 わかったわ。 全てを話すわ。 バルクホルン トゥルー デには

ミーナは、シンヤに全てを話した。

昔カールスラントを攻め込んで来たのは、 天使によって国を滅ぼされた事を戦いの中でバルクホルンの妹クリ スティーナが巻き込まれて今も意識不明の状態でいる事を。 ネウロイの他に灰色の堕

シンヤ

「だったら彼女を放っとくワケには、 いかないな。

ミーナ

「相羽さん?」

シンヤ

しまったんだ。 「ミーナ・・・ 僕にも妹がいたんだ。 けど死んだ僕のせいで殺して

ミーナ

「相羽さん!?それはどう言う・・・・」

ミーナは、言い返す前にシンヤは部屋に戻った。

翌 日

させられていた。 今日は、二人ペアになって飛行演習を行う為にバルクホルンも参加

美緒

「今日は、編隊飛行の訓練を行う。私の二番機にリーネ。

「 は い !」

美緒

「バルクホルンの二番機に宮藤が入れ。

芳佳

· · · · · _

芳佳は、 バルクホルンに対してどう接して良いのかわからない。

美緒

「どうした宮藤返事は?」

「はい!」

芳佳

美緒

転換したらそれについて行く。 「二番機は、ひたすらリーダー後に付いて行け。 射撃指示が出たら撃つ。 他は見るな。 方向

芳佳/リーネ

「はい!」

美緒

だから安心してついて来い。 「リーダーは、 常に敵から目を離さず二番機に的確な指示を出す。

芳佳/リーネ

「はい!」

ストライカー を履くと直ぐに飛び立つ美緒達。

美緒

「今回は、我々が逃げるのでバルクホルン隊は、 それを追え。

「・・・・・

美緒

「どうしたバルクホルン?聞こえていないのか?」

美緒は、バルクホルンにインカムを見せて言う。

「大丈夫だ。行ってくれ。」バルクホルン

美緒

「よしリーネついて来い。」

美緒とリーネは、直ぐに移動する。

「・・・・・・」バルクホルン

・・行くぞ新人。

芳佳

「はい!」

芳佳もバルクホルンと一緒に行動を開始する。

「!?」

「まさか!」

突如警報が鳴る。

BUULULULULULULU!!

「始まったか。」シンヤ

美緒

「ネウロイだ!東07地域高度15000に侵入!」

シンヤ

「テックセッタアアアアアアア

を形成して体が黒い装甲を形成し頭部は、 シンヤは、テッククリスタルを翳すとクリスタルの形のフィー 漆黒のヘルメットの紅の

バイザーが出来上がった。

エビル

『テッカマンエビル!』

エビルも他のウィッチーズ達と供に飛ぶ。

美緒

「最近奴らの出撃サイクルにぶれが多いな。

ミーナ

「カールスラント軍の動きがあったらしいけど詳しくは

「カールスラント-バルクホルン

美緒

「どうした?」

バルクホルン

いや 何でもない。

エビル

· · · · · · ·

エビルは、何故か彼女を心配している。

何か嫌な胸騒ぎがしたからである。

美緒

隊に加勢しる。 は、私の所に入れ。 「よし!隊列変更だ。 エビルは、我々の援護に必要ならどちらかの編 ペリーヌは、バルクホルンの二番機に。 宮藤

エビル

『わかったよ!』

美緒は、眼帯を取り魔眼で正面を見た。

美緒

「敵発見!」

ミーナ

「バルクホルン隊突入!」

バルクホルン

「了解!」

バルクホルンとペリーヌが先行する。

ミーナ

「少佐援護に!」

芳佳

「はい!」

るූ バルクホルンは、 機関銃をネウロイとの距離が無い場所から攻撃す

ミーナ

「おかしいわ!」

「『えっ?』」

ミーナ

よ!なのに今日は、 「バルクホルンよ。 あの子は、 一人で突っ込み過ぎる。 何時でも視界に二番機入れているの

シュッ!

バルクホルンは、

無我夢中でネウロイを攻撃する。

バルクホルン

バルクホルンは、 背後から殺気を感じて瞬時にシー ルドを展開した。

???

『少しはまともになったか・・・・小娘。』

「灰色の堕天使!」バルクホルン

バルクホルンは、 灰色の堕天使に向ける。 灰色の堕天使を見ると頭に血が昇ったのか攻撃を

エビルは、

『あれは!?

「相羽さん!?どうしたの!?」

ミーナ

エビル

れ!灰色の堕天使は、 『ミーナ!他のメンバーをネウロイだけに攻撃する様に指示してく 僕でないと戦えない!』

ミーナ

「相羽さん!」

う エビルは、 ミーナの声を無視して急加速でバルクホルンの元に向か

灰色の堕天使

は私に勝てないぞ?』 『ハッハッハッ!どうした?小娘?技術は、 良くてもそんな玩具で

「ウオオオオオオオ!バルクホルン

バルクホルンは、怒りで周りが見えない。

「アソコを狙って!」ミーナ

「はい!」

リーネは、ライフルでネウロイを攻撃する。

美緒

「構うなバルクホルン!我々は、ネウロイを攻撃するんだ。

灰色の堕天使

『逃げるのか?』

灰色の堕天使は、 バルクホルンに挑発的に言う。

リーヌとぶつかってしまう。 するとバルクホルンの後ろにいるネウロイが攻撃をして避けるがペ

ペリーヌ

「きゃあ!」

ドン!

体勢が崩れると灰色の堕天使は、 正面から斬りつける。 爪を長く尖らせてバルクホルンの

バルクホルンもシー ルドを展開するが機関銃の範囲まで展開出来ず に中に装填していた弾が灰色の堕天使の爪で斬り付けた場所が爆発 して墜落した。

灰色の堕天使

『トドメだ!』

灰色の堕天使は、 意識不明のバルクホルンに攻撃をしようとする。

ガキィーン!

灰色の堕天使は、 爪に自分と同じ硬さの金属の硬さが伝わる。

エビル

『僕が相手だ!テッカマンゼロ!』

ゼロ

『貴様は、エビルだと!?』

ゼロは、意外な相手に驚く。

エビル

『芳佳!早くバルクホルンを助けるんだ!』

芳 佳

「はい!」

「大尉!」

ペリーヌと芳佳は、 急ぎバルクホルンを助けに向かう。

ゼロ

『逃がすか!』

ゼロは、片手を芳佳達の方に向けようとした。

ドン!

ゼ ロ

『ぐつ!』

ゼロの左脇にエビルのローキックが当たる。

エビル

『貴様の相手は、この僕だゼロ!』

ゼロ

『成る程裏切り者かエビル!』

ゼロは、両手の爪を伸ばすとエビルのテックランサーと互角に戦う。

めていた。 エビルの真下では、 芳佳達がバルクホルンを地上に下ろし治療を始

ドを展開し死守してる。 ペリーヌは、 ネウロイの攻撃から宮藤が治療するまで必死でシール

「うっ・・・・」バルクホルン

バルクホルンは、目を覚ます。

芳 佳

「安心してください。今治しますから。」

バルクホルン

「私に張り付いていてはお前達も危険だ!離れろ 私なんかに・

構わずその力を敵に使え!『いい加減にしろぉ

真上からエビルが下のバルクホルンに怒鳴る。

エビル

『僕等は、仲間だろ!なんで見捨てる!!』

「放を倒せ・バルクホルン

敵を倒せ・ 私の命など捨て駒で良いんだ。

エビル

らもっと多くの人々を救えるだから死ぬな!』 『多くの命を助けるなんて僕には、出来ない!だけど君や芳佳達な

う。 エビルは、 ゼロの攻撃を避けて防いで攻めながらバルクホルンに言

バルクホルン

さえ!」 無理だ。 みんなを守るなんて出来やしない。 私は、 たった一人で

エビル

んて無い!!助けたいそれで良いじゃないか!』 『だから何だ!!助けるのに量は関係ない!人を助けるのに理由な

ゼロ

『他人の心配をする暇があるか!エビルゥ!』

『エビル

『くつ!』

エビルは、ゼロに押されている。

バルクホルン

(クリス!私の力を一人でも多くの!今度こそ!守ってみせる!)

芳佳とペリーヌは、 魔力を使い切ってしまい気絶してしまう。

美緒

「コアだ!」

美緒達は、ようやくネウロイのコアを見つけた。

そしてバルクホルンも傷が治り気絶した芳佳達の武器を持つ。

バルクホルン

(ありがとう宮藤。ペリーヌ。)

笑顔で芳佳達に感謝するバルクホルン。

そして急加速でネウロイに向かう。

ゼロ

『飽きた!もうこれ位で良いな。』

エビル

『待てえええええ!ゼロオオオオオ!!

ゼロは、エビルに攻撃を止めると消え去った。

「リーナナナナナバルクホルン

ウオオオオオオ!」

バルクホルンは、

ネウロイに目掛けて一心不乱に銃を発砲した。

ネウロイは、コアを壊され消滅した。

するとミーナがバルクホルンの元に駆け寄る。

しかしその前にエビルがバルクホルンの前に来た。

パシィーン!!

ミーナより先にエビルがバルクホルンに平手打ちをした。

エビル

だ君の気持ちは、 彼女達・・・僕も君の事を家族だと思っている。 『何で死に急ぐんだ!君の事情は、ミーナから聞いている!!でも 痛いほどわかるつもりでいる!だから死ぬじゃな 僕にも妹がいたん

エビルは、 泣きながらバルクホルンを抱き締めた。

バルクホルン

みを・・・休みを貰えるか?見舞いに行ってくる。 「すまない・ 私達は、 家族だったんだよな。 ミーナ・ · 休

ミーナ

「ええ!」

美緒

「やっとその気になったな。 (ありがとう相羽。)」

美緒もバルクホルンの気持ちをシンヤなら理解すると思っていた。

基地に帰るとペリーヌが芳佳とシンヤの元に来た。

ペリーヌ

ありがとう。 一応お礼だけは言っておきますわ。

ペリーヌは、 照れくさそうに二人に言う。

ガシッ

シンヤ 「ん?」

シンヤは、 後ろを見るとハルトマンが抱きついた。

ハルトマン

「宮藤、 相羽 トゥルー デを助けてくれたんだって?」

シンヤ

「トゥルーデ?」

リーネ

「バルクホルン大尉の事ですよ。

するとバルクホルンがやって来た。

バルクホルン

「本当にすまなかったなペリーヌ、 宮藤。 ありがとう。

バルクホルンがお礼を言うとペリーヌと芳佳は、 笑顔でいた。

シンヤ

バルクホルン君も居なければさっきの戦いで勝てなかったんだよ。

////トゥ!トゥルーデと呼んでくれ!」「それと相羽。私を・・・・バルクホルンじバルクホルン ・・バルクホルンじゃなく・ ・その・

「えっ?」 シンヤ

「何度も言わせるな!」バルクホルン

バルクホルンは、真っ赤にして怒鳴る。

シンヤ 「わかったよトゥルーデ。

b e CONTINUED

第五話:灰色の堕天使(後書き)

ルッキーニ

「じゃーん!新しい水着どう?」

シンヤ

「や・・・止めてよルッキーニ・・・」

鼻血を流し苦しむシンヤ。

シャーリー

「そんなツルペタで恥ずかしく無いか?」

シャーリー巨乳でシンヤの背中につける。

ルッキーニ

「これからなの!そっちが育ち過ぎなの!次回 空の騎士テッカマ

ンエビル 第六話 」

シャーリー

「はやい・おっきい・やわらかい」

シンヤ

「ブウゥ・・・・・!!(鼻血吹く音)」

第六話:はやい・おっきい やわらかい (前書き)

受け重傷を負うが芳佳の懸命な治療によって一命を取り遂げる。 参加する。 カマンゼロの襲来し芳佳とシンヤ:テッカマンエビルは再び実戦に 冷たく接してしまう。 其処に新たなネウロイと灰色の堕天使:テッ 新人である芳佳に敵意をむき出しにするペリーヌ。 であるバルクホルンは、過去のトラウマを芳佳に重ね彼女に対して その戦いの中でバルクホルンがテッカマンゼロの攻撃を そしてベテラン

だ。 彼女を救った芳佳とシンヤは、 ようやく部隊の人間に認められたの

「ん?」

シンヤは、 目を覚ますと両手両足をベッドに縛られていた。

「ふっふっふっ!」シャーリー

「アッハッハッハッ 」ルッキーニ

淫らしい目でシンヤを見つめる二人。

「シャーリー?ルッキーニ?」

シンヤ

シンヤもどう言う状況なのか解らない。

「相羽・・・・お前の初めて私にくれよ。シャーリー

「シャーリー、私応援するねルッキーニ

「おう!じゃあ始めるか。.

シンヤ

「誰か助けてー!助けてよーー!!

リーネ

「相羽さん?」

部屋からリーネが来る。

シンヤ

「リーネ?」

シンヤも地獄に女神と言わんばかりにリーネに希望を持つ。

リーネ

「ふっふっふっ!」

リーネは、突如不気味に笑い始めた。

シンヤ

?

リーネ シャーリーさん、 ルッキーニちゃん。 私も混ぜて下さいよ。

リーネも何故か参加してしまう。

シンヤ

「ちょっと!駄目だって!もう・ ・ブヴゥ

ドシィーン!

基地から何かが落ちる音が響いた。

リーネ

「どうかしたんですか?相羽さん。

るシンヤがいる。 リーネは、 シンヤの部屋を覗くと床に大量の鼻血を出して倒れてい

リーネ

「相羽さん!大丈夫ですか!?」

リーネは、シンヤに駆け寄る。

シンヤ

「リーネ?いや...ちょっとね夢を・・・

シンヤは、 リーネを見ると胸の谷間が間近にあり顔を真っ赤にする。

ポタッ!

シンヤは、鼻血を一滴流す。

シンヤ

「あっ!いや !何でもない!何でもない!何でもな・ ブヴゥ

!!!

再び鼻血を吹くシンヤ。

「リー?」 ネ

シンヤ

(地獄だ・・・・生き地獄だ・・

シンヤは、しばらく動けなかった。

しばらくしてシンヤは、 リーネと一緒に廊下を歩ていると芳佳と合

流し訓練を教えている夢を見たと嘘を言い。

リーネ

相羽さんって真面目ですよね。

芳 佳

「本当だよね。 寝ている間にそんな事を考えるなんて。

リーネ

「この間ネウロイと戦闘をしたばかりですから。 忘れてても平気な

んですよ。」

シンヤ

の谷間に挟んで)「おい!相羽!」えっ!?」 「う、うん (何であんな夢を・ ・夢の中でリーネが僕の顔を胸

モニュ!

振り返り咄嗟に何か柔らかい物を掴み見ると美緒がいる。

美緒

「楽しいか?」

シンヤ

「美緒!?これは、 これは、 これは、 これは、 これは、これ・

・ブヴゥーーーーー!!」

バタン!

芳佳/美緒/リーネ

「シンヤさん(相羽さん)(相羽)!」

する。 美緒も胸を掴まれた事など忘れて鼻血を流して倒れるシンヤを心配

シンヤ達は、ミーティングルームに居た。

芳佳

「シンヤさん大丈夫ですか?」

芳佳は、 鼻にティッシュを詰めているシンヤに聞いた。

シンヤ

「大丈夫だよ。 ありがとう。 で明日海に行くのかい?」

美緒

「ああ、 明日の午前からだ。 場所は、 本島東側の海岸。

芳佳

「やつたああああ!海だああああ!」

芳佳は、喜んでいた。

シンヤ

「あっはっはっはっはっ!残念だけど芳佳訓練だよ。

美緒

ならん。 「その通りだ。 例え海上で飛行不能になってもだ。 我々は、 戦闘中何が起ころうとも対応出来なければ

シンヤ

「だから海落下した時の訓練かぁ。」

シンヤ達の言葉を聞いて芳佳は、 ガッカリする。

シンヤ

「大丈夫だよ。不安なら僕が予習で教えてあげるから。

芳佳

「本当ですか!」

リーネ

「私にも教えて下さい。

シンヤ

ミーナ。 「良いよ。それに訓練が終われば自由時間があると思うから。 ねっ

「そうね。集合は、ミーナ ・00よ良い?」

芳 佳

ミーナ

っぱい。 」

んは・・・・基地の何処かで寝ていると思うから探してみて。 さい。シャーリーさんは、朝からハンガーにいるわ。ルッキーニさ 「では以上の内容をシャーリー さんとルッキー 二さんに伝達して下

芳佳

「わかりました。行こうリーネちゃん。

リーネ 「うん!」

芳佳達は、 ハンガーに向かう。

「元気ねえ。

「シャーリーは、またハンガーか?」

ミーナ

「ええ、 朝からずっとそろそろ出て来る頃かしら。

美緒

「五月蝿くなりそうだ。

美緒

「あっ!」

シンヤ

シンヤ

たっけ!」

「そう言えば昨日の夜にシャー

リーにご飯を持って行く約束してい

「相羽どうした?」

シンヤもハンガーに向かう。

シンヤは、台所に作っていたハンバーガーを持ってハンガーに行く。

ドシィーン!

シンヤ

「何だ!何だ!」

に急ぐ。 シンヤは、 急いでハンガー に向かう途中芳佳達と合流してハンガー

シンヤ

シャー 「おっ!よぉ~ 「シャーリー !どうしたんだ?三人して?」

「あのさっきの音は?」

シャー 「おっ?これの事か?」

シャー は、自ら履いているストライカーユニットを指した。

シャーリー 「うふっ これはなぁ...」

が丸出しになりシンヤまたまた鼻血を出す。 シャーリーがストライカーユニットを起動させるとズボン (パンツ)

突如とてつもない騒音がハンガー内に響き渡る。

三人は、 あまりの騒音に耳を塞いだ。

「もう良いよ。 シャー . IJ , シンヤ

しかしシンヤの声は、 シャーリーに全く聞こえていなかった。

シャーリー 「て何言っているんだ?相羽?」

シャーリーは、ストライカーユニットを停止させると

シンヤ

「静かにしろぉぉぉぉ

シャーリー 「っ!声が大きい!」

シンヤ

「ごめん。けど何ハンガーでしているんだい?」

シンヤは、さっきの騒音で気絶したリーネと芳佳を抱きかかえて聞

???

「うるさいなぁ~~

「 ん ?」 シンヤ

天井辺りにルッキーニがあの騒音で平然と寝ていた。

ルッキーニ

やない。 「せっかく良い気持ちで寝てたのに!シンヤの大声で起きちゃたじ

シンヤ

(あれ?シャーリーの方がうるさくなかったけ?)

シンヤは、 ルッキーニに思わず心の中で突っ込む。

シンヤ

「ルッキーニは、あの音平気かい?」

ルッキーニ

「うん!何時もの事だし。

シンヤ

「シャーリー何時もこんな騒音を?」

シャーリー

「ストライカーのエンジンを改造しただけだよ。

シンヤ

「エンジンの改造って?」

シャーリー

「おいで見せてあげる。.

シャーリーは、ゴーグルをつけストライカーを履いたまま外にでる。

シンヤ

「改造?」

シャー リー

「うん!ストライカーの魔導エンジンなりふりをいじったんだよ。

シンヤ

「なりふりって攻撃や防御に使うエネルギーをかい。

シャーリー

「そう言う事。」

シンヤ

「じゃあ速度だけかい?」

シャーリー 「そう言う事。

ルッキーニ

「シャーリー

速度計算機を持ったルッキーニが合図する。

ブヴヴゥゥゥゥゥ

物凄い速度と飛び出した。

シャーリー

「 行くよマーリン。 魔導エンジン出力全開!」

シンヤ

「シャーリーまだまだ加速しているね。

ルッキーニ

「 時速 フ フ O k M・ 8 0 0 k m!記録更新だよ。

シャーリーが帰って来た。

「シャーリー!記録更新だよ。ルッキーニ

ガチャン!「やったぁぁぁぁ!うわっ!」シャーリー

そのまま倒れた。

「はぁ~お腹減った~

シャーリー

ポタポタ!

(助けて~~~ 死ぬ・・・

シンヤ

鼻血を出すシンヤ。

「これ何ですか?」芳佳

を食べているシャーリーに一冊の本を見て聞く芳佳。 しばらくしてストライカー ユニットの整備をしながらハンバーガー

グラマラスシャー 新記録。 バイクの記録ですか?」

ルッキーニ

て。 「シャー は パイロットになる前は、 バイク乗りだったんだっ

シャーリー

「ボンネビルフラッツって知っているか?」

シンヤ

「ボンネビルフラッツ?」

シャー リー

リベリオンの真ん中にある見渡す限り全て塩で出来た平原さ。

リーネ

そんな所があるんですか。

シャーリー

るってワケ。 達の話をね。 った日耳にしたのさ魔導エンジンを操って空を飛ぶ世界最速の魔女 「そこは、あたし等スピードマニアの聖地なんだ。そこで記録を破 その日にあたしは、 軍に志願して入隊。 でこうしてい

芳佳

「それで任務の無い日にスピー ドの限界に挑戦しているんですね。

シンヤ

「けどどの位行けば満足するんだい?」

シャー リー

そうだなぁ...何時か音速マッハを超える事かな。

芳 佳

「音速って何です?」

シンヤ

「音の伝わる速度だよ。」

シャーリー

「だいたい1200km位さ。

リーネ

「そんな速度を出す何て本当に可能なんですか?」

シャーリー

「さぁね。 でも夢を追わなくなればお終いさ。今日は、 此処までっ

ح!

シャ リーは、ゴーグルを外すとストライカー に置いた。

シャーリー

「ところで宮藤とリーネは、私に用かい?」

リーネ/芳佳

「あああ!忘れてたぁぁ!!」

芳佳達は、 海での訓練をシャー リーとルッキー二に伝えた。

シャーリー

「それは楽しみだなぁ。

「何がだい?」シンヤ

「 宮藤とリーネの水着姿。 「 宮藤とリーネの水着姿。

ポタポタ!

シンヤは、二人の水着姿を想像して鼻血を流す。

応した。 「ふぁ~~ 今まで寝ていたのかルッキーニは、シャーリーのゴーグルを見て反 ・・あつ!」

「ああ! ~~!」ルッキーニ

「ていっていてい~ん!」ルッキーニ

ガシャ!ガチャラン!

「!?にやあああああああ~っ!」ルッキーニ

ルッキー ニは、 してしまった。 ドシな事にシャー リー のストライカー ユニットを壊

??? 「いちち・・・・、ちょ、ど、どうしよ!」 ルッキーニ

其処に現れた人魂の幽霊は

ほうルッキー二坊どうしたんだ?』

ルッキー 「あっ!ゴダー ドのおっちゃん。 実はね・

ルッキーニは、 事の事態をゴダードに説明する。

ルッキーニは、四話:コックリさんは怖いよの後懲りずに黒魔術占 して第501基地に住んでしまったのである。 いでゴダードを呼んでしまいシンヤの知り合いと言う事を話今こう

そしてルッキーニのイタズラ仲間だった。

ゴダード

ゴダードは、ルッキーニに色々指示を出した。 『なる程なぁよし!儂に任せろ。』

ルッキーニ 「ゴダードのおっちゃんこれで良いの?」

ゴダード 『おぅ。ルッキーニ坊は、偉いぞ。』

ルッキーニ

「わ~い!褒められちゃった!じゃあね!」

ルッキーニは、ハンガーを後にした。

『ふっふっふっふっ!次に出撃する時が楽しみだのぅ。

6

ゴダードは、不適に笑う。

ゴダード

ゾクッ!

「うっ!(・・・・・)」シンヤ

じた。 シンヤは、 芳佳達に明日の訓練の予習を教えていると突如悪寒を感

芳佳

「シンヤさん?」

シンヤ

「いや何でも無いよ。 それよりさっきの方法ですれば良くなるよ。

芳佳

「これでですか?」

リーネ

「大丈夫ですね。_

明日する訓練は、 - ユニットをそのまま履いて海中から出て来る予習をしていた。 海上に墜落してしまった事を前提にしストライカ

シンヤ

「さぁ頑張って!」

だはい!」

芳佳達は、 海中に沈んでストライカーユニットを起動させる。

しばらくすると芳佳達は、海面に浮かんでいた。

シンヤ

だ。今の君達なら出来るよ。 「そうそう!そのままストライカーユニットを維持しながら泳ぐん

「はい!」

芳佳達は、 慣れて来たのかコツが理解していった。

翌日

「イヤッホー!」シャーリー/ルッキーニ

ルッキー二達は、海に飛び込んで泳ぎ始める。

地に黒のストラップの縁取りがついたタンキニ。 ちなみにシャーリー は深紅のセパレー ツの水着で、 ルッキー 二は白

その向こうでは、 デが質実剛健、 カールスラント軍支給のワンピースを着てトゥル 泳いでいる。

支給のワンピースを着て犬掻きをしている。 エーリカは、 デザインが違うがトゥルー デと同じカールスラント軍

サーニャ

「肌がヒリヒリする。」

エイラ

「腹減ッタナア・・・・」

浜辺では白のチュー ツを着たサーニャがじっと座っている。 ブトップと水色のボトムを着たエイラと黒のセ

芳 佳

「はぁはぁ!」

リーネ

「ひいひい!」

芳佳達は、 ユニットを運ぶと倒れた。 美緒の訓練がようやく終わり浜辺で自らのストライカー

芳佳

「昨日の予習が無かったら大変だったね・

リーネ

「本当に予習していて良かった・・・」

芳佳達は、シンヤの有り難みを体で理解した。

芳佳は、扶桑海軍水上用制服を着ている。

IJ ネは、 フリル付きのピンクのワンピース姿。

服を着ていた。 さっきまで二人に指導していた美緒は芳佳と同じ扶桑海軍水上用制

ナは、 露出度の高い白のホルターネックのセパレーツを着たオ

リーブ色のパーカを羽織ったシックなでたち。

シンヤ

「二人ともお疲れ様。」

が水を持って芳佳達の元に来た。 赤のバミューダタイプの水着を着て灰色のパーカを羽織ったシンヤ

シンヤ

「これを飲めば少しは、動けるよ。

芳佳

「ありがとうございます。

リーネ

「いただきます。」

二人は、 飲むと落ち着きを取り戻したのか少し元気になる。

シンヤ

「お腹減ったでしょ?」

シンヤは、 出来たてのバーベキューを芳佳達に渡す。

シンヤ

来てまだまだバーベキュー有るからさ。 僕は、 他の人達にも上げて来るから芳佳達も動ける様になったら

シンヤは、 サーニャとエイラの所に行きバーベキューを配る。

「大丈夫か?」シャーリー

芳 佳

「シャーリーさん?」

芳佳達が顔を上げるとシャーリーがいた。

シャーリー

「それにな。こうやって・・

シャー リーは、二人の間に大の字に横たわった。

シャー リー

「寝ているだけだって悪くない。

芳佳とリー ネもシャ の真似して大の字になる。

リーネ

「お日さま、あったか~い・・・

顔がほころぶ、リーネ。

芳 佳

「うん。気持ちいい・・・」

シャー リー

「だろ?」

番気持ち良さそうなシャーリーが、 そう微笑む。

柔らかい陽射しを注ぐ太陽。

耳に心地よい波の音。

静かに流れてゆく時間。

芳 佳

(確かに、こういうのも悪くないなあ。

芳 佳

「・・・あれ?」

かざした指の隙間からのぞく太陽の前を、 何かが過ぎった気がした。

芳佳は、 自分が目にしたものを確認しようと、身体を起こす。

リーネ

「どうしたの?」

リーネは、つられて起きると、芳佳の顔を見る。

シンヤ

「芳佳どうしたんだい?」

見つめる。 みんなにバーベキューを配り終わるとシンヤも芳佳に気づいたのか

「・・・敵だ!」

目を細めて太陽を凝視したシャー た。 IJ の青い瞳には、 はっきりと映

「何だって!?」シンヤ

「 ネウロイ!」シャーリー

俊敏なシャ リーとシンヤは、 走り出していた。

芳佳

「シャーリーさん!シンヤさん!」

芳佳とリーネは、 りかけたところで滑りコケた。 直ぐにその後を追おうとするが、 芳佳は立ち上が

「うえう~」リーネ

水泳は、全身運動。 まだ筋肉が回復していない。

基地にサイレンが鳴り響いたのは、 を覚えた、 その直後だった。 芳佳達がひ弱な自分に自己嫌悪

美緒

が敵は、 一機!レー ダー 網を掻く潜って侵入した模様!」

警報を耳にし、 ミーナに伝えた。 岩場に設置された電話で本部と連絡を取った美緒は、

ミーナ

「もう!また予定より二日早いわ!」

厳しい表情になるミーナ。

美緒

「誰が行く!?」

ミーナ

「すでにシャー リーさんと相羽さんが動いているわ。

える。 美緒の問いに、 砂浜を走るウィッチ達の姿を見ながらミーナは、

他のウィッチ達も基地に向かう中、 IJ l , 芳佳、 リーネそしてシンヤの四人が一歩先んじていた。 最初にネウロイに気がついたシ

芳 佳

「走るのも速い~!」

ハンガーの端にたどり着いた所で、 く引き離しているシャー リーとシンヤの背中を見て嘆息する。 芳佳は、 すでに自分たちを大き

ビーチボールの様なバストを弾ませながらの疾駆にも関わらず、 ンヤと同じ位速い。 シ

体形の有効性という、 もっとも、 こうした疑問が後に、超音速状態におけるコー 流体力学上の大発見に至るのだが。 クボトル

芳佳の横では、 芳佳と同じようにリーネもへばっている。

シャー リー

「イェーガー機・・・・出る!」

ゴーグルをかけるとシャーリーは、ストライカーを起動させる。

シンヤ

「テックセッタアアアアア!」

シンヤもハンガー に置いていたテッククリスタルを翳すとテッカマ ンエビルに変身する。

エビル

『テッカマンエビル!』

シャーリーが芳佳の頭上ギリギリの位置でかすめる様に離陸しエビ ルもシャー リーの後に続き離陸した。

リーネ

「 芳佳ちゃん!私達も!

「うん!」

二人は、 自分たちのストライカーユニットへと急いだ。

ミーナ

「シャーリーさん、聞こえる?」

続いて飛び立った芳佳とリーネが、ようやくシャーリーとエビルの

後ろ姿を捉えた頃。

ンカムを通じてミー ナがシャーリー にコンタクトを取ってきた。 ハンガーに無線機と地図を木箱に並べた簡易指揮所が設けられ、 1

シャーリー

「中佐?」

ミーナ

[敵は一機、超高速型よ。

ミーナは、現在分かっている情報を伝える。

美緒

[すでに内陸に入られている。

シャーリー

「敵の針路は!?」

ミーナ

[方角は・・・・]

美緒

[ここから西北西。]

美緒はネウロイの進路方向に沿って、 真っ直ぐに地図上に線を引く。

ミナ

[目標は・ このまま進むと・

美緒

[ロンドンだ!直ちに、単機先行せよ!]

美緒がマイクを自分に向け、 即座に指示を出す。

美緒

[シャーリー お前のスピードを見せてやれ!相羽!シャ の

フォローを!]

シャーリー

「了解!」

『解った!』

シャーリーとエビルは、一気に加速した。

ドンッ!

芳佳/リーネ

「あわわ!」

す。 は 必死になってシャーリーとエビルについて行っていた芳佳とリーネ シャーリーとエビルの急加速により生じた風圧でバランスを崩

は、遥か前方である。 ようやく体勢を立て直した頃には、すでにシャーリーとエビルの姿

芳 佳

「あ!」

「もうあんなところに!」リーネ

芳 佳

「リーネちゃん、急ごう!」

二人は何とか振り切られまいと、速度の上げた。

「頼むわよ、シャーリーさん、相羽さん。ミーナ

ᆫ

と、そこに。

ルッキーニ

「ああ~ん!シャーリー、行っちゃった~。.

ルッキーニが今頃になってハンガーに到着した。

ルッキーニ

・・・・まさか、あのままなのかな?」

不穏且つ不安そうな、ルッキー ニのつぶやき。

美緒/ミーナ

י ! ?

これを聞き逃す美緒とミーナではない。

美緒

「何が、あのままなんだ?」

腰に手を当てた美緒が問いただす。

ルッキーニ

「えっとね、 昨夜あたし、 シャー リー のストライカー をね・ あ

ひ!?」

指をくわえながら白状しかけたルッキー 二だが、美緒とミーナのた

だならぬ雰囲気を背中に感じ、 身をすくませる。

ミーナ

「続けなさ~い・ ・フランチェスカ・ルッキーニ少尉・

静かだが有無を言わせぬ調子声。

ルッキーニ 「ひい~っ!」

少尉は、 後に芳佳達に語ったところによると、フランチェスカ・ルッキーニ あの時のミーナをシンヤと同じ位怖いと思った事は無かっ

たという。

シャー (くっ!どうして・ いつもと違う。)

シャー リーは、 奇妙な違和感と高揚感を覚えた。

調子が悪いのではない。

むしろ、良すぎるといってよい。

昨日とは、違い別の機体。

白い雲を真っ直ぐに引き、 排気ダクトが炎を吐く。

胸も心なしか、いつもゆり揺れが大きい様だ。

美緒

[・・・大尉・・・せよ・・・・

緊急事態を告げるインカムからの美緒の声は、 に虚しく掻き消されていた。 魔導エンジンの轟音

美緒

「 繰り返す!シャーリー 大尉、 直ちに帰投せよ!繰り返す!」

所の美緒は、 頭に大きなたんこぶを作ったルッキーニを端に座らせて、 マイクに向かって怒鳴る。 簡易指揮

美緒

「相羽!」

『美緒!?どうしたんだ?』エビル

美緒

[実は!]

美緒は、 説明をエビルにした。

エビル

『何だって!

[直ちにシャー

大尉を止める!]

美緒

エビル

『解った!』

エビルは、瞬時にシャーリーを追う。

ミーナ

「相羽さん、早くも追いついて・

祈る様につぶやくミーナ。

だが、ミーナの期待に反して。

エビル

『何!?クラッシュイントゥルード並のスピードだ!』

エビルも必死で追うがどんどんシャーリーに引き離されていた。

ー た。

シャー リー

(なんだ?全然加速が止まらない。今日のエンジンの調子が良いの

か?この感じ似ている。)

た。 シャ 自身は、 魔導エンジンのスピードに陶酔を覚えつつあっ

シャーリー

(似ている!あの時と!)

美緒

[直ちに帰投せよ・・・・大尉・・・!]

インカムからの美緒の声も、今のシャーリー の耳に入らない。

シャー リー

「いっけええええっ!」

魔導エンジンの出力が更に上昇。

シャーリーは、音の壁を切り裂いた。

ドーン!

『 エ ビ ?』

芳 佳

「あうっ!」

リーネ

「きゃああああっ!」

る 撃波に驚く位ですんでいるが芳佳とリーネが吹き飛ばされそうにな シャー の後ろを追うエビルは、 突然の音速突破時に発生する衝

シャー リー

あ、 あたし、 マッハを超えたの?これが・ 超音速の

世界?」

シャー を感じた。 は 今まで身体にかかっていた風圧がふっと軽くなるの

シャーリー

「凄い!凄いぞ!やった!あたし、 やったんだ!」

美緒

[聞こえるか、大尉!返事しろ!]

美緒の必死の呼びかけが、 やっとシャー IJ Ĭ の耳にとどいた。

シャーリー

少佐、 やりました!あたし、 音速を超えたんです!」

歓喜に上げずる声で報告するシャーリー。

しかし!

美緒

[止まれええええ!敵に突っ込むぞ!]

シャーリー

「・・・・え?」

美緒の警告が、 一気にシャー リーを現実に引き戻した。

シャー リー

「ええ!!?」

強張るシャーリーの顔。

超高速で同じ方向に飛んでるはずのネウロイが、 向かって突っ込んできているように眼前に迫りつつあったのだ。 まるで、 こっちに

シャー リー

「ええええ~っ!」

シールドを張ろうとして逆噴射をかけるがもう遅し。

かって超高速で行く。 エビルは、装甲を変形させて体をスリム化させるとシャー リーに向

エビル

『 クラッ シュ イントルゥゥゥゥゥゥドオオオオオオオオツ ツ

.

エビルは、 ロイを破壊する。 シャ を抱えると超高速で突進しその衝撃波でネウ

リーネ

「敵撃墜です。

インカムを使い報告するリーネ。

ミーナ

[シャーリーさんは?]

ミーナは、 緊張した声で、 芳佳とリーネの二人に聞き返す。

芳 佳

「ええと?」

芳佳は、 シャ リーとエビルの姿を求めて、 周囲を見渡した。

芳佳

ぁ 大丈夫です!無事です、 シャ IJ さんは無事です。

上昇してゆくシャ リーを抱えたエビルを、 芳佳の目は捉えた。

二人は、安堵し、エビルに近づいてゆく。

目を閉じ、満足げな表情のシャーリー

がシャー リー えたと同時に使い魔のウサ耳と尻尾も消え、 するとシャー リーのストライカーユニットのプロペラが、 の脚を離れて、 波間へと落下し始める。 ストライカー ユニット ふっと消

エビル 『えつ?』

全裸。 エビルは、 シャ を見ると首にかけたゴーグルを除けば、 ほぼ

そして、 エビルの手の中には、 豊満な胸が生で・

エビル

『ブヴゥ

落下するが芳佳とリーネが二人をキャッチした。 エビルは、 バイザー から鼻血が大量に噴射すると変身が解けて海に

美緒

[どうした、 何があった!?]

さっぱり事態が呑み込めない美緒は、 マイクに向かって怒鳴った。

リーネ

「シャ さんを確保しました!でも!相羽さんが!相羽さんが

美緒

相羽がどうしたんだ!?まさか負傷したのか!?]

シンヤ

た・ 助けて・ 胸の 地獄がブヴゥ

リーネ

きゃ~!相羽さん!大丈夫ですか!?」

芳 佳

「しっかりしてください!」

今までに無い位鼻血を大量に噴射するシンヤを見て悲鳴を上げるリ ネと芳佳。

美 緒

[おい!!状況を的確に説明しろ!]

美緒かがなり立てる傍らで、 察しの良いミーナは、 頬を赤く染める。

芳佳/リーネ

「説明出来ませ~ん!」

一番星が輝く夕暮れの空を飛びながら、 花を恥じらう乙女であるリ

- ネと芳佳はそう返すしかない。

シャーリー

「・・・・腹減った~」

芳佳とリーネに運ばれるシャー 幸福そうな笑みを浮かべていた。 は 超音速の夢に抱かれながら、

シンヤ

ています。) (タカヤ兄さん・ ・僕は、今でも逞しく生き

鼻血を出しながら逞しく生きている不幸なシンヤだった。

To be CONTINUED

第六話:はやい・おっきい・やわらかい (後書き)

エイラ

ンナサーニャ ヤコンナサーニャ ガ今コソサーニャニヨル・・・ 「聞コエルカ?サーニャノ美声ガ。来週八サーニャガ活躍スル。ア

サーニャ

「次回空の騎士テッカマンエビル第七話 いっしょだよ」

シンヤ

「エイラもう次回予告終わったよ・

第七話:いっしょだよ

シンヤ

「そろそろ芳佳達がブリタニアの街から基地に帰って来る時間か・・

シンヤは、芳佳達がブリタニアから帰って来るので夕飯の準備を終

えて廊下を歩くと・・

サーニャ

「相羽さん・

サーニャと出会う。

シンヤ

「サーニャ?こんな時間から会うのは、 初めてだったね。

サーニャ

夜間警備の時間ですから。

シンヤ

「そう言えば、 サーニャって夜間警備が担当だったよね?大変だね。

サーニャは、 首を横に振る。

サーニャ

いれえ。 人々を守る為です。

シンヤは、 サーニャの頭を優しく撫でる。

シンヤ

「偉いねサーニャは」

シンヤは、笑顔で言う。

「 / / / / (相羽さん・サーニャ ・何だかお父様に似てる)」

シンヤ

「じゃあ、僕も一緒に行くよ。

サーニャ

「けど・

シンヤ

「大丈夫だよ。迷惑をかけないから。

サーニャとシンヤは、ハンガーに向かうと整備兵の一人が来た。

整備兵

「リトヴャク中尉殿!ストライカーの準備が整いました。

シンヤ

「やぁルイス。

シンヤは、 整備兵を名前で呼んだ。

ルイス

「よう!シンヤ。」

た。 ルイスは、 シンヤに挨拶をするとシンヤがスープが入った鍋を渡し

ルイス

「何時もワリィな。」

シンヤ

「いいや、お互い様だろ?」

シンヤは、 いる整備兵達を気遣って夜食や朝食を差し入れていた。 何時も朝早くから夜遅くまでストライカー の作業をして

シンヤ

「それじゃあ、僕は帰るよ。頑張って。

タルを翳す。 シンヤは、 帰っ たフリをしてハンガー の外に向かうとテッククリス

シンヤ

「テックセッタアアアアア?」

シンヤは、テッカマンエビルに変身を終えた。

エビル

『テッカマンエビル!』

エビルは、 サーニャが飛んだ後エビルも続いて飛ぶ。

そして、 その夜を行く、 JU52輸送機の内部では

美緒

「むう・・・・」

美緒は、 苦虫を噛み潰したような顔で腕組をしていた。

ミーナ

「不機嫌さが出ているわよ坂本少佐」

正面に座っていたミーナは顔を上げ、 優しい笑顔で窘める。

美緒

れたんだ。 「ざわざわ呼び出されて何かと思えば、 顔にも出るさ」 予算の削減たなんて聞かさ

ミーナ

上げれてはね」 「彼らも焦っているのよ。 何時も私たちや相羽さんばかりに戦果を

美緒

「連中が見ているのは、 自分たちの足元だけだ」

ミーナ

マンの存在を私達だけに教えたのはその為かもね」 の人たち、 戦争屋なんてあんなものよ。 今頃は人間同士で戦い合っているし、 もしネウロイが現れなかったら、 相羽さんもテッカ あ

美緒

「さながら世界大戦だな。相羽が私たちに教えた理由が納得出来る」

窓の外を眺めていた芳佳を振り返る。 面白い冗談だと言うような笑顔になった美緒は、 隣で子供のように

美緒

やろうと思ったのに」 「悪かったな、 宮藤。 せっかくだから、 ブリタニアの街でも見せて

芳 佳

あって・ 「ハえ・ 0 [ラン、 私は、 その・ ラララ~、 ルゥラララ~ラ~] 軍にもいろんな人がいるんだな

突如インカムから流れてくる歌声に芳佳達は、 気付く。

芳佳

「あの、何か聞こえませんか?」

美緒

ん?ああ、 これはサーニャの歌だ。 基地に近づいたな」

ミーナ

私たちを迎えに来てくれたのよ」

芳 佳

「ありがとう」

ンカムに呼びかけながら手を振った。 JU52に平行して飛ぶサーニャとエビルに気がついた芳佳は、 1

エビルは、手を振る芳佳に気付き振り返した。

サーニャ (あノノノ)

の雲海に姿を隠す。 一瞬、チラリと芳佳を見たサーニャは、頬を染めてJU52の下方

芳 佳

「サーニャちゃんって何か照れ屋さんですよね?」

ミーナ

「ふふ、とてもいい子よ。歌も上手でしょ?」

と、ミーナが微笑んだその時。

ミーナ

「あら?」

『 エ ! ビ ? ル

サーニャの歌が止んだ。

美緒

「どうしたサーニャ?」

美緒が尋ねる。

サーニャ

[誰か、こっちを見ています。

索敵魔法を持つ魔導針の反応を伝える、 ささやく様なサーニャの声。

美緒

「報告は、明瞭に。あと大きな声でな。

美緒は、諭す。

サーニャ

[すみません。 シリウスの方角とアルタイルの方角に、 所属不明の

飛行体、接近しています。]

今度は幾分、はっきりと答える。

ミーナ

「ネウロイかしら?」

サーニャ

はい、 間違いないと思いますがアルタイルの方角だけは、 未知の

電波が出て未だにわからない飛行体です。

美緒

「私には、見えないが?」

美緒は眼帯を上げ、魔眼でシリウスとアルタイルの方を見た。

サーニャ

[雲の中です。目標を肉眼で確認出来ません。

美緒

・そう言う事か。

芳 佳

「ど、どうすればいいんですか?」

美緒

「どうしようも無いな。

慌てる芳佳に、美緒はあっさりと告げた。

芳佳

「そんな~」

ミーナ

「悔しいけど、ストライカーがないから、 仕方ないわ。

ミーナもそう言うと、ハッと美緒を見る。

あ。まさか、 それを狙って?」

美緒

「ネウロイはそんな回りくどい事などしないさ。

少なくとも、今までにそんな前例はない。

いのだ。 相手の隙を突く様な作戦行動は、 美緒の描くネウロイ像と一致しな

サーニャ

[シリウスの方角は、 依然、高速で近付いています。 接触まで約3

ミーナ

は 「サーニャさん。 サーニャさんのサブをお願いするわ。 援護が来るまで時間を稼げればいいわ。 出来るだけ交戦は、 相羽さん 避け

ナは雲の中から浮上して来たサーニャとエビルを見た。

サーニャ

「はい

『解ったよ。エビル

サーニャは、手馴れた様子で空飛ぶ鉄槌、 2輸送機から距離を取る。 フティを解除しエビルも自らのテックランサーを構えると、 フリーガー ハマー のセー J U 5

サーニャ

[目標を離します。]

ミーナ

「二人とも無理しないでね。

美緒

「よく見ておけよ。」

美緒は、芳佳に声をかける。

芳佳は、 窓に顔を張り付けるようにして、 サーニャとエビルの姿を

追う。

芳佳

, は はい!サーニャちゃんには、ネウロイが何処にいるのか、 わ

かるんですか?」

美緒

「ああ。 あい つには、 地平線の向こう側にあるものだって、見えて

るはずだ。_

芳佳

「へえ~。_

ミーナ

「それで何時も、 夜間の警備任務についてもらっているのよ。

ミーナが説明している間に、 サーニャは目を閉じ、 魔導針でネウロ

イの位置を探る。

美緒

「お前の治癒魔法みたいなもんさ。

美緒が補足する。

美緒

「さっき、 歌を聞いただろ?あれもその魔法の一つだ。

ミーナ

「歌声で、この輸送機を誘導したのよ。

芳佳/エビル

(歌声で・・・?)

月明かりを背に浮かび上がるサーニャ レライの様に芳佳とエビルの瞳には の姿は、 さながら現代のロー

映っていた。

サーニャ

「・・・あ」

赤く輝くネウロイを、サーニャは捉えた。

機敏な動きでフリー ガーハマーをネウロイに向け、 トリガーを引く。

まず二発。

軌跡を残して飛んだロケット弾の光球が、 雲に大穴を開ける。

更にもう一発。

サーニャ

「反撃して・・・・こない?」

ない。 サーニャは、 更にドリガーを引くがネウロイの方からは何の反応も

ミーナ

「さすがね。 見えない敵相手によくやっているわ。

ロケット弾の爆発で輝く雲を見ながら、ミーナは言う。

芳佳

「私には、ネウロイなんて全然・・・

目を凝らす芳佳だが、見えるのはフリー ガー ハマー の光球だけだ。

美緒

「サーニャの言う事に間違いない。」

残弾数から、 美緒はこれ以上の戦闘は無理だと判断を下す。

美緒

「サーニャ、もういい、戻ってくれ。

サーニャ

[でも、まだ・・・]

肩で息をするサーニャ。

「ありがとう。一人でよく守ってくれたわ。」ミーナ

サーニャ

エビル

『戻ろうサーニャ。』

ミーナの指示に、大人しく従うサーニャだった。

エビル

!!!

その時!アルタイルの方角の飛行体がサーニャ に向かって殺気を放 っている事にエビルが気付く。

ガキィーン!!

サーニャ ルがテックランサーでガードした。 の顔に近い方向から鋭利状の物が襲って来ようとしてエビ

ゼロ

『ふん!あの下等生物も役に立つ事もあるな。』

エビル

『ゼロォ!!』

エビルは、 ゼロのテックネイルを己のテックランサーで振り払った。

エビル

『サーニャ!早く美緒達の元に行っているんだ!』

サーニャ

「けど!『早くするんだ!』はい!」

サーニャは、JU52輸送機に向かう。

ゼロ

『フッ・・犠牲を避けたか・・・』

エビル

『お前の相手は、この僕だ!彼女達には、 関係無い!

ゼロ

『自分の事より相手を優先するとは・ 相変わらずのお人

好しだなシンヤァ!!』

ゼロは、 テックネイルをエビルに向けて攻める。

エビル

『クッ!』

エビルは、 テックランサーでゼロの攻撃を全てガードする。

『ダアッ!』

ガキィー ン!-

『しまった!』 エビル

われて雲の真下に落ちてしまう。 エビルのテックランサーは、 ゼロのテックネイルの連続コンボで払

ゼロ

『死ね!エビルゥゥゥ!!』

ゼロは、 テックネイルをエビルに向けて攻める。

エビル

『トリヤッ!』

め返す。 エビルは、 左肩のラムショルダー を抜いてゼロのテックネイルを攻

ンサーを回収する。 エビルは、 攻めている間にテックワイヤーで真下に落ちたテックラ

エビル

『セイヤアアアアアアアッツ!!』

形させてゼロに投げる。 ラムショルダーを収納するとエビルは、 テックランサーを十時に変

ゼロ

『八アツ!』

しかし、 それでもゼロは、 執念深くエビルを攻撃する。

芳 佳

「シンヤさぁぁぁんんんん!!!」

芳佳を見る。 輸送機からエビルを呼ぶ芳佳の声を聞いたゼロが輸送機の窓に居る

ゼ ロ

!!

ゼロは、 突如芳佳を見た瞬間に何かに動揺した。

ゼロ

(ミ・・・ミコキ・・?)

ゼロは、直ぐに立ち去った。

雲の下は横殴りの激しい雨だった。

ハルトマン

「ひどい雨だな。何も見えない・・・・ん

が何かを確認すると一目散に飛び去るゼロの姿を発見した。 ネウロイの来襲の報を受けて出撃した4機の内の一機、 ハルトマン

「サーニャ!」 エイラ

単機で速度を上げて光を目指したのはエイラである。

他のウィッチは、 ニャに関する事になると、 何を考えているのか分からないエイラだが、 いつものとぼけた態度は消える。

ペリーヌ

「ちょっとエイラさん!勝手なこと!」

「・・・いや、いいだろう。トゥルーデ

憤慨するペリーヌをトゥルーデは制した。

ないのか?」 トゥルーデ 「それじゃ今回のネウロイを見たのは、 サーニャ以外、

誰も見てい

だ格好でミーティング・ルームに姿を見せていた。 冷えた身体をシャワー で温めてきたトゥルーデは、 制服の上を脱い

椅子でキャミソー には美緒、ミーナ、ブラとスパッツ姿のハルトマンが座っていた。 ル姿のルッキーニが丸くなって眠りこけ、 ソファ

もう一つのソファー くつろいでいたリーネと芳佳。 には、 トゥ ルー デと同じ様に制服の上を脱いで

その背後のピアノには、 シャツとネクタイ姿のサーニャ。

傍らには、 水色のスウェットを羽織ったエイラ。

真紅のジャー している。 しいネグリジェをまとったペリー ヌが美緒のそばの椅子に腰を下ろ ジ姿のシャ IJ は ルッキーニのそばに立ち、 悩ま

当然この小説の主人公:相羽シンヤは、 くて床に倒れて鼻血を出していた。 彼女達の素肌を隠す所が無

美緒

「ずっと雲に隠れて、 出て来なかったからな。

ハルトマン

な?それ、 けど、 何も反撃して来なかったっていうけど、 本当にネウロイだっ たのかあ そんな事あるのか

シンヤ

エーリカ!」

想だと思う。 ソファー で疑念心を口にするハルトマンにシンヤがサーニャ を可哀

サーニャ

• • • • • •

サーニャは、済まなそうな顔になり、 何も言えない。

リーネ

「恥ずかしがり屋のネウロイ!」

場を和ませようと、 慣れない冗談を飛ばすリーネ。

だが、みんなの反応は、鈍い。

リーネ

「何て事ないですよね。 ・ごめんなさい。

リーネはいつもよりも、更に身を縮ませる。

ペリーヌ

「だとしたら。ちょうど似たもの同士気でも合ったんじゃなくて?」

シンヤ

「ペリーヌも!」

当てこすりに、さらに肩を落とすサーニャ。

その横でムッとしたエイラがペリーヌに向かってべ~っと舌を出す。

ミーナ

先、どんなネウロイが現れても、不思議ではないわ。 「ネウロイとは何か?それがまだ明確に分かっていない以上、この

トルゥー デ

「仕損じたネウロイが、連続して出現する確率はきわめて高い。

ミーナ

思うの。サーニャさん。 「そうね。そこでしばらく、 夜間戦闘を想定したシフトを敷こうと

サーニャ

はい。

ミーナ

「宮藤さん。

「あ、はい?」

芳佳

ミーナ

「相羽さん。

シンヤ

「うん?」

ミーナは、三人を指名した。

ミーナ

「当分の間、 あなたたちを夜間専従班に任命します。

芳佳

「え?私とシンヤさんもですか?」

何で自分達が、と戸惑う芳佳。

美緒

「今回の戦闘の経験者だからな。

シンヤ

(あれは、僕とサーニャだけしか戦闘に参加していないっと思うけ

ど・・・?)

するとエイラがいきなり、 かかり、手を挙げた。 ソファーの後ろから芳佳の頭の上にのし

エイラ

「ハイ、ハイ、ハイ、ハイ!私モヤル!」

シンヤもいるが芳佳にサーニャのサポートさせるのが不安だっ ナだが、 案の定、 そこにエイラが乗っかってきた訳である。

ミーナ

いいわ。 じゃあ、 エイラさんも含めた四人ね。

笑みをこぼれそうになるのを我慢しながら、 ミーナは言った。

ミーナ

それ以外のメンバーは、 昼夜兼任のローテーションとします。

サーニャ

すいません。 私がネウロイを取り逃がしたから・

•

シンヤノ芳佳

「え?」

振り返ると、そこにはしょんぼりとしたサーニャの姿が。

芳佳

「ううん。気にしないで。

シンヤ

「あの時は、ゼロも来ていたんだ仕方ないよ。

二人は、 サーニャを慰めるがサーニャの顔が晴れる事は無かった。

翌 朝

台所に大量のブルーベリーが置いてある。

ペリーヌ

あら?ブルーベリー。 でもどうしてこんなに?」

シンヤ

・リーネの実家から送られてきたんだよ。

リーネ

「ブルーベリーは、目に良いんですよ。」

に置いてウィッチ達に配る。 シンヤとリー ネは、 ブルー IJ を使った大量のタルトをテーブル

「いただき~ .

ハルトマンは、タルトを沢山食べている。

トルゥーデ

う話を聞いた事がある。 「確かにブリタニアでは、 夜間飛行のパイロットがよく食べると言

トルゥーデが説明する。

「 芳佳、シャー リー。 ベー してみて?」ルッキー ニ

ルッキー 二/芳佳/シャ あっはっはっはっはっはっ!!」 IJ

芳佳達は、 自分達の舌が青く変色しているのを見て笑う。

ペリーヌ

「まったくありがちな事を・・」

ペリーヌは、口を手で隠しながら呆れる。

エイラ

「オ前ハ、ドウナンダ?」

エイラがペリーヌの口を無理やり開けると歯が青くなっている。

美緒

「ん?」

食堂に来た美緒がペリーヌを見る。

美緒

「何事も程々にな。

美緒は、テーブルに座る。

ペリーヌ

「なんて事をするんですの!エイラさん!」

エイラ

「 何テ事無イッテ・・・」

悪戯が成功して面白がるエイラ。

サーニャ

「美味しい・・・・

朝食が終わると美緒は、 シンヤ、 芳 佳、 エイラ、 サーニャを集める。

美緒

「さて・ ・朝食も終わった所でお前達は、 夜に備えて寝ろ。

シンヤノ芳佳

「え?」

芳佳達は、 真っ暗な感じだった。 サーニャの部屋でもある臨時夜間専従員詰め所に入ると

芳佳

「起きたばかりなのに・ 何も暗くしなくたって良いのに。

エイラ

「暗イノニ慣レロッテ事ダロ?」

四人とも寝巻きで部屋で寝ていた。

芳佳

「ごめんね。 サーニャちゃんの部屋なのにこんなにしちゃって。

サーニャ

. 別に何時もと変わらないけど?」

シンヤ

「そうなのか大変だね。

芳佳

「けどコレなんか御札みたい。

エイラ

「オフダ?」

シンヤ

「悪魔とか幽霊が入らない御呪いだね。

サーニャ

「私よく幽霊と間違われる。」

「へー。夜飛んでいると間違われそうだね。芳佳

サーニャ

いって。」 「ううん。飛んでなくても言われる。居るのか居ないのか分からな

「ペリーヌの言っている事は、気にしなくていいよ。シンヤ

エイラ

「シンヤノ言ウ通リダゾサーニャ。

エイラは、カードを捲っていた。

「暇ダッタラタロットデモヤロウ。

「タロット?」

エイラ

ットノ先ダケドナ。 「占イダヨ。私八、 未来予知ノ魔法ガ使エルンダ。マッホンノチョ

芳佳は、タロットを捲る。

エイラ

「ドレドレ?フ~ン・ ・良カッタナ今ー番会イタイ人二会エルッ

芳佳

「え?そうなの?」

シンヤ

(芳佳・・・)

しい表情になる事を予想していた。シンヤは、芳佳の会いたい人が父親だと分かっていたので芳佳が悲

芳佳

「でもそれは、無理だよ。

エイラ

「何デ?」

芳 佳

「だって私が会いたい人って・ ・お父さんだよ。

エイラ

「ソッカ・・・ソウ言ワレテモナ・・・

エイラは、寝っ転がった。

シンヤ

シンヤは、カ

気付く。 カレンダーを見ると8/18に赤で丸く書いてある事に

シンヤ

(この日って芳佳の誕生日だよな?)

ルッキー ニが4人を起こしに来ていた。「夕方だぞ~~~!起きろ~~~~!」

芳佳

「なんか暗いね。」

リーネ

「うん。 暗い環境に目を慣れさせる訓練なんだって。

シンヤ

「コレは?」

シンヤは、テーブルに置かれてお茶を指す。

ペリーヌ

「マリーゴールのハーブティーですわ。

ペリーヌの差し入れだった。

ペリーヌ

「これも目の働きに言いと言われますのよ。」

シンヤ

母様そのまた祖母様が伝えたものでしてよ。 「でもそれって民間療法じゃ・・ 「失敬な!コレは、 分かった!分かった 祖母様の祖

ルッキーニ

「芳佳、リーネ。もう一回ベーしてみて?」

だ佳/リーネ

舌の色は、変化なし。

ルッキーニ

「・・・・・・う~、つまんな~い!」

繭をヒクヒクさせたルッキーニは、ガッカリして騒ぎ出す。

せっかく、良かれと思ったハーブティーなのに、評判は最低。

エイラ

「どっちらけ~」

更にとどめの一言。

ペリーヌ

「ベ、別にウケを狙った訳じゃなくってよ!」

きっと振り返り、断固抗議するペリーヌ。

ー た。

サーニャ

「・・・・・まずい」

サーニャも当然、 マリーゴールドはお気に召せなかった様だった。

そしてその夜。

芳 佳

ふ・震えがとまんないよ。」

滑走路に立つ芳佳は、 誘導灯を見つめながら呟いた。

エイラ

「何デ?」

意外そうな顔を芳佳にむけるエイラ。

芳 佳

「夜の空がこんなに暗いなんて思わなかった。

エイラ

「夜間飛行初メテナノカ?」

サーニャ

「無理なら止める?」

魔導針を発動させたサーニャも芳佳を気遣う。

エビル

『本当に大丈夫かい?』

既に変身しているエビルにも気遣われている。

芳 佳

「て・・・手繋いでも良い?」

芳佳は、震える右手を顔の前に持って来た。

芳佳

「サーニャちゃんが手繋いでくれたら、きっと大丈夫だから。

サーニャ

「・・・あ¥¥¥¥¥」

手を握る。 サーニャは、 魔導針とほっぺたをポッと赤く染めて、 そっと芳佳の

エイラ

(コ、コイツ!素デ口説イテンノカアアアアアアアッ

た。 ムッとしたエイラは、 **芳佳の左側に回り込んで、強引に左手を取っ**

エイラ

クゾ!」 「(サーニャ ト手ヲ繋ゴウナンテ10年早イ!) ムウ!サッサト行

エビルもサーニャの右側に来て手を優しく握った。

サーニャ

「あ・・・//////

更にサーニャの頬が赤くなる。

エイラ

(サーニャト手ヲ繋ゴウナンテ1千年早イ!)

エイラは、エビルを睨む。

足元から魔方陣を生み出すエイラとサーニャ。

芳 佳

「えつ?ちょつ !心の準備が!うわああああ

四人は、 滑走し、 雲が厚く乗れ込めた空に飛び上がった。

芳佳

「手離しちゃダメだよ!絶対、離さないでね!」

エビル

『うんうん。解った。解ったから安心して。』

サーニャ

「もう少し我慢して雲の上に出るから。

励ますサーニャ。

エビル

『凄いね。』

雲の上に出ると、そこには、満天の星だった。

芳佳

「私絶対こんな所まで来られなかったよ。」

礼を言う。 ようやく手を離す事ができた芳佳は、 ローリングしながら三人にお

「ありがとう、 サーニャちゃん、 エイラさん、 シンヤさん。

素直に喜びを表す芳佳に苦笑するエイラと微笑むエビル。

サーニャ

「いいえ。任務だから。

サーニャも目を合わせないまま答えるが、 まんざらでもない表情だ。

芳 佳

「 あ。 「

だった。 サーニャ の感情の起伏が、 だんだん読み取れる様になってきた芳佳

またまた翌朝

ペリーヌ

「これは?」

台所に大きな一斗缶をペリーヌが発見した。

芳 佳

「肝油です。ナツメウナギの。」

シンヤ

「ビタミンたっぷりで目に良いんだよ。

シンヤが説明しているとペリーヌは、 指に肝油を付けて味見をしよ

うとするが

「ペリーヌ!ダメだよ!」シンヤ

シンヤがペリーヌの腕を止める。

「何ですの!?

ペリーヌ

シンヤ

「もしも味見したらこの4人の様になるよ!」

蒼白を超えた灰色になっている。

シンヤが指すとエイラ、

サーニャ、

トゥルーデ、

ハルトマンの顔が

ペリーヌ

ペリーヌは、この光景を見て肝油の味を想像したくなかった。

シンヤ

「だから肝油を使ったチャーハンをしたから食べていて。

灰色になった4人と他のウィッチにチャーハンを配るシンヤ。

ミーナ

「相羽さん!もう一杯!」

ただ一人、 上機嫌でお代わりを要求するミーナ。

「はいはい。これが最後だからね。シンヤ

とミーナに肝油を渡すシンヤ。

(シンヤ(相羽)(さん)ありがとう)ウィッチ《ミーナ以外》

ウィッチ達は、シンヤに感謝をした。

芳 佳

「ねぇエイラさんとサーニャちゃんの故郷って何処?」

蒸し暑い部屋で芳佳が二人に聞く。

エイラ

「私スオムス。」

サーニャ

「・・・・オラーシャ」

「えっと・・・そこ何処だっけ?」

シンヤ

よ・・・芳佳・ 「暑い・・・ ・スオムスは、ヨーロッパの北でオラーシャが東だ

大量に汗を流すシンヤが答えた。

芳 佳

「そっか・・・ヨーロッパって確か!」

シンヤ

「殆どがネウロイに占領されたんだったね。」

サーニャ

「はい、私の居た町もずっと前に陥落したの。

シンヤ

「じゃあ家族は?」

サーニャ

「ウラルの山々を超えたもっと、ずっと向こうまで。

芳佳

「そっか、良かった。」

エイラ

「何ガ良インダヨ。話聞イテイナイノカ?」

よ ? 「だって今は離れ離れでも、 何時かまたみんなと会えるって事でし

エイラ

何十倍モアルンダ。 「アノナ、オラーシャハ広インダゾ。 人探シタッテ簡単ジャアナイゾ。 ウラルノ向コウタッテ扶桑ノ

芳佳

「うん。」

エイラ

「ダイタイ、 ソノ間ニハ、 ネウロイノ巣ダッテアルンダ。

シンヤ

「そっか・・けど羨ましいな・・・

エイラ

「相羽オ前マデ。」

シンヤ

「だって僕家族いないよ。」

芳佳 / サーニャ / エイラ

!!?

三人は、 シンヤのいきなりの自分の事情を聞いて驚きを隠せない。

エイラ

「チョット待テ!ドウ言ウ事ダヨ?」

シンヤ

早く家族に会いたいって思って居るんだろ?」 さんは、僕が小さい頃に火事で亡くなっちゃっているし。父さんや 他の兄弟も事故で死んでいて身寄りが居ないんだって。サーニャは、 「だから言ったじゃない僕には、家族が死んじゃっているって。

シンヤは、 顔を上げて真っ直ぐサーニャを見る。

「うん。」

ヌイグルミ抱きしめたサーニャが頷く。

シンヤ

そんな風に思えるのって素敵だと思うよ。 「そうやってどっちも諦めないでいれば、 きっと何時か会えるよ。

サーニャ

「////・・・あ」

そう微笑むシンヤに見つめられたサーニャの頬は、 ピンク色に染ま

「ふ~~~汗でベタベタ・・・・」

夕方になり、部屋から出て来た芳佳はこぼした。

エイラ

「ジャアサウナニデモ行クカ?」

エイラが提案した。

芳 佳

「サウナ?」

エイラ

「ホウ、宮藤ハサウナ、知ラナイノカ?フフン

エイラの瞳がキラリと怪しく光る。

シンヤ

「ぼ・・僕は「遠慮スルナヨ相羽。裸ノ付キ会イダッテ いや!

いいから!本当に!」

言っている間に縄で巻かれてエイラに連れてかれるシンヤだった。

~これじゃさっきと全然変わらないよ~

扶桑支給の水着を着た芳佳が言う。

ちなみに他の人達も前回の水着を着用していた。

エイラ

「スオムスジャア風呂ヨリサウナナンダゾ。」

シンヤ

「サーニャって肌白いね。」

そのうなじから肩、背中にかけての線。

まるでマイセンの磁器の様な透明感にシンヤは、 見蕩れてしまう。

サーニャ

「///あ」

その視線に気がつくサーニャ。

エイラ

「何処見テイルンダ、オ前?」

エイラが割り込んでシンヤを睨む。

シンヤ

「いつも黒い服を着ているから余計目立つね・

エイラ

「サーニャヲソンナ目デ見ンナアアアアアアア~~ッ!

エイラは、 絶叫するとシンヤの首根っこを握り締める。

シンヤ

「ちょ!エイラ・・ギ・ ・ギブ・ ・ギブ ボキッ! バタン

何かを折った音がするとシンヤは、倒れる。

エイラ

Г Т?

エイラは、唖然と驚く。

芳佳

「シーシンヤさ~~~~~んんんん!!」

サーニャ

「しっかりして下さい!!」

芳佳は、 ける。 直ぐに治療魔法を開始してサーニャもシンヤに声をかけ続

空の騎士テッカマンエビル:完結!

トゥルーデ

「嘘を書くな!天使!」

「ごめんなさいジョークですよ。天使

「全く!」

シンヤ

「あれ?此処何処だ?」

は川が見える。 シンヤは、目を覚ますと辺り一面が綺麗な花畑が広がっていて奥に

すると川の向こうから誰かが呼びかける。

シンヤ

「あ!あれは!」

っていた。 川の向こうには、 父:孝三に母、ミユキ、ケンゴ、フォンが手を振

シンヤ

フォン!ケンゴ兄さん!」 「あっはっはっはっはっはっはっ !父さん!母さん!ミユキ!

ろうとした。 シンヤは、まるで少女マンガで再会するシーンの様に笑顔で川を渡

『シンヤ坊!』ゴダード

突如後ろにゴダードが居た。

シンヤ 「ゴダード?」

ゴダード 『フン!!』

バコォォォォォォオンンンンンン!!

ゴダードは、シンヤの顔面に『この世戻し』と書かれたパンチを放

っ た。

「はっ!」シンヤ

気付くと芳佳達が心配そうに見つめていた。

芳 佳

「シンヤさん!」

サーニャ

「良かった・ ・・死んでいるんだと思いました・

エイラ

「大丈夫カヨ?」

声を掛けてきたのはエイラだ。

シンヤ

殴られて戻ってきたよ。 「うん、なんとかね。死んだ家族に会ってどこかの川でゴダードに

芳 佳

「どこ行ってたんですか・・・

芳佳は苦笑いを浮かべた。

エイラ

「オイ・ · 相羽 · ・ソノ・ ・悪カッタヨ。」

エイラは、頭を下げてシンヤに心から謝罪した。

シンヤ

「いいんだ。僕も言い方を悪く言ってしまったからね。

シンヤも自分に否がある事を認め謝る。

「コッチコッチ。エイラ

はまさに見えない拷問そのものだった。 シンヤを招き入れたが目隠しされ縄で縛られているシンヤにとって 全てを脱ぎ捨てた姿のエイラは、サウナに隣接する人工池を芳佳と

芳佳

「本当に大丈夫なの?」

芳佳は、 隠している。 エイラの後に続きながら、 ほとんど隠す必要性のない胸を

エイラ

「サウナノアトハ、水浴ビ二限ルンダ。.

芳佳

「確かに冷たくて気持ちいいけど・・・」

芳佳は、シンヤに意識してしまう。

シンヤ

ポタポタ・

「 芳 佳 からさ・ 頼むから意識しないで・ またあの世に行っちゃう

鼻血を流すシンヤが悲願する。

エイラ

「恥ズカシガルナヨ。 女同士ダロ?」

シンヤ

「いや僕男何だけど・・ ・エイラさん分かってます?」

ラン、ラララ~、ララ、ラララ~

声のした方に、シンヤを連れて忍び寄って行く二人。

大岩の上で背を反らす様に座り、足先だけを流れに浸すサーニャも

裸である。

シンヤ

「ダメだ・ もう・ ・ブゥウウウウウウウウウウ

シンヤは、 サーニャを意識しすぎて鼻血を噴出する。

サーニャ

シンヤの鼻血に気がついたのか、 サーニャは歌を止めた。

芳佳

「あ!あう、 ごめん。

サーニャ

何で謝るの?」

サーニャは、 不思議そうな顔をして立ち上がる。

芳 佳

「いや、邪魔しちゃったから。」

芳佳は、頭を掻いた。

シンヤ

「素敵な歌だね。

----- サーニャ

「これは・ 昔お父様が私の為に作ってくれた曲です。

シンヤ

「お父さんが?」

サーニャ

えていたら、 「小さい頃いつまでも雨の日が続いてて私が退屈して雨粒の数を数 お父様がそれを曲にしてくれたの。

エイラ

「サーニャハ、 オ父サンノ勧メデウィー ンデ音楽ヲ勉強シテイタン

芳佳

「素敵なお父さんだね。」

サーニャ

「宮藤さんのお父さんだって素敵よ。

「え?何で?」

エイラ

ロ?ソレダッテ羨マシイッテ事ダヨ。 「 才前ノストライカー ハ、宮藤博士ガオ前ノ為ニ作ッテクレタンダ

っと照れ臭い。 二人が芳佳の父の事を評価しているとしてくれた様で芳佳は、 ちょ

芳佳

「へへへ!せっかくならもっと可愛い贈り物の方が良かったかも。

エイラ

「贅沢ダナ~。高インダゾアレ。」

シンヤ

「あははははは!確かにそうだね。」

笑い出す。 シンヤにつられて、 クスリとする芳佳とサーニャ。 そしてエイラも

その夜。

芳佳

「ねえ聞いて」

夜間飛行訓練に飛び立った芳佳は、 とエイラに告白した。 星空の下を飛びながらサーニャ

「今日はね私の誕生日なの。」

サーニャ

····?

エイラ

「何デ黙ッテイタンダヨ!」

エビル 『二人とも芳佳の誕生日は、 お父さんの命日でもあるんだよ。

6

エビルが二人に理由を教える。

サーニャ

・宮藤さん相羽さん。耳を澄まして。

サーニャが珍しく目を逸らさずに芳佳とエビルを見る。

芳佳/エビル

「『え?』」

第にハッキリしてきた。 甲高い雑音に混じり。 人の声と音楽がかすかに聞こえ、 それが、 次

芳佳

・・・あれ何か聞こえてきたよ。

エイラ

「ラジオノ音。」

サーニャ

るようになるの。 「夜になると空が静まるから遠くの山や地平線からの電波も聞こえ

エビル

『凄いね~!そんな事も出来るんだね。 6

サーニャ

「はい、夜飛ぶ時はいつも聞いているの。

エイラ

「オイ!二人ダケノ秘密ジャア無カッタノカヨ。

サーニャ

「ごめんね。今夜だけは、特別。

「チェ!ショウガネ~ナ~。エイラ

エビル

『どうしたの?』

サーニャの顔を見るエビル。

サーニャ

あの・

エイラ

アノナー今日ハサーニャモ・・

エイラが説明しようとした瞬間。

サーニャ

サーニャの魔導針が反応を示した。

エイラ

「!?何ダ!?」

エイラや芳佳、エビルもインカムを介してサーニャが受信した音が

流れ込んでくる。

だがこれは、 紛れもなく。 普通の楽器の音とも、何かの声とも違う音。

芳佳

「歌だよ。

サーニャ 「どうして?」

急接近してくるネウロイの旋律は、 普段サーニャが歌っている歌だ

っ た。

サーニャ 「あれ?」

エイラ

「ドウシタンダヨ?」

サーニャの緊張していた顔が突如疑問の様な顔に変わる。

サーニャ

「歌声が止まった・・ ・ネウロイが倒されている・

サーニャもわけも分からずに戸惑う。

すると4人のいる雲から何かが現れる。

ゼロ

『退屈な時間も終わりだな。』

月に照らされた灰色の墜天使テッカマンゼロが現れた。

エビル

『ゼロオ!』

ゼ ロ

『さぁゲー

ムの開始だ。

ゼロは、テックネイルを出す。

エビル

『テァ!』 !

エビルもテックランサーを出してゼロに向かう。

キィーン!!

さる音が夜空に響く。 ゼロのテックネイルとエビルのテックランサーの激しく金属の合わ

ゼ ロ

『ふつ、 エビル。 貴様の諦めの悪さは認めてやるぞ。

ゼロは、 球が数体出現した。 片手をエビルに向けて翳すとゼロの周りに電気を帯びた黒

そしてエビルの周りを取り囲んだ。

芳 佳

「シンヤさん!」

エビル

『来るな!危ない!エイラ!芳佳達と非難して基地に報せるんだ!』

エイラ

「分カッタゾ!」

する。 エイラは、 エビルの指示に従い芳佳とサーニャを連れて基地に帰還

ゼロ

『行くぞ!』

ゼロが声を出すと黒球がエビルを襲い掛かる。

『くっ!』 エビル

エビルは、テックランサーで黒球を弾いた。

ドカアー ン!!

『ぐあああ!!』エビル

エビルの死角から別の黒球が数体当たる。

エビル

(ここで長引けば不利なだけだ・・・)

エビルは、雲の下まで急降下した。

『逃がすかぁ!』

ゼロもエビルの後を追う。

•

エイラ

「宮藤・・・・

サーニャ

「・・・・・・」

二人は、心配そうに芳佳を見ている。

· 芳 · 佳

「私!やっぱり戻ります!」

エイラ

?私達二八、 「何言ッテイルンダ!?相羽ダッテ基地二戻レッテ言ッテイタダロ アイツニ適ワナインダー」

芳佳

出来ないよ!」 「けど私達チームでしょ!?だったらシンヤさんを見捨てるなんて

「エイラ・ サーニャ

311

エイラ

「ソウダナ。私達ハ、チームダヨナ。相羽ハ、私達ノチームノー員

三人の決心は、決まりエビルの方へ戻った。

ゼロ 『はつ!』 エビル キィーン!キィーン!キィイイイイインンンンン! 『だぁ!』

光速のスピードでお互いの武器の音が響く。

エビル 『うつ!』

エビルが距離を取ろうとするとゼロが。

ゼロ

『逃がさん!』

た。 ゼロは、 黒球をさっきの倍以上の数を作るとエビルに向けて発射し

出口が赤く輝き、そこに強大なエネルギーを持つ光を収束していく。 エビルの左右胸部に埋め込まれているレンズ部分..... ボルテッカ射

だが通常のボルテッカと少し違うようだ。

『PSYボルテッカアアアアアアアアアアアアッツッエビル

た。 エビルは、 ゼロの攻撃を跳ね返そうとPSYボルテッカを発動させ

ゼロ

『くううう!

ゼロは、 攻撃が自分に跳ね返らないように必死で制御をしている。

エビルノゼロ

『うおおおおおおおおおおお・!!!

お互いの技が同時に来た。

エビルノゼロ

『うわあああああああああり!!』

二人は、 自分達の技で吹っ飛び己の鎧が削れた。

エビル

『ああ・・ぁぁぁ・・・

エビルは、 ゼロの技を直撃して未だに電気が残り動けなく倒れてい

た。

ゼロ

『はあつ!はあつ!』

ゼロは、 エビルに比べて思う以上にダメージが軽く歩み寄りテック

ネイルを構える。

ゼロ

『死ねえ!エビルゥゥゥゥ!!!』

ゼロがエビルに止めを刺そうとしたその瞬間!

芳佳

「やめてええええええええええ!!!!

ピタッ!

ゼロのテックネイルが止まり収める。

ゼロ

っ み ・ ・ミユキ?』

芳 佳

「えつ?」

ゼロは、一瞬戸惑います。

そして・

ゼロ

『ダメだぁぁぁぁぁぁッッ!俺は、ミユキを殺せないいいいいいい

ゼロは、 苦悩したながら立ち去る。

「 エ ナ・ラ ・ ・何ダッタンダヨ?」

サーニャ

「聞こえる・

サーニャは、呟いた。

エビル

『ピアノの音?』

インカムから流れる音にエビルが気付く。

サーニャ

「これは・・・お父様のピアノ。」

芳佳

「そうか!ラジオだ!この空の何処かから届いたんだ・ !奇跡だよ!」 ・凄いよ

エイラ

「イヤ。ソ~デモナイカモ。

エビル

『 え?』

エイラ

「 今日八、 サーニャノ誕生日ダッタンダ・ 正確二八、 昨日力

ナ?」

時計を見ると零時を回っていた。

芳 佳

「え・・・じゃあ、私と一緒・・・!?」

エイラ

ャナイ。 ダロ?世界ノドコカニコンナコトダッテ起コルンダ。 「サーニャ ノコトガ好キナ人ナラ、誕生日ヲ祝ウナンテ、 奇跡ナンカジ 当タリ前

エビル

『エイラって優しいね。』

エイラ

「ソンナンジャネエヨ、馬鹿。

サーニャ

「お父様・ ・お母様・ ・サーニャはここにいます。

サーニャは、 祈りを捧げるように、何処か遠くにいる両親に語りか

けた。

エビル

『さあ基地に戻ろう。 朝になったら誕生日パーティーだからね。

芳佳 / サーニャ

「え?」

エビル

『飛ぶ前にルイス達に頼んでパーティー の飾りを任せているんだ。

朝が楽しみだね。』

芳佳

「サーニャちゃんお誕生日おめでとう。」

サーニャ

あなたもでしょ?宮藤さん。 お誕生日おめでとう。

エイラ

「誕生日オメデトナ。

『おめでとう。』

「ありがとう。」

To be CONTINUED

第七話:いっしょだよ (後書き)

美緒

った相羽。しかし、時間と運命が無慈悲にも彼を襲う。 の騎士テッカマンエビル 第八話 「 休暇を取りバルクホルンと共に妹のクリスの居るブリタニアに行 刀 夜」 次回 空

オリジナルキャラクター

テッカマン名:テッカマンゼロ

人名:御影刀夜

アルゴス号の元乗組員

声:福山潤

モデル:コードギアスのルルーシュに似ている。

テッカマンタイプ:多目的汎用型

テッカマン:コードギアスのガウェインが灰色のバージョン 彼の人間関係についてお教えいたします。

ました。 ケンゴとは、 自分に勉強を教えてくれた優しい先生と思い慕ってい

タカヤとは、昔から悪い事をしていた悪友関係。

ックスを感じていました。 シンヤは、何時も優秀で誰よりも優しかった為心の奥にはコンプレ

ミユキとは、内心好意を持っていた様子。

ですのでシンヤがミユキを殺したと解ったらその愛が憎しみと狂気

に変わります。

例えで言えばガンダムのアムロとシャアの様な感じですね。

「バルクホルンさん、 時間ですよ。

トゥルーデ

「ああ今行く。」

トゥルー デは、身支度を整え部屋を後にする。

今日は、 の見舞いに行く為トゥルーデとシンヤが休暇届けを出していた。 ブリタニアの病院で意識不明のバルクホルンの妹のクリス

ミーナ シンヤ 「じゃあ行って来るよ。

わかったわ。 トゥルーデの事よろしくね。

トゥ ルーデの荷物と自分の荷物を持って車に積むシンヤ。

ハルトマン

「相羽、ほい!」

ハルトマンは、 シンヤに自動車のキーを渡した。

ハルトマン

「くれぐれもトルゥーデに運転させないでね。

シンヤ 「え?」

シンヤは、 ハルトマンの言っている意味がわからなかった。

ハルトマン

「おっかないんだよ・

答えた時のハルトマンの顔が青ざめていたのでシンヤは、 の詮索をするのを止めた。 それ以上

トゥルーデ

すまない。 待たせたな相羽。

シンヤ

「ううん。 今準備できた所だから大丈夫さ。

二人が車に乗って発進すると他のウィッチー ズたちが手を振って見

送っ た。

ブリタニアのとある裏路地

???

「これが501統合戦闘航空団の詳しい資料だ。

生が着る黒い学ランを着た若者に501統合戦闘航空団の資料を渡 裏路地では、サングラスをかけコートを羽織った中年の男と扶桑学

???若者

わざわざ呼んですまないな。

若者は、 中年の男に礼を一応言う。

???中年

我々ラダムに刃向かう者を調べるのも当たり前だからなゼロ。

中年の男は、 若者のことをゼロっとはっきりと呼んだ。

???若者

マンジェネラル。 「その名で呼ぶな。 今は、 御影刀夜だ。 マロニー いやテッカ

刀夜は、今が刀夜だとマロニーに言う。

マロニー

私の力を使えば501 の部隊など解散できるぞ?」

刀 夜

「付け上がるな!ジェネラル!」

刀夜は、マロニーに怒鳴る。

刀夜

肝に命じておけ。 いずれ痛い目にあうぞ。 「貴様は、 わかっていないかも知れないがエビルを甘く見ない事だ。 それに裏切り者の始末はこの俺の役割だ。

マロニー

「わ・・わかった。」

流石のマロニーも足を退けながら刀夜の指示に従う。

刀 夜

もう此処で長いをしていたら人目についてしまう。 ここで解散だ。

「それがいい。」マロニー

向かう。 二人は、 解散してマロニー が軍本部に戻り刀夜がブリタニアの町に

「此処がブリタニアの町かぁ。シンヤ

シンヤは、 自分の住んでいた世界のイギリスに似ている事に気付い

トルゥーデ

た。

相羽。 私は、 クリスの居る病院の見舞いの手続きで少し時間が掛

う。 かる。 暇なら少し町を見物して行くと良い。 1時間位で終わると思

舞いの手続きもそれなりに時間が掛かってしまう。 此処ブリタニアにもネウロイの襲撃で多くの人々が入院しており見

シンヤ

「わかったよ。じゃあ花も買ってくるから。」

トゥルーデ

「すまないな・ お前まで付いて来なくても良かったんだぞ?」

シンヤ

一緒に来たんだ。 「いいや。僕だって何かしら出来る事があると思ってトルゥーデと 我侭で着いて来れて感謝するのは、僕の方さ。

そしてシンヤは、町に向かう。

シンヤ

るな・ 「クリスちゃんの見舞い用のお花も買ったし・ ・どうするか?」 けどまだ時間があ

???

「そこを行く兄ちゃん、 ちぃと見ていかんかね。

の老人と目が合った。 シンヤが声のした方を見てみると、こちらを手招きしている露天商

シンヤ

(まぁ見てみるか。)

そう思ったシンヤはその老人のほうへと足を向けた。

物が並べられていた。 どうやらその店はアクセサリーの店らしく、 狭いながらも多くの品

露天商の老人

「兄ちゃん、気になる彼女へのプレゼントにどうじゃ?」

取った。 その言葉に苦笑しつつ、 シンヤは並べられていた商品の一つを手に

手に取った品は銀のネックレスでペンダントヘッドには翡翠が使わ れていた。

シンヤ

「ん?これは... 翡翠ですか?」

シンヤは確信を持って老人にそう尋ねた。

露天商の老人

ぽくなってしまう。 違える始末でなぁ 「おや、よう気付いたの。何か気になる物は見つかったかね?」 • ・・おっと、いかんのう、年を取ると愚痴っ 最近の若い連中は色の付いたガラスと間

シンヤはその言葉に改めて商品を見渡した。

商品を見渡していたシンヤの目がとある一点で止まった。

シンヤ

「あ・・・じゃあこれ頂けますか?」

露天商の老人

「毎度あり。 兄ちゃん、 いい結果を祈っとるぞ」

トゥルーデ

相羽。 すまなかったな。 今手続きが終わった所だ。

シンヤは、 トゥルーデが見舞いの手続きが終わる時間に病院に戻る。

二人は、クリスが寝ている病室を開けた。

トゥルーデ

言うウィッチと此処に居るお手伝いをしている相羽シンヤが来たん 「クリス・ この間な・ 私の部隊にお前に似ている宮藤っと

トゥルーデは、今までの事を目覚めないクリスのに向けて話続けた。

い出した。 シンヤは、 未だに目覚めないクリスの顔を見て亡き妹:ミユキを思

そう・ かつて兄:タカヤと三人で浜辺で遊んでいた過去を。

シンヤ

(トゥルーデに僕と同じ思いさせてはいけない!)

シンヤは、 この時からネウロイを打倒する事を心で誓う。

二人は、 クリスの病室を3 ,4時間経つと出て町の喫茶店にいた。

トゥルーデ

.

トゥルー ていた。 デは、 クリスに何も出来ない自分を責めているのか沈黙し

「トゥルーデ。」シンヤ

トゥルーデ

・・・相羽」

シンヤは、ホットコーヒーを持って来た。

「はいコレ。」

コーヒーをトゥルーデに渡す。

シンヤ・カリがとう。」トゥルーデ

シンヤが笑顔で答える。

「いいよ。」

トゥルーデ この時でも何処かの町ではネウロイの侵攻をうけているんだな。 「このブリタニアだけネウロイの侵攻から我々が守っているが・

シンヤ

ネウロイから。 「だからこそ人の安らげる場所を守り奪わなくちゃいけないんだよ。

トゥルーデ

「相羽・・・」

彼女は、シンヤのその一言を聞けて内心少し安心する。

すると・

??

やあ。

二人の前に誰かが声をかけた。

! ? トゥルーデ

二人は、 振り返る。

刀 夜

「この姿で会うのは久しぶりだな・

刀夜は、 シンヤの目を見て話す。

シンヤ

お前なのか・・・刀夜・・・いやゼロ。」

トゥルーデ

何・・」

トゥルーデは、 叫ぼうとするとシンヤが手で止めた。

シンヤ

「別の場所に変えてもいいかな?」

刀夜

だ。 「別に構わないが・ 此処でも良いようだが変えたいなら大丈夫

刀夜は、町を伺う。

「相羽!」

シンヤ

「大丈夫。心配しないで。

そう言い残すと町外れのネウロイに壊された廃墟の町についた。

刀 夜

「変わったなエビル!」

刀夜は、 調で言う。 以前のラダムに支配されているシンヤを知っている様な口

シンヤ

「テッカマンゼロ・ 何故人間態のまま僕達に接触してきたんだ

シンヤ自身分かっている質問を返した。

刀 夜

「裏切り者を始末する為さ。 それ以上の目的なんか無いな。

刀夜は、当然の様に言う。

シンヤ

「刀夜・ やはり駄目なのか?万に一つこの世界の侵略を止める

事を。」

刀 夜

ラダムが食べる側にまわっただけだ。 食べられるのと同じだ。そして・・・ 「我々ラダムが生存していく為には当然だ。 今度は、 人類が食べられる側にな。 弱いものが強いものに あの下等生物か我々

不敵に笑う刀夜。

シンヤ

「僕は、人間だ!」

シンヤの言葉を聞くと刀夜は、目つきを変えて。

刀 夜

だ。 「人間だと?ふふふ この偽善者がっ 貴様も同じラダムだったくせにケンゴさん 俺たちみたいなのが人間が何処にいるん

ろよ!!ラダムだって事を!この を裏切るつもりか!?俺もお前ももう人間じゃない!いい加減認め 人好しシンヤ。 ないか?自分の思うが侭に・ ・人間じゃあ俺には勝てないぞ?お · 力· ・存分に使ってみる気は

刀夜は、以前の自分の様な言葉で返した。

しかし!

シンヤ

刀 夜 ・ 僕は人間だ。 これからもずっと人間であり続けたい!」

刀夜

「なら死ねよ!」

刀夜の瞳孔が開く。

刀夜は、 ポケットからテッククリスタルを翳した。

刀 夜

「テックセッタアアアアッ!!!」

刀夜のひし形のテッククリスタルが輝いた。

ゼロ

『テッカマンゼロ!』

シンヤ

「刀夜・・・テックセッタアアアアッ!!

バイザーが出来上がった。 を形成して体が黒い装甲を形成し頭部は、 シンヤは、テッククリスタルを翳すとクリスタルの形のフィールド 漆黒のヘルメットの紅の

『テッカマンエビル!』エビル

『たあっ!』

ゼロがテックネイルを出してエビルに襲い掛かる。

『とうっ!』

ガキィーン!!

をガードした。 エビルは、テッ クランサーを器用に使いゼロの左右のテックネイル

ゼロ

『はっ

.!

ドン!

ゼロは、 エビルの腹部を蹴るとテックネイルで攻撃するが

『てあ!』

エビルは、宙回転しながらテックネイルを弾く。

『とりゃ!』

蟷螂の構えをしたゼロがエビルの左肩を当てる。

『くっ!』 エビル

エビルは、空に飛ぶとゼロも飛んだ。

キィー ン!キィ ーン!キィイイイイインンンンンン

!!!!!!!

光速のスピードでお互いの武器の音が響く。

ゼロ/エビル

『はつ!はつ!はつ!はつ!』

両者は、 お互いに息を切らせて動くのも精一杯な状態だった。

すると

トゥルーデ

「相羽アアアアアアアアアツ!!!」

バッバッバッバッバッバッバッバッバッバッ

ゼロの後ろ側からトゥルー デが車に積んであるストライカー を履い て自分の武器MG42・MG131を発射した。

ゼロ

思いついた。じゃあな。 『どうやら迎えが来た様らしいな・・まぁいい。良いアイディアを

行った。 ゼロは、 トゥルーデの武器など効いている筈も無く何処かに飛んで

「っ!」

トゥルーデ

ば大変な事になるぞ。 「コラッ!動くな!肩の傷も幸いかすり傷だが傷からばい菌が入れ 車を動かす位なら問題ないな。 ᆫ

シンヤ 「ありがとう。

トゥルーデは、 肩に怪我したシンヤに応急手当をしていた。

シンヤ

(あれ?なにか忘れている様な感じが・

当たった。 何か忘れているような気がして首を捻り、少ししてその原因に思い

「あ... 忘れてた。

シンヤ

トゥルーデ

ん?どうした相羽、 忘れ物か?」

シンヤの呟きを聞き取ったトゥルーデが聞き返した。

シンヤ

「いや、 渡す物があったんだ。

シンヤはジーンズのポケットを探り、 目当ての物を取り出した。

シンヤ

「はい、 トゥルーデ。

シンヤはトゥルーデに露天商で買ったネックレスを差し出す。

トゥルーデ

「ネックレスだな。.....って私にか!?」

まう。 しげしげと差し出されたネックレスを観察していたトゥルー デは少 し遅れてそれが自分宛ての物と理解して、 動揺して大声を出してし

恥ずかしいのか、 顔がうっすらと赤く染まっている。

シンヤ

つけてね、 「昼間町でクリスちゃんのお花を買いに行っていた時に露天商を見 見てたらトゥルーデに似合いそうだったから買ったんだ。

物心付いた頃からカールスラント軍人として、ウィッチとして過ご かプレゼントを貰うことなど殆ど初めての事だった。 してきたトゥルーデはこうして異性と触れ合うことはもちろん、 何

トゥルーデ

·/////////////

黙り込んでしまう。 その言葉に、どう返すべきか解らないトゥルーデは顔を真っ赤にし、

シンヤ

「気に入らなかったかい?」

トゥルーデ

いた、 それでも私は嬉しいから、 気にするな!」

恥ずかしいやら嬉しいやら申し訳ないやらの飽和状態でトゥルーデ の顔が今日最大の赤さを記録した。

シンヤ

Γ Ń なら良いんだけどね。 ・はい、 じゃあ・

持っていたネッ かけたシンヤ。 クレスを正面のトゥルー デに掛けようと立ち上がり

トゥルーデ

「ノノノノあ・ ・私が立つからお前はそのままでいい。

歩き、座ったままのシンヤが掛けやすいように気を使って中腰の姿 勢をとった。 るように二度三度と頭を振ってから立ち上がり、シンヤの方へ少し シンヤの意図に気が付いたトゥルーデは顔の赤さを沈めようかとす

トゥルーデ

「ん、悪いな。」

シンヤ

「大丈夫だよ、気にしないで。.

シンヤがトゥルーデの首にネックレスを掛ける。

トゥルーデ

· あ/////あ・・ありがとう。

その時夕方の日でトゥルーデの笑顔は、 とても可愛かったとシンヤ

一方第501統合戦闘航空団の基地では・

美緒

「はっはっはっはっ!さあ遠慮なく食べろ。

夕飯の時間シンヤが居ないので美緒が代わりに料理していた。

しかしテーブルに置かれていたのはおにぎり・

・特大サイズのだ。

ペリーヌ

「う!」

特大のおにぎりを目の当たりにしたペリーヌは、 硬直した。

美緒

「具は、納豆だ。身体に良いぞ。

ニッコリと笑い、美緒は更に追い討ちをかける。

美緒

「気に入ってくれたら、 どんどん握るからな、 お前のために。

ペリーヌ

・・・お前の・・ため・・」

ときめいたペリーヌの脈拍数は、急上昇。

ペリーヌ

· いざ!いただきます!」

ぎゅっ と目を閉じ、 ペリーヌは決死の覚悟で完食に挑んだ。

結果!

「・・・· ペリーヌ

・うっぷ。 ちょ ・ちょっと・ 医務室まで」

称えたいと思ったウィッチ達。 這うようにして食堂から出て行くペリー ヌを見送り、 心から健闘を

だのだった。 そうシンヤが居なければ食事と言う機能が保てないと彼女達は学ん

To be CONTINUED

第八話:刀夜 (後書き)

ハルトマン

「芳佳は~お豆で小さくて~ リーネはある意味エース級~(色良し張り良しバルクホルン シャーリーでか過ぎドテかぼちゃ~

「ブゥーーーーーーーーーッッ!!」シンヤ

天 使

「 次 回 空の騎士テッカマンエビル 第九話 スースーするの」

何時もの朝。

サーニャ

「ふぁああ・・・」

かっていた。 夜間警備から帰って来たサーニャが欠伸をしながら501基地に向

その時間は、 上で眠りに入っていた。 朝稽古している美緒以外のメンバー の殆どがベッドの

そして起床の合図のラッパ音が基地に響く。

芳 佳

「ね・・寝坊しちゃった・・・

芳佳は、 いる様子。 寝巻きの着物が乱れているのにも関わらず未だに寝ぼけて

ペリーヌ

「遅刻!遅刻!・・・・眼鏡!眼鏡!」

言わずとストライクウィッチー は眼鏡が無いと何も見えない。 ズファンは、 解ると思うがペリーヌ

トゥルーデ

「1!2!3!4!5!」

トゥ ルーデは、 規則正しく朝起きると体操をしている。

シャー リー

• • • • •

ら出るとそのまま歯磨きをしていた。 頭ぼさぼさでブラとパンティー だけのシャー は 堂々と部屋か

ミーナ

「お・・おはようシャーリーさん・・・

と心の中で思うのだった。 ミーナも内心シャーリー には、 もう少し恥じらいを持って貰いたい

そしてその場を去ろうとすると・・・・

ドン!

「?! ! !

を目の辺りにして彼女はこう思った。 りの様な鼻血に倒れて血で『たすけて~ ミーナは、 足元に何かが当たるのを感じて下を見るとシンヤが水溜 _) _ と書かれた文字

ミーナ

さんの姿を見てそのまま鼻血を出して倒れたのね・ (相羽さん・ きっと部屋から出て直ぐに何時ものシャ

ミーナの察しは、大正解だった。

そしてシンヤを医務室に連れて行くミーナだった。

異なる。 他のウィッチやシンヤの部屋とエイラの部屋は、 ほんの少し赴きが

不気味な顔の像や、怪しい本が並んだ本棚。

水晶や水盤。

占いの道具というより、使用目的は黒魔術ではないかと疑われる品 々がそこかしこに見られる。

る幽霊屋敷の一号の様だ。 そのうえ、床にも魔方陣が描かれており、まるで怪奇映画に登場す

今、エイラの禁断の部屋の扉が、 入してきた。 静に開かれ、 何者かが音も無く侵

トサッ!

侵入者は、 意外と寝相の良いエイラの隣に倒れこんだ。

エイラ

「ウワッ!何ナニ!?」

驚いて目を覚まし身体を起こすエイラ。

エイラ

「サーニャ?」

隣で寝息を立てているのは、下着姿のサーニャだった。

エイラ

「ッタク!ナニ部屋間違エテルンダヨ。

エイラは、ホッとして頭を掻く。

サーニャ

「うにゅ~~・・・・すー・・・

うつ伏せで顔を横に向け、 すでに熟睡にサーニャが入っている。

エイラ

「チェ〜、今日ダケダカンナ。

エイラは、そっとベッドから這い出した。

足元を見ると・・・・

エイラ

「・・・・うえ~~~

サーニャが脱ぎ捨てたものが乱雑に床を覆っている。

エイラ

「ア〜〜」

チラリとサーニャの方を振り返るエイラ。

¬ エイラ

「ッタク、 ウ~、ホントニ今日ダケダカンナ・ ヘッヘッヘッヘ

そう言いながらも、膝をつき、喜々として服を畳むエイラ。

シンヤ

するか?」 「ふう!コレで朝食の準備も終わりだ。 少し時間があるなぁ。

シンヤは、廊下をぶらついていると。

トゥルーデ

相羽。

正面を見るとトゥルーデが歩いてきた。

シンヤ

「トゥルーデおはよう。

トゥルーデ

「おはよう。そうだ実は頼みがあるんだ。

シンヤ

「頼み?」

シンヤは、 トゥルーデのその頼みに頭を傾げる。

「実は、ハルトマンを起こすのを手伝ってくいれないか?」トゥルーデ

「別にかまわないけど。

シンヤは、簡単に了承した。

トゥルーデ

ハルトマンは、 朝が弱いんだ。 それに今日大事な行事もお昼にあ

「 へぇ~~ 」 シンヤ

た事が無かった。 シンヤは、 ハルトマンが朝が弱い事を知っていたが彼女の部屋を見

来た。 だが、 その部屋をトゥルーデと供に開けた時には、驚きと理解が出

難だった。 部屋のいたる所に彼女の私物が散乱していて足場を見つけるのも困

トゥル・デも慣れているとは言えあまり快く思っていない。

トゥルーデ

「ハルトマン起床だ。 起きろ。

トゥルーデは、ベッドから落ちて寝ているハルトマンにいう。

ハルトマン

「う・ ・後もうちょっと・ ・後七十分・

シンヤ

(いや 七十分はちょっとじゃないなぁ

シンヤは、苦笑しながら心で突っ込む。

トゥルーデ

「そんなちょっとが有るか!」

「後国上分

「後四十分・・・」

シンヤ

(全然変わっていないよね?)

シンヤは、ハルトマンの天然さに突っ込んだ。

トゥルーデ

「お~き~ろぉぉぉぉ!!

トゥルーデは、ハルトマンの顔を覆っていた服を退けた。

トゥルーデ

!5!6!7!8!9!もき・り・つ・だ!!」 「カールスラント軍人たる者。 1に規律!2に規律!3も規律で4

シンヤ/ハルトマン

「10は?」

゙゙゙゙゙ シンヤとハルトマンの言葉がユニゾンして少し唖然としたトゥルー

トゥルーデ

ところでハルトマン今日は何の日だ?」

彼女は、ハルトマンに質問した。

だが!

「お休みの日!」ハルトマン

ガクンッー

シンヤとトゥルーデは、ずっこけた。

トゥルーデ

を評して本国から柏葉兼付き十字賞が届く。 昨日ミーナ中佐から聞 いたはずだ。 「ちが一う!今日は午後からお前の表彰式だ。 先日の250機撃墜

トゥルーデが言っているのにも構わず欠伸をするハルトマン。

ハルトマン

「それじゃあお昼まで・・・」

再び寝ようとする。

トゥルーデ

「眠るな!」

ハルトマンの包まっている毛布を取ると・

「////はっ!」トゥルーデ

「トゥルーデ?」シンヤ

突如顔を真っ赤にしたトゥルーデを見たシンヤは、 を見ると・・ ハルトマンの方

下半身が露出していた。

「ブウゥゥゥゥ!!!!シンヤ

大量の鼻血を噴水の様にシンヤは、出して倒れた。

「////さっ!さっさと服を着ないか!履かんかぁ!!」トゥルーデ

トゥルーデは、 服をハルトマンに投げるが未だに欠伸をしている。

そして顔を真っ赤にして怒るトゥルー デだが下を見ると

トゥルーデ 人か!!」 「ああ!!柏葉鉄十字賞が床に!?貴様それでもカールスラント軍

トゥルーデは、 怒鳴ってもハルトマンは平然と服を着始める。

トゥルーデ

朝食の時間だ!さっさと準備して食堂に来い!」

鼻血を出して倒れているシンヤを連れて食堂に向かった。

ハルトマン

「あれ?ない?ズボンが・・・」

そうそれがハルトマンのズボン (パンツ) が無くなった事が事の始 まりだった。

ミーナとリーネは、 ペリーヌも参加してルッキーニは強制参加されていた。 外出に出ており宮藤は美緒と訓練をしていると

サーニャとエイラは、未だに眠っている。

シャーリー

「皆全然来ないなぁ。

トゥルーデ

「全く!どいつもコイツも弛んでいる!」

そう言いながらジャガイモを食べる二人。

シンヤは、近くで横になって貧血回復の為休んでいた。

シャーリー

「まあ、しばらくはネウロイも来ない筈だし良いんじゃない。

トゥルーデ

「楽観過ぎだリベリアン。備えを常にだ。」

シャー リー

「これだからカールスラントの堅物は・ ・はっ!」

まった。 シャーリー が狙っていた大きいジャガイモをトゥルーデが食べてし

シャーリー

「その大きいのあたしんだろ!」

トゥルーデ

「電撃戦だ。」

一人は、ジャガイモを食べ続けた。

ハルトマン

「あれ?ズボン無い・・

ſΪ ハルトマンは、自分のズボン(パンツ)を探しているが発見できな

ちゃんと整理整頓ですよエーリカさん。

ハルトマン 「まっ!良いか。

外に出た。

あ~あ~今日もシンヤ君に女難の相が出ているのは気のせいかな?

シンヤ

「ふう・・ ・掃除も終わったな。

シンヤは、回復して階段の辺りを掃除して終わった。

「ヤッホー!相羽!」ハルトマン

ハルトマンは、階段を滑り台の様に降りてきた。

「エーリカ。」

シンヤは、笑顔で手を振った。

「そーれっ!」ハルトマン

「ブウゥゥゥゥゥ

ハルトマンが降りようとすると下半身が見えた。

シンヤは、生まれて初めて女の子の・・ 小説が無くなってしまうので・・ ・R18になって危ないので。 ・言うのは止めようこの

ハルトマンは、奥の浴場を見た。 「相羽?まぁっ良いか。 クシュンッ!う・ ・スースーする。 ん?

ハルトマン

ハルトマンは、 二のズボンを履いて上機嫌に鼻歌を歌っていた。 浴場に入るとしばらくして出て来たそしてルッキー

「 ~ ~!」ルッキーニ

浴場から最初上がって来たのはルッキーニだった。

ルッキーニ

「!?あれ?あたしのズボン。

パンツでは?

ルッキーニ 「えっと・

ゴダード

[ルッキー 二坊・ ・どうした?]

突如ゴダー ドが後ろから出て来た。

ルッキー ニ

「ゴダードのおっちゃん・ ・あたしのズボンが無いよ。

ゴダード

[なら誰かのを履けば良いんじゃないか?]

カマンアックス・ ゴダードは、 ルッキー 二に悪魔の囁きを言う・・ やる事が凄いおっさんだ。 流石元テッ

ルッキーニ

「そっか!ん!」

ルッキーニは、 ペリーヌの服が置いてある籠を注目した。

そしてルッキーニは、 ペリーヌのズボンを履いた。

ルッキーニ

「じゃあまた遊ぼうゴダードのおっちゃん。」

ゴダード

[ふふふ!ワシがもっと面白い遊びを教えてやるぞ。

二人は、ハルトマンに続いて浴場を後にした。

ペリーヌ

「あら?」

ペリー ヌは、 籠の中を見ると自分のズボンが無くなっている。

ペリーヌ

無い!?ワタクシのズボ・ いえ!何でもありませんわ。

いせ 素直に盗まれたって認めた方が・

ペリーヌ

「うるさいでしてよ!ナレーター!_

はい・・・

ペリーヌ

無い位何だって言うの!?」 令嬢がこの様な事で取り乱してはいけませんわ。 お・ ・落ち着くのよ。 ペリーヌ・クロステルマン。 そうよ!ズボンが ガリア貴族の

そう言うとペリーヌは、 ズボンを履かないまま服を着始めた。

そして使い魔と憑依して尻尾で股間を隠した。

「////どうにも落ち着きませんわ・・・」

まぁ普通は、そうですね。

ペリーヌ

「何か変わりになる物・・・!?」

ペリー ヌが別の視線を見ると其処には扶桑海軍支給のズボンが視界

に入った。

「これは!?まさしく少佐の!」

ペリーヌ

ペリーヌは、その籠に手を伸ばそうとした。

ペリーヌ

っ な ・ ・何を考えてるのです。 ワタクシがその様な事を勝手に取っ

てはいけません。」

そう言いつつ煩悩むき出しで奪いそうなペリーヌ。

ガラッ!

ペリーヌ

! ?]

振り向くと芳佳がいた。

美 緒

「何をしてるんだ?」

美緒も出て来た。

芳 佳

「それあたしのズボン。

「えっ!?」 ペリーヌ

ガーン!

内心落ち込んでいるペリーヌ。

しばらくして!

「こ・・これは事件ですわ!」ペリーヌ

と美緒と芳佳の前で言うペリーヌ。

けだった。 そして今基地に居るのは、 ルトマン、トゥルーデ、ルッキーニ、エイラ、サーニャ、 芳佳、美緒、ペリー ヌ、シャーリー、 シンヤだ

エイラとサーニャは、今だ部屋で寝ている。

それ以外の基地に居るメンバーが食堂にいた。

トゥルーデ

「これは事件だな・・・

トゥルーデは、テーブルに置かれた芳佳のズボンを見ていた。

ちなみに芳佳は、 上の服だけ着ている状態で顔を真っ赤にしていた。

芳 佳

「あの・・私の服を・・・

シンヤ

「返してあげなよ・・・」

トゥルーデ

「いや、証拠物件だ。」

「えっ!?けど・・シンヤ

シンヤが芳佳に視線を置くと芳佳は、 下を必死で隠していた。

トゥルーデ

ん?何も付けていないのか?なら私のを貸してやろう。

トゥルーデは、ズボンを下ろそうとした。

シンヤ

ホルンさん!僕もうこれ以上鼻血を出したら本気で死ぬから! 「待って!待ってぇ!いや!ズボンを脱がないでください。 バルク

咄嗟にシンヤは、自身の見に付けているジージャンを芳佳に着せた。

トゥルーデ

「変な奴だ。

ズボンを上げるトゥルーデ。

トゥルーデ

では、 捜査に入る。そもそもペリーヌのズボンが無くなったかだ。

_

シャー リー

「元々履いていなかったとか?」

シャーリーは、シンヤを見ながら言う。

シンヤ

「シャーリー そんなに僕の鼻血芸見たいの?」

シャーリー

「も・ち・ろ・ Ь あたしの楽しみの一つだな

ペリーヌ

「そんなワケありませんでしょ!」

流石にペリーヌも怒る。

トゥルーデ

「と言う事は、 誰かが盗んだ可能性が高いワケだ。 _

それを聞いていたルッキー ニとゴダードは

「ぎくっ!」 ルッキーニ/ゴダード

ジャガイモを食べているルッキーニもエロ本を鑑賞しているゴダー ドも顔から冷や汗を流す。

ハルトマン

「?あん。」

るූ ルッキー 二のズボンを盗んだハルトマンは平然とジャガイモを食べ ハルトマンは、 ルッキー ニとゴダードの異変に気付いたがそもそも

トゥルーデ

「さて其処でだ。 クロステルマン中尉の前に更衣室にいた人物は?」

「んーーーー・・・あっ!」ペリーヌ

ペリーヌは、ルッキーニに視線を送る。

「フランチェスカ・ルッキー 二少尉。」トゥルー デ

- ゴダードのおっさん・・・シャーリー

「うわあああ!!」ルッキーニ/ゴダード

二人は、テーブルから立つと逃げ出した。

シャー リー・特てえええええ !!トゥルー デ

シンヤ達は、二人を追う。

「逃げた!」

そして逃げるルッキーニの履いているズボンは・

「ワタクシのですわ!」ペリーヌ

ペリーヌも自身の物と証言した。

ゴダード

[ルッ!ルッキー 二坊!芳佳のズボンも取るんだ。]

「うん!」

ルッキー ニは、ゴダー ドの指示で芳佳のズボンも取って食堂を後に

外に出るとルッキーニを見失った。

「どっちに行った?」トゥルーデ

「んーー?さぁ?」シャーリー

「行こう!」トゥルーデ

トゥルーデとシャーリーは、左側を行った。

ペリーヌ

「ワタクシ達も!」

「うん!」

シンヤ、ペリーヌ、ジージャンを着た芳佳は、 右側に行く。

美緒

「おーい!ルッキーニ!」

美緒は、茂みを探していた。

ゴタード

[巻いたのか?]

リッキーニ

ルッキーニは、木の上から探っていると芳佳とシンヤに見つかった。

芳 佳

ルールッキーニちゃん!ゴダードさん!私の服返して!」

シンヤ

「今なら芳佳の怒りは、多分収まらないけど返しなよ。

木の上に居るルッキーニとゴダードに言う。

ルッキーニ

「うふ 此処まで追いで!」

ゴダード

[ワシのコレクションの一つに加えるかのぉ。

二人の挑発に芳佳の怒りに火がついた。

シンヤ

「芳佳ぁ!ダメだよ登っちゃ!」

シンヤの言葉は、遅しもう芳佳は木に登っていた。

芳 佳

「ふう!え!?」

何時の間にか二人は、居なくなっていた。

ルッキーニ

「芳佳丸見え」

パシャ!

ゴダード

[コレは、良い記念写真じゃな・・・

何故か写真を持って撮るゴダード。

そして・・・

「 ブゥ ウウウウウウウウウウ!!--シンヤ

バタン!

当然我らが主人公相羽シンヤは、鼻血を出す。

芳佳

「きゃああああああああり!!」

芳佳は、下を隠すと木から落ちた。

「其処か!」トゥルーデ

「待てエエエエエエ!!!」シャーリー

後ろからトゥルーデ達が追いかけてきた。

ゴダード

[宿舎に入るぞ!]

「う_い ルッキーニ

「うん!」

二人は、宿舎の中に逃げ込んだ。

ガチャン!

「 エ ん ?」

ドだった。 こえて起き上がるとルッキーニと変なおっさんと思っているゴダー エイラは、サーニャと一緒に寝ているベッドでドアを開ける音が聞

「シーーーー!」 ルッキーニ/ゴダード

二人は、揃えて静にする様にエイラに伝えた。

エイラ

· ?

一体何があったんだと言うのか二人を睨んでいた。

ルッキーニは、窓を開けるとかなりの高さがあった。

これは、流石に何かを使わないと無理らしい。

「あ!」
ルッキーニ

二人は、 っ掛けて下に下りた。 何かを閃いたかの様にエイラのズボンを取ると水道管に引

エイラ

「コラッ!ソレアタシノ!」

行き成りの状態にエイラは、驚く。

エイラは、 服を着ようとしたが肝心のズボンが無い。

エイラ

「ノノノノナーニャ!ゴメン!」

顔を真っ赤にして寝ているサーニャに謝るエイラ。

エイラは、サーニャの黒いズボンを履くと部屋から出た。

エイラ

紅くした。 やはり履きなれていない他人のズボンに違和感があるのだろうか顔

するとシャーリーとトゥルーデがやって来た。

「ルッキーニとゴダードのおっさんは?」

シャーリー

エイラ

「シー下二逃ゲタ・

トゥルーデ 「追うぞ!」

三人は、下に向かう。

ルッキーニ 「トウッ!」

ルッキーニは、下の窓が開いている所から降りていた。

ルッキー ニ 「じゃじゃー ん! !

様に巻いて降りて来たが左右の方向からシンヤ達が挟み撃ちの様に ルッキー二達を追いかけてきた。 ルッキー ニは、芳佳のズボンを片手にエイラのズボンをマフラーの

「ドロボーじゃ ないよ!」ルッキーニ

<u>る</u> 人。 と言いながら真っ直ぐ逃げる様に見せかけて横の部屋に素早く逃げ

- ^ ルッキーニノゴダード

二人は、何とか逃げられてホッとした。

「ん?此処は?」ルッキーニ

ゴダード

[何か機械がある部屋だのぉ。]

コロッ!

を滑らせた。 するとルッキー 上 は、 視界が暗くて解らないがビンのような物に足

ガチャッ!

そして何かのレバーを押してしまった。

そうそれは、ネウロイが来た事を報せる警報装置だった。

ドゥルーデ 「警報?」 「ネウロイ!?」

376

出撃だ!」

同は、急いでハンガーに向かう。

「テックセッタァァァァッ!!!」シンヤ

バイザーが出来上がった。 を形成して体が黒い装甲を形成し頭部は、 シンヤは、テッククリスタルを翳すとクリスタルの形のフィールド 漆黒のヘルメットの紅の

『テッカマンエビル!』エビル

「敵襲です!」リーネ

いた。 買い物に出かけていたミーナとリーネが帰って来ると警報が鳴って

ミーナ

「予報が全く当たらなくなって来たわね。」

エビル 行くと何故か戸惑っている。 エビルは、何時まで経っても芳佳達がハンガーから出てこないので

『どうしちゃったの!?』

芳佳

「シ!シンヤさん!私下履いていません!」

ペリーヌ

ワ・・・ワタクシもスケスケで・・・」

エビル

『そーだった・・・』

エビルは、頭を抱えた。

美緒

「あっはっはっはっはっはっ!問題無い!任務だ任務!空では、 誰

も見ていない。

エビル

いや・ 任務以前の問題だけど・ 僕も居るよ・

(- - - - - -) 🛮

ささやかながら小声で突っ込むエビル。

警報室から落ち込んだ顔をした二人が出て来た。

ルッキーニ

「お・・・怒られるよね?」

ゴダード

[心配するなワシも一緒に怒られるからな・

「5)がこ

「ありがとう。おっちゃん。」

???

「何が怒られるって?」

突如誰かの声が二人に質問する。

振り向くとハルトマンが悪魔の様な微笑みで二人を見ていた。

エイラ

「ヌ!脱ゲッテ酷イジャナイカ!」

サーニャは、自分のズボンを履いているエイラから奪おうとした。

サーニャ

「だって私のだから・・・」

サーニャは、懸命に奪う。

エビル

『あの・ 二人とも・ これ以上やったら・ ブウゥウウウ

ウウウウウウウウウ!!!』

バタン!!

エビルは、 鼻血を出したが少し頑張って意識がある状態だった。

エビル

『あ・・・ああ・・・』

トゥルーデ

何をやっているんだ・ ・こいつ等!出撃だ!全機続け!」

そう言いながら行く一同。

すると・・・入り口に誰からいる。

ミーナ

「みんな待って!」

一同は、止まった。

エビル

『ミーナ?』

「ミーナ敵襲だ!」

トゥルーデ

その言葉にミーナは、頭を横に振った。

ミーナ

「いいえ!警報は、間違いです。

それを聞くと・・・・

みんな

「出てきなさい。」ミーナ

ミーナの言葉にルッキーニとゴタードが出て来た。

「ルッキーニ?」シャーリー

芳佳

「ゴダードさん!?」

二人は、 申し訳なさそうな顔で出て来た。

リーネ

まった物らしいです。 「あの警報は、 ルッキー ニちゃんとゴダードさんが誤って押してし

「それとこれも没収しました。

ミーナの手には芳佳、ペリーヌ、エイラと例の写真もあった。

そして事件は、終わった。

午後のハルトマンの柏葉兼付き十字章の表彰が基地で執り行われた。

美緒

「ハルトマン中尉!壇上へ!」

「はい!」 ハルトマン

壇上に上がるハルトマン。

一同に拍手が沸いた。

ルッキーニとゴダードは、 何故か頭に3段アイス並みの拳骨と正座

ルッキー ニノゴダード

「うつ・・・・(T T)」

リーネ

「ルッキーニちゃんとおじさん可哀相・・・」

芳佳

「んーーー?そう言えば変なんだよね?」

芳佳は、さっきの事件で気になる事があった。

ゴダード

の眼鏡ッ娘のズボンをかりただけじゃぞ?] [そうじゃ!元々ルッキー 二坊のズボンがなくなったからペリーヌ

シンヤ

「え!?」

ペリーヌ

「何ですって!?」

芳佳

「じゃあ他に持って行った人が居るの?」

リーネ

「そ・・そんな人居るのかな?」

シンヤ

「さ・・さぁ・・・ん?」

シンヤは、突如何かを思い出した。

「どうしたんですか?」リーネ

シンヤ

「いや・・・少し・・ もしもズボンが見つからなくて・ (朝 ・ ・ エーリカの部屋が汚れていて・

と考えていると突如風が来た。

ーニのズボンだった。 正面で受賞を貰ったハルトマンのズボンが見えるとそれは、 ルッキ

シンヤ

「エーリカアアアアアアアツツツツ

シンヤの顔が悪魔の様な恐ろしさに変わった。

シンヤの渾身の拳骨が広間に響いた。

ゴキィィィィィンンンンンンンンンン

その後・ エーリカは、 明日の朝まで正座をさせられていた。

ゼロ

『さぁ・ ・目覚めろ!テッカマンセイバー!!』

地下の中ゼロは、 マンが出て来た。 弱弱しいラダム樹の花から一体の青い姿のテッカ

セイバー

『テッカマンセイバー!!』

セイバーが叫ぶとラダム樹は、直ぐに枯れた。

『これも軟弱だな・・まぁいい。セイバーよ。ゼロ

貴様に作戦を告げる。

セイバー

『はつ!』

-U

To be CONTINUED

第九話:スースーするの (後書き)

ミーナ

「組織を維持する為には規律が必要。どんなに理不尽でもだけど・・

か!? 次回 ・人の此処は縛れない。それは、私も同じ。 空の騎士テッカマンエビル(第十話)君を忘れない」 あのテッカマンはまさ

第十話:君を忘れない

とある昼下がりに芳佳は、ハンガーにいた。

芳 佳

「いつもありがとうございます。_

芳佳は、 お菓子を持って整備兵達に言うが全く反応が無かった。

???

「バッカモーーーーン!!!

芳佳を無視する整備兵達に怒鳴り声が響く。

芳 佳

「???」

声のした方を向くと小柄で杖を持ったヨボヨボの老人の声だった。

整備兵A

「か・・カルロス整備兵長!?」

整備兵達は、その声の主に驚いている。

カルロス

を持って来たって言うのに・ 「まったく!こんな可愛い嬢ちゃんがわざわざ儂等の為に差し入れ ブツブツ・

などとカルロスじいさんは、 文句を言いつつ整備兵達全員のお茶を

芳佳と共に準備する。

整備兵B

禁止「黙らんかああああああああ 「カルロス整備兵長!ミー ナ中佐からウィッ チ隊との接触をきつく

整備兵達は、 カルロスじいさんの怒りに動揺した。

ルイス

(面白えな・・カルロスじいさんは・・・)

何時の間にか芳佳と一緒にお茶のお手伝いをしているルイス。

シンヤ

「芳佳!?」

するとシンヤも差し入れのお菓子を持ってハンガーに来ていた。

カルロス

「シンヤの兄ちゃんかぁ!

カルロスじいさんは、シンヤが来た事に気が付く。

ルイス

「よう!もう基地の家事は、終わったのか?」

手を打たれた。 ルイスは、シンヤの持っているお菓子をつまみ食いしようとしたが

ルイス

「ちえ~~・・・」

ルイスは、悔しそうに芳佳の方に行った。

そしてお茶の持って準備が終わると芳佳も居るせいか整備兵達(ル イスとカルロスじいさん以外)恐る恐る食べ始めた。

ルイス

「お前がシンヤの言っていた宮藤芳佳か?」

芳 佳

「はい!」

芳佳は、笑顔で答える。

カルロス

「じゃああの宮藤のダンナが言っていた娘さんはアンタなのか?」

カルロスじいさんは、 芳佳の素性を知って驚いた。

芳 佳

「お父さんを父を知って居るんですか?」

カルロス

ああ・ **儂もストライカーの開発に携わっていたかたな・**

た。 カルロスじいさんは、 お茶を飲みながら昔の思い出を思い出してい

カルロス

あ お前のお父さんはなぁ何時もお前さんと家族を心配しとっ たまに一緒に酒を飲んだ仲だったからその時聞いた。 ま

カルロスじいさんは、 芳佳に父について色々語った。

芳 佳

「あの・・聞いて良いですか?」

カルロス

「何じゃ?」

芳佳

すか?」 「何でミー ナ中佐は、 カルロスさん達の接触を硬く制限してるんで

な表情に変化した。

芳佳の言葉を聞くとカルロスじいさんの目が更に細くなってシビア

カルロス

「あの小娘は・ ・・過去に拘っている・ ・大馬鹿でケツがまだまだ

青い青二才じゃしな・・」

始した。 カルロスじいさんは、 何時の間にかお茶とお菓子を食べて作業を開

シンヤ

「ん?」

シンヤは、 お茶の片付けをしていると海から戦艦が見えた。

芳佳

「え?あ!赤城だ!」

た。 そう芳佳とシンヤは、 このブリタニアまで乗っていた戦艦赤城だっ

そしてシンヤと芳佳は、ミーナに呼ばれて行くと美緒と赤城の艦長

がいた。

赤城の艦長

「宮藤さん!お会いしたかった。

赤城の艦長が芳佳に来ようとしたがミーナが間に入ろうとすると・

,

ガシッ!

芳佳の隣にいたシンヤがミーナの二の腕を掴んで引っ張られた。

赤城の艦長は、芳佳に挨拶なのか握手をした。

赤城の艦長

当たり前ですね・・ したが・・ 杉田です。 乗員を代表して貴女と漆黒の魔神にお礼を言いにきま やはり漆黒の魔神は、 此処にはいませんか・

杉田艦長は、 芳佳だけでなくエビルにもお礼が言いたかったらしい。

芳 佳

「お礼?」

杉田艦長

ました。 「貴女と漆黒の魔神のお陰で大事な警護艦隊の船が失われずに済み 何より多くの人命が助かりました。 本当に感謝しています。

シンヤ

よ (杉田さん・ 僕は、 その言葉を聞けただけで心から嬉しいです

シンヤは、内心嬉しさでいっぱいだった。

すると杉田艦長は、 一つの袋に包まれた箱を持って来た。

杉田艦長

全乗員で話し合って決めました。 これを貴女にと・

ミーナ

あらあら良かったわね。

美緒

「ありがたく受け取ておけ。

美緒も笑顔で言う。

シンヤ

「そうだよ。」

芳 佳

「はい!ありがとうございます。.

すると笑顔が一転して真剣な表情でミーナを見る杉田艦長。

杉田艦長

「反攻作戦の前哨として、 我々も出撃が決まりました。

ミーナ

「ついにですか・・・」

笑みが消えた。

杉田艦長

出港なので、 「ええ。今日は、その途中で寄らせていただいたのです。 是非、 艦にも来てください。 皆喜びます。 明日には、

シンヤ

「良かったね芳佳。

芳佳

「え・・はい!」

ブリタニアに来るまでの一ヶ月を赤城で過ごした赤城である。

そのみんなと再会出来るのだから、嬉しくて仕方ないはずがない。

だが!

ミーナ

「残念ですが、 明日は出撃予定がありますので・

シンヤー

「ミーナ!!」

ミーナは、 杉田艦長にそう言って、やんわりと断った。

葉にしゅんとなる。 ネウロイの事がすっかり頭から抜け落ちていた芳佳は、ミーナの言

杉田艦長

「そうですか。・・・残念です。」

杉田艦長も失望を隠せなかった。

杉田艦長が去った後。

ドン!!!

シンヤが隊長室の机を力一杯叩いた。

シンヤ

「どう言うつもりだ!ミーナ! !明日は出撃なんで無いぞ!!」

ミーナ

· · · · · ·

ミーナは、何も答えない。

シンヤ

一体どうしたんだ!?何時ものミーナらしくないぞ!!」

隊長室では、シンヤの声で響いていた。

美緒

「相羽!落ち着け!」

美緒が仲介に入った。

「これが落ち着いていられるか!」シンヤ

にした。そう言いつつも美緒がシンヤを何とかして宥めで一緒に隊長室を後

ミーナは、その夜考えていた。

美緒

「ミーナ。」

すると美緒が隊長室にやって来た。

ミーナ

「美緒・・・」

美緒

「相羽も・ ・同じ事を言ったなカルロス整備兵長と同じ事を。

ᆫ

ミーナ

「そうね・・・

今のミーナの中には、 とある男の事を思い出していた。

399

BUUUUUUUUUUUUUUUU!!!

その翌朝

ミーナの予報通りネウロイが現れた。

ウィッチー ズやシンヤは、ミーティングルー ムに集まっていた。

ミーナ

「ガリアから敵の進行中との報告です。」

美緒

「今回は珍しく予想が当たったな。.

ミーナ

「 え え。 目指してるわ。 現在の高度は、 4 0 000 進路は、 真っ直ぐこの基地を

美緒

「よし、ルーチンの迎撃パターンでいけるな。

立ち上がった美緒は、表を読み上げる。

美緒

とリーネが後衛。 「今回の搭乗割りは、バルクホルンとハルトマンが前衛。 エイラとサーニャとは、基地で待機だ。 宮藤と相羽は私とミーナの直援。 シャー リーとル ペリーヌ

今日は、 以外のストライカーを積んで何時でも目的場所に向かった。 特別に飛行機からの出撃となり基地で待機しているメンバ

セイバー 『ボルテッカアアアアアアアアアアア!!

を完了した。 シンヤ達が飛行機で移動している間セイバーがネウロイを全て破壊

『・・・・行け・・』セイバー

セイバー が言うと後ろから多くのラダム獣達がシンヤ達が来る方向 に向かった。

ミナ

「何ですって!?」

ミーナは、突然の知らせの紙を見て驚いた。

美緒

「どうした?」

ミーナ

の生命体が此方に向かって来ているとの事よ。 「さっき基地からネウロイの反応が消えたらしいけど・ 未確認

美緒

「 何 ! ?」

美緒は、 眼帯を外して魔眼で見ると沢山のラダム獣達が向かって来

ていた。

美緒

「何だ!アレは!?」

芳 佳

「坂本さん?」

芳佳が窓を見ると沢山のラダム獣達が来ていた。

美緒

よっし!さっきのルーチンのフォーメーションで行くぞ。

美緒が的確にメンバー編成をした。

美緒

「相羽は、 緊急時になれば出撃出来る様にしておいてくれ。

シンヤ

「わかった。

美緒達は、 飛行機のハッチが開くとストライカーで出撃した。

美緒

「よっし!突撃!」

美緒が言うとハルトマンとトゥルーデが先に出る。

続いてリネットとペリーヌも出た。

バッバッバッバッバッバッ!!

ハルトマンとトゥルーデは、 銃でラダム獣に発砲した。

しかし!

「何!?」ハルトマン

ウィッチーズ達は、驚いた。

ラダム獣

『ガアアアア!!』

「くっ!!」ハルトマン/トゥルーデ

二人は、瞬時にシールドを展開させた。

ラダム獣

「ジャアアア・・

ラダム獣の一匹がハルトマンのシールドに触れると突然身体がアイ スクリームが溶ける様に溶け始めた。

ラダム獣

『ガアアア!!』

するとラダム獣数体がミーナに向かって向かって来た。

「クッ!」

ミーナは、シールドを張った。

美緒

「ミーナ!!」

芳 佳

「ミーナ中佐!!」

二人がミーナに駆けつけるとまた別のラダム獣達が阻んだ。

追い込まれた。 そしてしばらくするとミーナがガリアの最北端のパ・ド・カレーに

美緒

ミーナを我々から離す為だ!」 「そうか!わかったぞ!奴等の 灰色の墜天使の目的が!奴は、

美緒の察しは、正解していた。

いくら判断力の良い優秀な隊でも隊長を離されれば最終的な判断に

迷う。

ゼロは、そのためにセイバーを使った。

シンヤ

「美緒」

インカムで美緒に繋いだ。

美緒

[相羽!?]

シンヤ

「僕も出る!」

美緒

. 解った!]

シンヤは、 飛行機から飛ぶとテッククリスタルを持つ。

シンヤ

「テックセッタアアアアッ!!!

シンヤは、 いつもの様にテックセットしようとしたが・

ピカッ!

地上から突如光が発光した。

ピキッ!

シンヤ

「ぐああああ!

が出来シンヤをエビルに変身する事が出来なくクリスタルに皹が入 エビルの変身に形成するクリスタルフィー ルドの内部から棘状の物

そのままシンヤは、 空中から地上に急下降した。

芳 佳

「シンヤさぁぁぁぁんんんんんん!!!

ガシッ!

芳佳は、見事シンヤをキャッチした。

美緒

「相羽!大丈夫か!?」

美緒達も駆けつけた。

トゥルーデ

「どう言う事だ!?」

シンヤ

ックセットを無力化する干渉スペクトルのせいで変身できないんだ。 「おそらくゼロは ・僕がエビルに変身出来るのを封じる為にテ

シンヤは、 皹入ったテッククリスタルを見ながら言う。

美緒

「解った・・・」

トゥルーデ

「ならその干渉スペクトルを全て破壊すれば良いんだな?」

すると別のところに居るミーナ以外の全員が武器を構えた。

シンヤ

「けど・・」

美緒

りが減ると思えば楽なほうだ。 「心配するな何時もお前には、 借りを作ってばかりだ。 少しは、 借

シンヤ

「美緒・・」

ハルトマン

やないよ。 「あたし等だってウィッチーズだもんそう簡単に倒れるような軟じ

「みんな・・・」シンヤ

その時のシンヤにとって彼女達が頼むしく思えてきた。

美緒

は干渉スペクトルの全破壊と残りの者はラダム獣を攻撃しろ!」 「よっし!宮藤は、 相羽の護衛を!私とハルトマン、バルクホルン

ウィッチーズ

「了解!」

様に行った。 彼女達は、 それぞれの持ち場についてシンヤをテックセット出来る

ミーナ

「クッ!」

バッバッバッバッバッバッバッ!!

ミーナは、 必死でラダム獣達から身を守っていた。

ミーナ

?

ミーナも一体どういう事何か理解出来なかった。

突如ラダム獣達は、ミーナがパ・ド・カレー

の近くに来ると退いた。

そして・・・彼女は、ある事を思い出した。

此処は、 したとされる場所だった。 かつて自分の恋人のクルト・フラッハフェルトが命を落と

(君だけを戦わせたくない。)

アノ日、 静かに燃える暖炉の前で自分にそう告げる人。

クルト・フラッハフェルト。

た人。 幼馴染みであり、 同じ木漏れ日を見つめ、 同じ小鳥の歌を聞き育っ

ネウロイさえ現れなければ、 んでいた筈の人。 同じ音楽の道を、 ずっと手を携えて進

クルト

[ミーナと一緒に、いられるからね。]

笑んだ。 あの星降る夜、 クルトは自分も軍に志願した事をミーナに告げ、 微

ミーナは、 初め、 自分の耳が信じられなかった。

だが・・

ミーナにとって、 る為にあるものだった。 クルトの指は、 鍵盤と共に、 宝石の様な音を奏で

った。 しかし、 機械いじりが好きだったクルトは、 整備兵としても優秀だ

戦場は、欧州の人々はその才を求めていた。

伸べてる事を望んでいたのだ。 そして何より、 クルト自身がミーナ自由に空で戦える様に手を差し

ガサッ!

いた。 突如後ろから何かの気配を感じたミーナは、 振り向くとセイバー が

「テッカマン!?」ミーナ

ミーナは、銃を構えた。

『敵・・・ウィッチ・セイバー

•

た。 セイバー Ιţ まるで生気の塊もないただの操り人形の様な動きだっ

ミーナ

(!!これは!?)

ミーナは、自分の魔法が気配を探る系統だった。

例えてで言えば戦車の中に人かそれとも機械で動いているのかを判 断出来る物である。

そしてミーナは、 その気配を感じて自分自身を疑う。

「クルト!クルトなの!?」ミーナ

ミーナは、 気配とテッカマンセイバー の声を聞いてかつてのカレー

基地で死んだクルトだとわかった。

セイバー

『ミーナ・・ ・ミーナ・ ・・うわあああああああああ!!!』

叫んだ。 セイバーは、ミーナの名前とミーナの顔を見ながら呟くと獣の様に

そのままミーナの首筋を片手で掴むと上げた。

ミーナ

「く・・苦しい・・ ・や・・止めて・・クルト・

ミーナは、抵抗もせずに懸命に彼に呼びかける。

セイバー

『ぐあああ・・・』

セイバーの紅く光る瞳が更に輝く。

美緒

「相羽!干渉スペクトルを破壊に成功したぞ!」

シンヤ

「ありがとう美緒、みんな。」

シンヤは、 皹の入った己のテッククリスタルを見る。

シンヤ

なるな。 (もしも・ ・今テックセットしたら・ エビルに変身出来なく

シンヤは、 覚悟を決めた様にテッククリスタルを翳した。

シンヤ

「テックセッタアアアアッ!!!

芳佳から飛び降りとシンヤは、テッククリスタルを翳すとクリスタ のヘルメットの紅のバイザーが出来上がった。 ルの形のフィールドを形成して体が黒い装甲を形成し頭部は、 漆黒

エビル

『テッカマンエビル!』

エビル

『芳佳!急いでミーナを追うよ!』

芳 佳

「はい!」

二人は、ミーナの向かった方向に急ぐ。

美緒

るぞ!」 「(頼んだぞ相羽、宮藤。)さぁ我々は、 此処をラダムから死守す

全員

「了解!」

ウィッチーズは、全力を持ってラダム数体と本気の戦闘が始まった。

ミーナ

「ああ・

ミーナの息ももやは虫の息の様になってきた。

セイバー 『がああああ!!』

414

エビル

『とりゃ ああああああああああ!!!』

確認したらテックランサーをセイバーに投げた。 エビルは、 空からミーナを発見するとセイバーに襲われているのを

ドン!

「けっほ!けっほ!けっほ!」ミーナ

ミーナは、首を押さえて咽ている。

『ミーナ!おのれ!!』エビル

エビルは、 い掛かるが・・ミーナが立ち塞いだ。 テックワイヤー でテックランサー を戻すとセイバー

エビル

『ミーナ!?』

た。 エビルも一体どういう事なのか、 解らないが事情がある物だと思っ

ミーナ

クルトなの!」 「止めて!相羽さん!セイバー テッカマンセイバーは

エビル

『何だって!?』

テッカマンだと知って戸惑っていた。 エビルは、 前に美緒から昔死んだミーナの恋人いると・ ・そして

セイバー

『・・・裏切り者エビル!!』

セイバーは、 してエビルに襲い掛かる。 咄嗟にフェンシングのエペに似たテックランサーを出

『くっ!』 エビル

エビルもミーナを抱えてテックランサーを出して交戦した。

ガキィーン!!

エビルとセイバーのテックランサーが鳴り響く音がした。

芳 佳

「シンヤさん!!」

其処に芳佳が来た。

エビル

『芳佳!ミーナを頼む!!』

エビルは、 芳佳の方にミーナを投げて芳佳も見事キャッチした。

エビル

『てりゃあああああああ!!』

エビルは、テックランサーを十字に変形させセイバーに投げた。

シュッ

グサッ

セイバー **『クッ・ 6**

エビルの攻撃で自身のテックランサーを払われ右手に

傷を負った。

セイバー

は

ミーナ

「クルトォ!クルトォオ

芳佳

「ミーナ中佐落ち着いて下さい!!」

ミーナは、芳佳の腕の中であばれている。

出口が赤く輝き、そこに強大なエネルギーを持つ光をネウロイが来 るのを最初から予想していたかの様に収束していた。 エビルの左右胸部に埋め込まれているレンズ部分..... ボルテッカ射

エビル 『ボルテッ 6

エビルの何かが躊躇った。

エビル

(本当に・ ・コレが彼を救える事なのか

エビル・・・シンヤの心が疑問になった。

セイバー

『エビル・・・死ねえええ!!』

セイバーは、 テックワイヤー でテックランサー を回収するとエビル

に攻撃をした。

グサーー

エビル

『うおおおおお!!!』

エビルの腹部にセイバーのテックランサーが貫き大量の血を流した。

芳佳

「し!シンヤさあああああああ んんんんつつつ

芳佳とミーナの目も瞳孔が開いた。

エビル

(くっ!・ やはり ・ 僕 は・ タカヤ兄さんの様には出来

そうも無いな・・・)

エビルは、 心底自分が甘ちゃんだと言う事を自覚した。

エビル

『アレをするか!!』

って超高速で行く。 エビルは、 装甲を変形させて体をスリム化させるとセイバー に向か

□ エビル

.!

『 クラッ シュ イントルゥゥゥゥゥゥドオオオオオオオオツツ!

せ衝撃波をセイバー に当てた。

エビルは、

セイバーを倒す為にクラッシュ・イントルードを発動さ

それも一回だけでなく二十回はセイバーに当てていた。

セイバー

『ああ・・・・』

セイバーは、 虫の息の状態になって倒れていた。

エビル

(待ってよ・・・)

エビルは、数体のラダム獣の戦いを思い出した。

奴等は、 きかけられた様に逃げた。 美緒達の魔法のシー ルドに触れた途端に一斉に殺虫剤を吹

エビル

(もしかしたら!) 芳佳!!早く!セイバーに治療を!」

芳 佳

「えつ!?でも・ 『良いから早く! 解りました!」

芳佳は、 エビルの指示通りに治療魔法を展開した。

すると・・

セイバーの頭のレンズの様な所から何かが破れて出て来た。

ラダム虫

『ギヤアアアア!!』

芳佳に襲い掛かったが

グサッ!

エビルが瞬時にテックランサーでラダム虫を殺した。

そして

セイバー

『此処は 6 ・ごめんね・ プレゼント無くしちゃった

ポロツ・・

があふれ出てきた。 セイバー クルトのその言葉を聞いた瞬間にミーナは、 大粒の涙

ミーナ

「私こそ・・ごめんなさい!貴方を助けられなくてぇぇ!

ミーナは、セイバーに泣きついた。

芳 佳

「 何 で・ ・アノ虫は、 私の魔法で出て来たんですか?」

芳佳は、 何故ラダム虫が出てきたのかをエビルに聞いた。

エビル

だよ。 よ。けどラダム虫が出るのはテッカマン死を意味するけど芳佳のっ て治癒魔法だから多分蝕まれた部分も治療出来ると思ったそれだけ な特殊な物質に弱いから危険を察知して宿主から出て非難したんだ 『これは、僕の推測だけど多分ラダム虫は魔法・・・特に芳佳の様

エビルは、芳佳達に説明した。

エビル

『う!』

エビルは、突如腹部を抑えた。

芳佳

「シンヤさ・・・!?」

何時もと違うシンヤに気付いた芳佳は、 シンヤの異変に気がつく。

バタン!

エビルは、倒れた。

すると突然テックセットが解除したが・

パリィーン!!

エビルのテッククリスタルが割れた。

芳 佳

「シンヤさん!シンヤさん!!」

ポタッ!

芳佳の手に何やら水の様な感触がして見ると・

芳 佳

「え・・・!!?」

それは、シンヤの真っ赤な血だった。

芳佳の周りの時間が遅くなった。

芳 佳

シ・ シンヤさあああああああああ んんんんつつ!!

そしてしばらくして美緒達が芳佳達を発見した。

To be CONTINUED

美緒

ラニー 発進」 こるか? 次回 「 変身できないままセイバー の戦いで意識不明の相羽。 奇跡は、起 空の騎士テッカマンエビル(第十一話)機動馬グ

第十一話:機動馬グラニー発進 (前書き)

ッククリスタルが壊れるのと同時にセイバーとの戦いで瀕死の重傷 皹が入り壊れる覚悟でエビルに変身してセイバーと戦う。 そしてテ ゼロの策略によって干渉スペクトルでシンヤのテッククリスタルに をシンヤは、 負った。

第十一話:機動馬グラニー 発進

5 0 統合戦闘航空団の基地では、 緊張が走る。

芳佳

「シンヤさん!シンヤさん!!

先程のセイバーの戦闘で意識不明のシンヤは、 呼び続ける。

急オペの赤ランプが光る。 すると直ぐに基地の専属医と看護婦がやって来てシンヤを連れて緊

セイバー 別の部屋で変身を解いてシンヤほどで無いが未だ意識

が無い。

リーネ

「芳佳ちゃん 元気を出して。

美緒

「そうだぞ宮藤!アイツがこのまま死ぬタマな筈無いじゃないか!」

シャ

てくるさ。 「もしもアッチに行ってもゴダードのおっさんがまたこの世に連れ

気を落としている芳佳にウィッチーズ全員が慰めている。

数時間後手術室の赤ランプが消えた。

が尋ねる。 それを見た全員が立ち上がり開いた扉から姿を見せる医師にミーナ

ミーナ

「容態はどうですか?」

医師

後は、本人の気力と体力を信じるしか他にありません。 の夜明けまでです。 「まだ何とも言えません 我々も出来るだけの事をしました。 峠は、 明日

医師も困惑した状態だった。

その後

トゥルーデ

ミーナ 「ミーナ頼みがある。 相羽が起きるまで一緒に居たい。

意外な事にミーナも驚いた。

「トゥルーデ・

ミーナ

願いするわ。 「わかったわ。 毛布を持って来るから貴女は、 相羽さんの看病をお

ミーナは、 トゥ ルーデの部屋から毛布を取って来た。

見つめていた。 ミー ナ達が去っ た後トゥルーデは、 悲しい表情で意識の無い相羽を

「ううう!!

シンヤは、突然魘された。

「相羽・・・

トゥルーデは、 シンヤを心配そうに見て片手を握り祈った。

暗闇から己の手が見えるが・ 付いている。 ・その手には、 真っ赤な血がこびり

???

ジナなんだ。 わかっただろ?お前は、 結局ゼロと・ 刀夜と同じ穴のム

其処に居たのは、 自分の影が自分に言っている。

シンヤ

(違う!僕は、お前じゃない!!)

影のシンヤ

言う命を殺したじゃないか?」 「そうか?だが、お前は、 この世界に来るまでは沢山の多くの命と

影のシンヤがそう言うとシンヤの周りが沢山の死体の山が現れた。

シンヤ

(つ!!?)

己中心的に殺してきたのを。 シンヤは、 少なくても自覚があったラダムに洗脳されている間は自

そして多くの魂の叫び声が聞こえた。

シンヤ

(止めろ・・・止めてくれ・・・

シンヤは、 しゃがみ込むと目尻から涙が溢れてきた。

影のシンヤ

「わかっただろ?お前は俺で、 俺はお前何だよ!!」

影のシンヤは、不適に笑う。

「どうしたのシャーリー?」ルッキーニ

リビングで芳佳、シャーリー、 ルッキーニ、リーネがテーブルに置 いてあるシンヤの壊れたテッククリスタルを見つめていた。

芳 佳

「けど・ コレが直れないとシンヤさんは、 エビルに変身出来ない・

シャーリー

「そうだよな~~

・ん?まてよ!」

シャーリーは、何かに閃いた。

何かに閃いたシャーリーに気付いたルッキーニが聞く。

シャーリー

「これを持っていた奴なら解るんだよな。

「あ!」

芳 佳

「そうか!」

そして一同は、基地のとある隠れ家にやって来た。

ゴダード

ルッキーニ

「あっ!あんな所に坂本少佐のズボンが!」

[何処だ!?何処だ!?]

するとゴタードがやって来た。

シャーリー

「ゴダードのおっさん。 ちょっと聞きたい事があるんだけどさ。

ゴダード

[何だ?何だ?]

ゴダードもだまされた事に気付いた。

ゴダード

なるほど・ ・テッククリスタルが壊れたか

Tダードは、腕を組んで考えた。

ゴダード

成してテッカマンに変身するが・ [基本的に言えば、 テッククリスタルはクリスタルフィ 壊れれば修復は不可能だ。

芳佳達

「ええーーーー!?」

ゴダード

[まあまあ落ち着いて最後まで聞け。 だが、 壊れても機能までは失

われない。」

シャーリー

って事だな?」 つまり・ テッククリスタルを補助する装置があれば問題無い

シャーリーが単刀直入に言った。

ゴダード

[まあそう言う事だ・ さて・ 報酬として・ てあれ?]

何時の間にか芳佳達は、消えていた。

芳 佳

でもどうやってそんな装置を作るんですか?」

| | | |

それに相羽さんのって何だか別の文明ぽい気がしますし。

同が困っていると・・

美緒

「宮藤!お前に手紙が届いているぞ。

伝えた。 美緒が基地の入り口辺りに芳佳宛ての手紙が届いている事を芳佳に

芳佳

「あっ!はい!今行きます。

芳佳は、 一枚の封筒を見ると差出人が父からだった。

芳佳

「お父さんからだ!」

突然の父からの封筒に驚く芳佳は、 開けると一枚の設計図が入って

いた。

芳 佳

「これって・・・」

っ た。 芳佳には、 何が何だか解らなかったがリーネ達が待つリビングに行

「何が届いたの?」リーネ

芳 佳

「封筒だけど・・・」

「だけど?」ルッキーニ

芳佳は、みんなにその封筒の中身が設計図だと言う。

「何だろ?」ルッキーニ

「バイクの設計図みたいですね。

リーネ

「これって!?」シャーリー

シャーリーは、設計図の一部を見て驚いた。

芳 佳

「どうしたんですか?シャーリーさん?」

シャー リー

「此処見てみろよ!」

シャーリーが指差す場所を見るとそれは・・

「あ!」ルッキーニ

芳佳

「これって!?」

一同は、驚いた。

それは・・シンヤのテッククリスタルと同じ形をした部分を嵌める

場所が表示していた。

芳 佳

何故父がそんな事を知っていたのか解らなかった。

「けど・・どうしてお父さんがシンヤさんのテッククリスタルを?」

トゥルーデ

「相羽・・・・ (今の私が居るのはお前の御蔭だ・ ・だから私に出

来る事は・・

トゥルーデは、息を深く吸った。

次編のヒロイン

シンヤ

(何だ?この歌声は?)

シンヤは、その歌を聴いた瞬間に苦しみが軽くなった。

影のシンヤ 「ぐうう!!」

影のシンヤは、その歌声を聞くと苦しみだした。

シンヤ

から守ってみせる。それで償えないとしても!!) (だったら僕は、 償う!そしてこの世界をお前等ラダムやネウロイ

すると影のシンヤは、消えた。

ミユキ

[大丈夫。今のシンヤお兄ちゃんならきっと皆を笑顔って言う魔法

で救えるよ。]

すると光から己が殺したミユキが笑顔で答えた。

シンヤ

(ミユキ・・・)

ミユキ

[だから・・・頑張って!]

トゥルーデ

【相羽。】

笑顔のトゥルーデがシンヤの前に現れ真っ白に変わった。

シンヤ

「此処は・・?」

目が覚めると医務室のベッドに寝ていた。

「すぅ・・すぅ・・・」トゥルー デ

隣には、椅子に座って寝ているトゥルーデがいた。

シンヤは、そのままトゥルーデにお礼を言い別のベッドに寝かせた。 「 ありがとうトゥルー デ・・・」

シンヤ

シンヤは、再び眠りに入った。

シンヤ

「僕もまた少し寝るか。」

シャー リー 専用のガレージ。

シャーリー

「くっそ!この設計図の記号がわかんない!」

シャーリーは、頭を掻いて悩ませている。

芳佳

「他の国の文字でも無いし・・ ・どうなっているの?」

芳佳は、基地の書斎にあるありとあらゆる国の文字を調べたがそれ らしい物を見つけられなかった。

ルッキーニ

「あたし・・・頭が痛くなってきた・・・」

グロッキーになる一同。

カルロス

「ほう・・どうしたんじゃ?芳佳嬢ちゃん。

するとカルロスじいさんとルイスが何処から湧き出てきたのか現れ

芳佳

「カルロスおじいさん。そうだ!」

芳佳は、 カルロスじいさんにこの設計図を見せた。

カルロス

「なんじゃい?なんじゃい!?」

突然設計図を見せられて驚くカルロスじいさん。

芳佳

伝ってください。 「突然ですいませんが お願いです!このバイクを作るのを手

芳佳は、頭を下げた。

ルイス

「おいおい!頭を上げてくださいよ!宮藤軍曹!」

ルイスも戸惑った。

カルロス

「まぁまぁ落ち着け。 ワケを話してくれんか?」

芳佳達は、 カルロスとルイスに事の事情を話した。

カルロス

った!シンヤのアンちゃ を補助する為の装置かもしれんモンを作るのを手伝えか なるほど・ シンヤのアンちゃんが漆黒の魔神で・ んには色々礼が沢山あるからな。 その中の その変身 わか

つを返せると思えば軽いモンじゃ。」

ルイス

「まあ俺もシンヤの奴には、 礼がたっぷりとあるしな。

二人は、その設計図を拝借した。

カルロス

ルイス整備場から使える道具沢山持って来い。

ルイス

「あいあいさー!」

ルイスは、 整備場から使えそうな道具を山の様に持って来た。

シャーリー

「おいカルロスの爺さん。 アノ記号解るのか?」

カルロス

暗号じゃ。 「解るわい アレは、 昔芳佳の嬢ちゃんの親父さんと一緒に作った

芳 佳

「え!暗号って?」

カルロス

に難しくした物じゃ。 「まあ簡単に言えばストライカーなどの秘密がばれない様にする為

そう言うとカルロスじいさんは、 コツコツと作業をを進めて行く。

ミーナ

「そこで何をしているの!?」

そこへミーナが剣幕な表情で此方に来た。

カルロス

「何って・・皆で作業をしているんじゃか?」

ミーナ

「必要以上の事は、規則で制限しています。_

ルイス

「だからじゃないですか。」

ルイスがミー ナの前に入った。

ルイス

「規則って言うのがあるのは、 破る為にあるからでしょ?それじゃ

あ作業に戻ります。」

ミーナ

は無いのか?」え?」 「まだ話が!「だったらアンちゃんをシンヤを漆黒の魔神にしたく

カルロスじいさんの言葉でミーナの目の色が変わった。

カルロス

入ってこんな事をやっているだけじゃ。 「勘違いしちゃいかんのミーナ。儂は、 別に今アンタ達の為にやっ シンヤのアンちゃんが気に

ているわけじゃない。」

ックに入った。 カルロスは、 シンヤのテッククリスタルを嵌めてバイクの最終チェ

シャーリー

だけなんだよ。 「ミーナ中佐。 一人のシャー ロット・E・イェー ガーとして相羽の手助けをしたい あたしもそうだ。 今は、 ウィッチー ズとしてでなく

芳 佳

「私も!」

「私もです!」リーネ

「あたしだって!」ルッキーニ

た。 そう彼女達の心は、 シンヤの力になりたいと言う気持ちで一杯だっ

ミーナ

「・・・・わかったわ。でも!その分!」

ミーナは、厳しい表情に磨きがかかる。

ミーナ

「成功させてね。そして頑張ってください。

笑顔に変わった。

流石のミーナも骨が折れた。

カルロス

「よっし!頑張って完成させるぞ!」

ウィッチーズ

「はい!」

ルイス

「面白い夜になるな。

ルイスは、笑顔でウィッチーズをみる。

翌朝

カルロス

「ふう・・・完成かぁ・・・

カルロスじいさんは、 額に流す汗を手で拭くとようやく完成した。

芳 佳

「で・・出来た・・・」

芳佳達は、ホッとすると倒れた。

ルッキー ニ

「それよりも・ コイツの名前どうするの?」

芳 佳

「そ、そっか!」

シャーリー

「何か・・・良い名前あるかな?」

芳佳達は、名前を考えていると・・・

ハルトマン

「ヤッホー!皆お疲れ様

ハルトマンがバームクー ヘンと紅茶の入ったポットを持ってやって

来た。

芳 佳

「ハルトマン中尉・・・」

ハルトマン

「さっきミーナからコレを持って行く様に頼まれたんだけど・

あれ?完成したの!?」

ハルトマンは、芳佳たちに聞いた。

芳 佳

「はい・・・完成は、したんですけど・・・」

シャーリー

「肝心の名前が思いつかないんだよ・

ハルトマン

「グラニー何てどう?北欧の神話に出て来る馬の名前なんだけど?」

それを聞いた芳佳達は・・・

芳佳達は、その名前に文句は無かった。「グラニーか・・・良いじゃん。」シャーリー

グラニー が完成した4時間後・ ・芳佳達がガレージで寝ていると。

「ん?」トゥルーデ

寝ている事に驚く。 医務室で目覚めたトゥルーデは、周りを見ると何故か違うベッドで

そして隣のベッドでは、シンヤが気持ちよく寝ている。

トゥルーデ

「相羽が寝かせてくれたのか・・・

ベッドから起き上がるとシンヤが寝ているベッドに行く。

トゥルーデ

いかん!いかん!カールスラント軍人たる者が!!」 「ノノノノノ(相羽は、 寝ている時の寝顔が可愛いな・ あ!

と頭を抱える。

b u u u u u u u u u u u u u u u u u u u u u u u

トゥルーデ

「敵襲か!?」

トゥルー デは、ハンガー に向かう。

芳 佳

「警報!?」

「行きましょう!」

寝ていた芳佳達も起きてハンガー に向かった。

芳 佳

ラニーを見せてください。 「カルロスお爺さん!シンヤさんがもしも起きたらコッチに来てグ

「わかった!シンヤのアンちゃんに伝える!」カルロス

カルロスは、約束した。

ハンガーからストライカーを履いた芳佳達は、 ナの後に続いた。 上空にいる美緒とミ

ミーナ

がは、 バー海峡から来てロンドンに向かっています。

美緒

マンが先行して発見しだい攻撃を開始!ほかの者は援護にまわれ!」 「 よっ しールッキー ニとシャーリー !そしてバルクホルンとハルト

ウィッチーズ

了解!」

シンヤ

「あれ?トゥルーデ?」

芳佳達が出て30分後にシンヤは、目を覚ました。

ルイス

「お!いたいた!おーい!シンヤ!」

廊下に出るとルイスが駆け寄る。

「ルイス?みんなは?」シンヤ

「 ああ!ウィッチー ズは、ルイス て言うんで向かったぜ。 みんなドーバー海峡にネウロイが出たっ

シンヤ 「そうか・・

「来いよ!」

ルイスは、シンヤの手を引っ張った。

シンヤ

「来いって?どうしたの?」

ルイス 「良いから来いよ!お前に見せたい物があるんだよ。

「見せたい物?」シンヤ

シンヤは、ルイスに連れられてシャーリーのガレージに行った。

芳佳達は、目的の地点に到着した。

美緒

「敵発見!」

美緒が眼帯を外しネウロイを発見した。

そして今回のネウロイは、巨大なキューブの形だった。

ミーナ

「 バルクホルン隊!イェーガー 隊!突n「待って!」

様子のおかしい美緒の言葉にミーナは、黙る。

美緒

らく軍の戦艦でない!これは!?民間人の乗った非難船だ!」 いかん!近くに多くの人々の乗っている船が一隻ある。 恐

美緒が魔眼で更に確認する。

ミーナ

ガー隊!攻撃開始!他は、 「ブリタニアに逃げてきた非難民の船ね。 船の護衛に!」 バルクホルン隊!イェー

「了解!」

た。 シャ のガレージにたどり着くとルイスに事の事情を聞かされ

シンヤ

「グラニー?コレでエビルに変身できるのかい?」

聞き驚いた。 シンヤは、馬とバイクを併せ持ったバイクを見てまた変身できると

カルロス

「ああ!じゃが今は変身する事だけ考えるんじゃ。

ルイス

「安心して戦って来い!」

カルロスとルイスは、 ないと思った。 シンヤがこの世界の希望と言うものかもしれ

シンヤ

カルロスじいさん・・・ルイス。」

カルロス/ルイス

?

「ありがとう。シンヤ

笑顔で言う。

「!?これは!?」シンヤ

シンヤは、グラニーのボディーの横にとある文字が書かれていた。

【その力多くの人をまもるために】と書かれてあった。

カルロス

らダンナの好きで何時も口癖だった言葉をそのまま刻み込んだんじ 「ソイツは、 宮藤のダンナの想いが込められたモンじゃ

に込められた希望と平和の意味を改めて噛み締めた。 シンヤは、 カルロスじいさんが刻み込んだ文字を見てこのグラニー

シンヤ

「グラニー!テックセッター!!!」

シンヤは、グラニーに跨る。

ピカッ!

グラニー の馬頭の部分が光る。

グラニー

"ALL RIGHT!!

グラニーは、シンヤを乗せたまま滑走路を加速しながらクリスタル

フィールドが形成した。

がった。 頭部は、 漆黒のヘルメットの紅のバイザーそして漆黒の鎧が出来上

エビル

『テッカマンエビル!!』

空へ飛びネウロイと戦っているウィッチーズ達の元に急ぐ。 エビルは、 アクセルを回しながらシフトダウンをする左足を押すと

ネウロイは、分裂しレーザーで攻撃した。

手く戦えない。 普通ならスコアを稼げるが今回は、 守らなくてはなら無い状況で上

トゥルーデ

「くっそ!何機落としたんだ!?」

ハルトマン

「船を守るのも正直きついな・・・」

攻撃をしているトゥルーデ達にも疲れが出始めた。

美緒

「周りをシー ルドで守れ! 絶対に!船を守るんだ!」

芳佳 / リーネ / ペリーヌ

「了解!」

限界に近づいている。 他のウィッ チは、 シー ルドで船を守っているがやはり体力も魔力も

「 芳 ? 佳

芳佳は、 よく見ると小さな少女が外に出ていた。

芳 佳

「ダメ!来ちゃだめええええぇ!!」

ネウロイのレーザーがその少女に向かって放たれた。

すると紅い光が少女の前に立ち塞いだ。

エビル

『うおおおおおおおお・!!』

エビルだった。

そしてそのままテックランサーを回転させながらレーザーを防いだ。

芳佳

「シンヤさん・・・」

芳佳は、 シンヤがやっとエビルに変身して生きていると解り安心し

た。

少女

· · · · · ·

少女は、 いる事に気付く。 何時の間にかグラニー に跨いだエビルに片手で抱えられて

エビル

『さあ早く中に入って居るんだ。』

行 く。 エビルは、 優しく少女に言うとグラニー から降して船の中に入って

美緒

「相羽!遅かったな!正直今厳しい状況だったんだ。

エビル

『色々心配かけてごめん美緒・・・みんな。』

エビルは、そのままグラニーを上空に急上昇した。

トゥルーデ

「あれがグラニーか?」

トゥルーデ達もエビルに気付く。

エビル

ムから多くの人を助ける為に!!そして人々の国を取り戻す為に! 『そう!僕は、 この機動馬グラニー により蘇っ た!ネウロイとラダ

_!

かる。 エビルの目が緑に光り分裂したネウロイに向かいレー ザーが襲い掛

『僕は死なない!!』

エビル

守る。 エビルは、 船に当たるレーザーを的確に発見してテックランサーで

エビル

『グラニー !クラッシュイントルゥゥゥゥゥドォオオオオオ

グラニー

"ALL RIGHT!!

た馬脚が動き初め足裏から魔方陣が動く度に出た。 エビルの装甲がスリムになるとグラニーの前と後ろのタイヤに付い

そうまるで空を走っている様に。

消滅させた。 そのスピードは、 もはや光速を超えその衝撃波がネウロイを着々と

『これが最後か!』エビル

その最後のネウロイこそ本体だった。

出口が赤く輝き、そこに強大なエネルギーを持つ光をネウロイが来 るのを最初から予想していたかの様に収束していた。 エビルの左右胸部に埋め込まれているレンズ部分..... ボルテッカ射

『ボルテッカアアアアアアア!!エビル

ドカアアアアアアアンンン!!

エビルからボルテッカがネウロイに向かって放出される。

コアを持つネウロイは、 消滅すると他のネウロイも消滅した。

「やったーーーーーー!!!!

人々

少女

「お姉さん、お姉さん。」

先程船の中に入っていた少女が芳佳に訊ねる。

芳 佳

「 何 ?」

少女

「あの人は、何だったの?」

芳 佳

「人々を守る為に来た空の騎士テッカマンエビルだよ。

芳佳は、笑顔で答えた。

芳 佳

「シンヤさぁぁぁぁぁんん!!」

リーネ

「よかつたあああああああ!!

ルッキーニ

「うわああああんんん!!!」

サーニャ

「 · · · · · · · · · . . .

芳佳達は、シンヤに抱きついて泣いた、

シンヤ

「本当にごめんね。

シンヤの表情もヤレヤレと言う表情で困っていた。

美緒

「あっはっはっはっはっはっはっはっ!!そうか!良かった!

良かった!」

美緒にも笑顔が戻る。

シャーリー

おい!相羽!お前風呂に入っていないだろ?」

「臭イゾ。」

「ばっちいよ。」ハルトマン

三人は、シンヤに向かって何かを考えていた。

ガシッ!

「え?そうかい?」

シンヤ

シャーリーがシンヤの肩を掴んだ。

シャーリー

「さあ風呂でも入いろう!」

突然シンヤも困っている。

「いや!いいよ!」シンヤ

「遠慮スルナヨ。」エイラ

「入ろう!入ろう!!」ハルトマン

何故か縄でシンヤを縛るエイラとハルトマンそしてルッキー

シンヤ

「助けてええええええええ!!!」

シンヤの喚き声が浴場に響いた頃

トゥルーデ

「相羽は?」

トイレで席を外していたトゥルーデがリビングに来ていた。

リーネ

「あ・ れてかれて浴場にいると思いますよ・ あの・ 相羽さんならシャ さん達に無理やり連

トゥルーデ

「何いいいいいい!!?」

トゥルー デが向かった時には、もう遅かった。

鼻血を出して再び瀕死の重傷だった。 浴場では、 まだ完治していないシンヤがシャ IJ 達のアレを見て

トゥルーデ

かあああああ 貴様等で あ ああ まだ病み上がりの人間に何をしている

その後再びゴター ドに殴られて現世に蘇ってきた。

第十一話:機動馬グラニー 発進 (後書き)

ルッキーニ

隠れ家を作ろうと思ったのに真っ暗だよ~~~~ 「あれ此処は、何処だろう?ゴタードのおっちゃんと一緒に新しい

コタード

[次回(空の騎士テッカマンエビル)第十二話(消えたルッキーニ

L

第十二話:消えたルッキーニ

ミーナ

「宮藤さん、 相羽さん。 ルッキーニさん見なかったかしら?」

がミーティングルームで寛いでいるところにミーナがやって来た。 とある訓練を終えた午後に芳佳、 リーネ、 シンヤ、 そしてペリーヌ

芳佳

「うぐんっ!ル、 ルッキーニちゃんですか?いいえ。

答える。 芳佳は、 食べかけのおはぎを呑み込み、 憂い顔のミーナに向かって

シンヤ

「どうかしたのかい?」

ミーナ

「それが・ 昨日の夜から見かけないのよ。

のこと。 出撃以外は、 ほぼ好きに過ごしていいことになっているルッキーニ

だが。 基地のあちこちに作った隠れ家で寝ていて、 見かけない事も多いの

リーネ

確か お昼も、 朝ごはんにも顔をだしてませんね。

記憶を辿るリーネ。

シンヤ

「だったらゴダードに聞けば良いんじゃない?」

ミーナ

「それが・ ゴダードさんも・ 居ないのよ。

ペリーヌ

んて・ 二さんと何時も私達にセクハラを計画するゴダードさんも居ないな 「それは変ですわねアノ意地汚さが軍服を着て歩いているルッキー

芳佳

「ウウ、酷い言われよう・・・」

シンヤ

だよ。 「そうだよ、 セクハラの塊のゴダー ドは兎も角ルッキーニは良い子

リーネ

(相羽さん・ いくらなんでもゴダードさん可哀想ですよ・

リーネは、そう思う。

ミーナ

「兎も角、 見つけたら私に教えてちょうだいね。 伝言事項があるの。

_

ミーナは、 四人にそう告げるとミーティング・ルー ムから出て行っ

ペリーヌ

おけばいいんですわ。 「どうせ隠れ家とやらでグースカ寝ているんでしょうから、 ほって

上がった。 ペリーヌは、 ふんと鼻を鳴らすと、手にしていた雑誌を置いて立ち

ペリーヌ

「いいですこと、 私は、 部屋に戻るんですのよ!」

ペリー した。 ヌは扉ところで念押ししてからミーティング・ルームを後に

シンヤ

・・・あれ?あっちは外?」

部屋に戻るなら階段を上がるが方向が違う。

シンヤ

「探しに行ったんだね?」

芳 佳

「ええ。」

リーネ

「た、たぶん。」

ヌのあまりの演技力の無さに顔を見合わせる三人。

芳 佳

「私達も行こう。

「うん。」

「そうだね。」

三人は、頷き合い立ち上がった。

芳 佳

「バルクホルンさん~、ハルトマンさん~。

た。 芳佳達は、廊下に出たところで風呂から戻ってきた二人に出くわし

トゥルーデ

「おお、相羽に宮藤とリーネか、どうしたんだ?」

ぬれた髪が艶っぽいトゥルーデは尋ねる。

芳 佳

「ルッキーニちゃんを見ませんでしたか?」

トゥルーデ

お前はどうだ?」 「いけ。・・ ・そういえば、今日は朝から見かけていないな。

トゥルーデは、ハルトマンを振り返った。

ハルトマン

「見てないよ。 隠れ家に居るんじゃないか?」

上気した肌でご機嫌な様子のハルトマン。

シンヤ

ないんだよ。 「それがね・ ・その隠れ家がいくつもあって、どれに居るか解ら

トゥルーデ

・・・大変そうだな。 捜すなら、 私達も手伝おう。

ハルトマン

「え~~~・・・」

トゥルーデの申し出に、 ハルトマンは顔をしかめた。

芳 佳

「そ、そんな、悪いですよ!」

顔の前で手を振る芳佳。

ハルトマン

「そ~だ、そ~だ!」

ハルトマンは、芳佳の背中に回ると、断固支持を表明する。

トゥルーデ

るなら、少しは人様の役に立て」 「気にするな、同じ隊の仲間だろう?ほら、 貴様も寝ている暇があ

シンヤ

「いいじゃないか寝てばかり居るよりは?」

トゥルーデとシンヤは、がっちりとハルトマンの腕を掴んだ。

リーネ

ますから、お二人は二階をお願いします。 「ええっと、じゃあ私と芳佳ちゃんと相羽さんはハンガーを見て来

リーネは、頭を下げる。

トゥルーデ

ああ、任された。」

快く頷いたトゥルーデは、 ハルトマンを引っ立てて階段を上る。

トゥルーデ

「ほら、きりきり働かんか!」

シンヤ

「頑張ってね~!エーリカ~~!

一階からシンヤが、 ハルトマンにエールを送った。

ハルトマン

「横暴だ~!湯冷めするよ~~ !湯冷め!

ハルトマンの抗議は完全に聞き流された。

美緒

・・・・何だか、大事になってきたな。_

ハンガーに向かって走って行くシンヤ達を、 た美緒が呟く。 廊下の窓から見下ろし

ミーナ

たんだけど・ 「昨日のくしゃ みをしていたから、 あの子に薬を渡そうと思ってい

細かく言わなかった事に後悔するミーナ。

美緒

「だが、 を脱走した経験があるからな。 ルッキー ニは、 ロマーニャ時代にも、 母親に会いたくて軍

美緒は、 ルッキー 二に関する軍の記録を思い出す。

ミーナ

面倒を見てくれる様になってからは、 「今のあの子は、 それにゴダードさんが来てから益々輝いているわよ。 そんな事しないわ。 ずいぶんと落ち着いているも 特にシャーリーさんが何とか

美緒

「変な道に入らなければ良いが・・・」

ミーナ

「そうね・・・」

美緒

が司令部に知られたら・ 「実際に脱走でないにしても、 だ。 隊員が勝手に消えた、 なんて事

ミーナ

一部の人間が騒ぎ立てるかも知れないわね。

美緒

「マロニー大将一派だろう?」

ミーナ

「下手するとウィッチー ズの存廃まで話を持っていくかも知れない

美緒

「とにかく、 急いでルッキーニを見つける事だな。

ミーナ

「そうね・・どこで誰の目が光っているか、 分からないもの。

二人は、 顔を見合わせるとシンヤ達に手を貸す為に階段に向かった。

の様な目で二人を睨んだ。 トゥルーデ達が扉をノックして入るとエイラはご主人様を守る番犬

る サー ニャは、 部屋を間違えてしまった様でエイラのベッドで寝てい

そしてその更に奥にはグルグル巻きされお札を貼られ身動き出来な いゴダードの姿がいた。

· ハルトマン/トゥルー デ

.

二人は、ゴダードに対して軽蔑の目を向けた。

ゴダード

[な!なんだ!儂に対するその目は!?]

エイラ

- 大尉!聞イテクレ!オッサンガ!!

事の次第を二人に説明するエイラ。

それは、昨晩の夜の出来事だった。

挙句には懐中電灯を持って何処かに行った。 エイラの部屋にルッキー ニとゴダー ドがやっ て来てさんざん遊んだ

来た時だった。 それから数時間後サーニャが任務から帰り間違えてエイラの部屋に

コダード

グフフフフ んな事が出来る様になぁ 今ならサ <u>ー</u>ヤ 嬢ちや んにあ~ んな事やこ

た。 突如ゴダー ドが寝ているサーニャにエロい事をしようとした時だっ

エイラ

「オッサン・ ・サーニャニ何ヤロウトシッテンダ?」

恐る恐るエイラの方を振り向いた。 突如ゴダードの背後からエイラが現れた事に今気付いたゴダー ドは

エイラ

「覚悟DEKITERUDAROUNA?」

ゴダード

[X00000000!!!!]

美緒とミーナから貰った対ゴダード用お札付きの縄で捕獲した。 と言う事で散々エイラにOSIOKIされたゴダー ドは、 シンヤと

トゥルーデ

「懐中電灯か・・・

トゥルーデは、考え込む。

トゥルーデ

「これは何かの手がかりになるかもな。」

ハルトマン

「そうかもな・・・」

そう言ってゴダードを軽蔑するハルトマン。

トゥルーデ

「とにかく相羽に連絡しよう。_

ニャの目がパッチリ目を開いた。 トゥルーデは、 シンヤの名を出した瞬間今の今まで眠っていたサー

サーニャ

・・・・・相羽さんがどうしたの?」

サーニャは、起き上がりエイラの顔を見る。

エイラ

ンダカラ、寝テテイイッテ!」 「ア〜ッ!ナ、何デモナインダ、 何デモ!サーニャハ、疲レテイル

寝かしいつけようとするエイラ。

そこに!

ハルトマン

だ。 「いや〜〜、 ルッキー 二が行方不明でさぁ。 相羽達とさがしてるん

ハルトマンは、 笑ながら余計な事をサーニャに告げた。

サーニャ

・・・・・・私も探します。

サーニャは、 ベッドから起き上がり着替え始めた。

エイラ

ターワカッタ、 サ サ サ_、 私モ捜スカラ!」 サーニャ !ミンナの前デ脱グンジャナイ!ワ~カッ

の頭から毛布を被せる。 エイラは、 真っ赤な顔をしてスッポンポンになろうとするサーニャ

ようと入れようとしていた。 一方、ハンガーではペリーヌがそれとなくシャー に探りを入れ

「どうしたんだ?」シャーリー

たオイルを手の甲で拭い、さっきから自分の周りをグルグル回って 魔道エンジンの傾斜配分を微調整していたシャーリーは、 いるペリーヌに声をかける。 頬につい

ベリーヌ

`い、いえ、別に。・・・ただの散歩ですわ。」

からかわれると思いペリーヌはなかなか切り出せない。 ルッキーニの事を心配している素振りなど見せようものなら、 絶対

「 きっかっ シャーリー

もしかして胸を大きくする方法、 聞きに来た?」

ペリーヌ

「な訳

ありますかあああああ!!.

結局からかわれるペリーヌ。

ペリーヌ

「そ、そう言えば。.

ようやく、 話をルッキーニに持っていくペリーヌ。

ペリーヌ

今日は、 そこら辺の梁に引っかかってませんの、 例の黒猫娘。

実際は、 く黒豹ですが・ ルッキーニが飛行時に出す使い魔の耳と尻尾は黒猫じゃな

シャーリー

緒にカナズチとか板とか、 ん?ルッキーニか?そういや、 後ロープを持って走り回っていたけど。 昨日の夜、 ゴダードのおっさんと

シャーリーは、眉をひそめる。

シャーリー

「あれから見ていないな。

ペリーヌ

「カナズチと板とロープですか・・・

ペリー ヌの頭の中では大体が隠れ家を作ろうとしていたと言う結論

になった。

-た あ ? あ シャー

なあ?あいつの事心配してくれているのか?」

「ベ、ベ、ベ、

ので、 べ、べ、別に心配なんか!!だた、ミーナ中佐が探していた もしかしたらこっちに、 なんて思っただけですわ。

シャーリー

· ・・・ありがとな。

シャーリーは、笑顔で言った。

シャーリー

「けど、全然見つからないのか?」

ペリーヌ

「まぁよくある事ですけど・・ あの子らくしないとおもいません?」 ・それでも朝食や昼食を抜くなんて

ペリーヌ

「ど、何処に

行くんですの!?」

シャーリー

「近くの村!村の子供達と、中良いだろ?村まで遊びに行っている

かもしれない!」

バイクのエンジンをふかしながら、シャーリー Ιţ 答える。

ペリーヌ

「お供しますわ。.

少し躊躇った後にシャーリーの後ろに座った。

ペリーヌ

「二人で探した方が早いでしょ

′۔

シンヤ

「うん、 隠れ家を作る道具を持っていたんだね。解ったよ。」

ィング・ルームに戻った時だった。村に向かう途中ペリーヌからの連絡を受けたのはシンヤ達がミーテ

リーネ

芳佳ちゃん相羽さん。 「バルクホルンさん達は、 懐中電灯を持って行ったって言ったよね

芳 佳

「う~ん暗い場所って事だよね。」

シンヤ

「それで隠れ家を作れる場所って

· ·

三人

地下!」

三人は、顔を見合わせ同時に言った。

芳 佳 「あとは、こっちの方だけだよね。

いくつかの地下の部屋を見て回った後。

シンヤ達は、鉄格子のついた扉の前に立っていた。

芳 佳

「ここ、何だろう?」

扉を前に、唾を飲み込む芳佳とリーネ。

るූ 黒く重そうな鋼鉄の扉には、『危険!立ち入り禁止』の貼り紙があ

リーネ

わからないけど・ ・あまり入りたくない様な。

シンヤ

いるのかも知れない!」 「待てよ!もしかしたらルッキーニは、この中で出られなくなって

意味以上の意味はないが、 普通の人間なら『立ち入り禁止』と言う貼り紙にはその言葉の持つ かれているのと同じだった。 ルッキーニにとっては『熱烈歓迎』と書

シンヤは、ドアノブに手をかける。

カチャ

以外と簡単に扉は開いた。

「 音 ト よ

「暗いな」

「暗いですね。

芳佳

「うん。

部屋に入って照明を探す三人。

明かりは裸電球が一つ。

シンヤは、それをつけ、周囲を見渡す。

すると・・・

芳 佳

「シンヤさん、リーネちゃん、これ・・・

た。 芳佳は、部屋の奥の床に板切れとロー プ、そしてカナズチを発見し

そして半完成の木製の台の様な物も。

ן. ק

「これって芳佳ちゃん、相羽さん?」

芳 佳

「作りかけの隠れ家だよ。.

シンヤ

「ルッキーニが作っていたんだよ。」

三人は、さらに部屋の中を捜す。

芳佳

「ルッキーニちゃ~~~ん

「ルッ-

「ルッキーニちゃ~~~ん.

シンヤ

「ルッキーニ~~~!!

呼んでも返事が無い。

リーネ

穴は、 リーネが木箱の影の壁の所に、ポッカリと開いた穴を見つけた。 床の途中まで広がっていて、ちょうど人が通れる大きさだ。

芳佳

「この奥かな?」

リーネ

「行ってみる?」

シンヤ

「待つんだ。 まずトゥルー デ達に連絡してから・

芳佳がインカムでみんなに状況を伝えようとしたその時。

ガラガラーー

足元が崩れ、 シンヤと芳佳の姿は穴の奥に消えた。

「芳佳ちゃ ん!!相羽さ~

リーネは、 急いでインカムで連絡した。

芳 佳

「痛たたたた~~~」

気付くと芳佳は、真っ暗な場所にいた。

床は平らで空気は暖かい。

それと微かに何処からか水の流れる音が聞こえる。

芳 佳

「シンヤさん、何処ですか?」

シンヤ

「此処だよ芳佳。

直ぐ近くで声。

芳佳は、手探りでシンヤを探すと芳佳の股間から聞こえて来た。

そうシンヤは、芳佳の股間の真下にいた。

芳佳

「きゃあああああ!!すいません!!」

芳佳は、シンヤの手を探し見つけると同時に掴む。

止めた。 シンヤは、 無論のことながらポケットからテッシュを出して鼻血を

芳 佳

「私達、落つこたんですね。」

「うん」

「うん。 でも怪我はしていないよ。それほど高くなかったみたいだ

幸い芳佳の治癒魔法の出番は、無さそうだ。

芳 佳

「とにかく、出口を探しましょう!」

と進もうとする芳佳を止めるシンヤ。

シンヤ

よ!」 「待つんだ。目が慣れるまで待たないとまた変な所に落ちてしまう

芳 佳

「は、はい!」

二人は、目が慣れるまで待つことにした。

しかし

シンヤ

「目・・・全然慣れないね。」

芳 佳

っぱい。 」

シンヤ

「ブルーベリー、食べ続ければ良かったね。

芳 佳

っ は い。

どれくらいの時間が経過したんだろう?二人の目はなかなか暗闇に

慣れなかった。

このままでは、埒が明かない。

ようやく決心した芳佳達は、再び動き出しそうになった、 その時。

ガゴンッ!

岩が硬い床に落ちる音だった。

芳佳

「何かいますよシンヤさん。.

シンヤ

「熊・・・いや狼とかかな?」

芳良佳

「狼!?」

シンヤ

「芳佳!僕から離れないで!!」

シンヤは、空手の構えを取る。

??

「狼じゃないよ~~・・・

二人の目の前から心細い声がした。

シンヤ

「ってルッキーニかい!?」

シンヤは、直ぐさま構えを解いた。

ルッキーニ

「 芳佳~~ シンヤ~~・・・

確かにルッキーニの声だった。

芳 佳

「ど、ど、ど、何処~~~~!?」

い た。 芳佳達は、 声を頼りに何とか手探りにルッキーニの所までたどり着

シンヤ

「どうしたの!?びっしょりじゃないか?」

た。 シンヤは、 触って見てルッキーニの髪がずぶ濡れである事に気付い

芳 佳

「とにかく、こんな真っ暗じゃ。」

シンヤ

「そうだ!ルッキーニ、エイラから懐中電灯借りただろう?」

「そだった!」

ルッキー二は袋から懐中電灯を芳佳に手渡す。

小さな光が三人を照らし出した。

「にゃ~~~ ん!!怖かったよ~~~~

ルッキーニ

とシンヤに抱きつくルッキーニ。

シンヤ

「どうしてこんな場所に転がり込んだんだい?」

シンヤは、優しく頭を撫でながら尋ねる。

ルッキーニ

いきなり落っこちたの。 「んっとね、 地下室にね新しい隠れ家を作ろうと思っていたらね、

「ああ、なるほど」シンヤ

い出す。 シンヤは、 地下室の床に開いていた穴と作りかけの隠れ家の事を思

芳 佳

「とりあえずここ出ましょう。」

そう言って懐中電灯で周囲を照らして見た芳佳は息を呑んだ。

芳佳

「こ、これなに!」

女神の様な大理石の像。

古代戦争を描いたレリーフ。

壮麗な白い柱。

そして滾々と湧き上がる湯を湛えるプール。

さきほど暖かかったのは、 ているのだ。 おそらくこのお湯のせい。 温泉が湧き出

芳佳

遺跡かな?もし、 どうしようシンヤさん!私達の名前が遺跡についたら!?」 そうだとしたら・ ・歴史的大発見!?ど、

シンヤ

設だから新聞に載るのもないよ。 「それは、 無いよ。 第一最初に発見したのはルッキー 二だし軍の施

シンヤは、 苦笑いするしかない。

その後リーネの連絡で美緒達が救助に来た時には一同も驚いた。

そしてその後の3日間は、 た罰で温泉の快適にする工事を一人でやらした。 三人の監視の元め ゴダー ドにルッキー 二を放ったらかしし

「ゴダー

シンヤ

何処に行くんだい!?」

美緒

「キリキリ働かんか!」

ミーナ

「まだまだ工事をしてもらう所がありますよ!」

流石のゴダードもあの三人には逃げられなかった。

ゴダード

[早くおわせたいな・

美緒

「ルッキーニの消えたお陰で、レクリエーション施設が一つ増えた

湯に胸まで身体を沈めた美緒は、半分感心と半分咎める口調で言う。

「えへへへ~、もっと褒めて褒めて!」ルッキーニ

ペリーヌ

「褒めていませんわ。皮肉ですわ皮肉。

さりげなく美緒の近くに位置取ったペリーヌは、 眼鏡についた湯気

「ったく、これでは、少佐が見えませんわ。

美緒

「ん?どうしたペリーヌ?」

振り返る美緒。

ペリーヌ

ヮ゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙ ぁ ぁੑ ぁ あの 大したことでは・ あ~~っ!」

眼鏡がお湯の中に落とす。

ペリーヌ

「眼鏡、眼鏡!」

ペリーヌは、眼鏡を捜す。

トゥルーデ

「この温泉には、何か効能はあるのか?」

トゥルー デがミー ナに尋ねる。

シャーリー/ルッキーニ

「は~い!」

ミーナに代わって答えたのは、 シャー とルッキーニだ。

「泉質は?」ルッキーニ

「含鉄泉~」シャーリー

シャーリー ţ 何故か使い魔のウサギ耳を出して答える。

「効能は~~~?」ルッキーニ

シャーリー

に効果あります。 「保湿効果が高く~、 貧血、冷え性、 筋肉痛やそして精力回復など

トゥルーデ

た・・たのしそうだなお前達!!!

何故か真っ赤になるトゥルーデ。

芳 佳

だよね。 「でも、 ルッキーニちゃんは、 本当にシャーリーさんの事が大好き

シャ ルッキー 二を見てクスリと笑った。 ーリーの二つの胸に頭を挟み、 手足をバシャバシャさせている

ルッキー ニ

「うん!面白いし、 おっぱい大きくてマーマみたいだから。

ルッキーニは、 顔を輝かせ両手を大きく広げた。

シャーリー

「マ、マ~マか・・・

16歳のシャーリーは、少し複雑な表情になる。

ルッキーニ

とか、 ヮ゙ でも芳佳の事も大好きだよ。 扶桑のお料理も美味しいし。 ぁ パスタみたいなあの、 胸は残念賞だけど~~」 うろん?

芳佳

「残念賞・・・・」

リーネ

「じゃ、じゃあ私は?」

ルッキーニ

「美味しいお菓子作ってくれるからだ~い好き!おっぱいもおっき

ן ן ן

リーネ

・・・・結局・・・そこなんですか」

ルッキーニ

「あとあと」

ルッキーニは、 トゥルーデとハルトマンの方を見る。

ルッキー ニ

んみたいで面白いから好き!」 「バルクホルン大尉は、 前は固苦しかったけど~~、 最近はお姉さ

トゥルーデ

「お、面白い?」

ルッキーニ

く寝てられるから、 「ハルトマン中尉は~~すっごく部屋を散らかしたり、 尊敬しちゃう。 すっごく長

ハルトマン

「いや~照れるな~~

トゥルーデ

タオルをお湯につけるな!」 「つけ上がるな!ていうか貴様、 人間として駄目だろうが!それに

やはりトゥルーデは、面白い。

「それに~。.

ルッキーニは、ペリー ヌを見てニヤリとする。

ルッキー ニ

「ペリーヌは、 ぺったんこでも、 からかうと面白いし~。

ペリーヌ

す様な言い方は! からかうですって!な、 ・って、 な、 な そもそも貴方にぺたんこと言われ 何ですの!一段高みから見下ろ

たくありません!」

エイラ

「オイ、私トサーニャドウナンダ?」

と、身を乗り出したのは、エイラ。

ルッキーニ

たい。 りお話出来ないけど、 「んと、さ~にゃんは、 あたしと違って、 あたしの起きる時間に寝ているからあんま 肌が真っ白で~、 お姫様見

エイラ

「ウンウン、ソウダロウ。

ルッキーニ

らないタロッ 「エイラは、 ト占いも面白いよ~」 変な物が部屋にた~くさんあって面白いし、 全然当た

エイラ

「当タラナイッテ言ウナ~~!!」

ルッキー ニ

「坂本少佐は、 怖い時もあるけど・ 優しいから好き!」

美緒

ιζί 手は抜かんがな。 優しいか。 まあそう言われると悪い気はしない。 だが訓練の

美緒は、微笑む。

ルッキー ニ

と妨害活動なら何でもして良いって言ってくれたから大好き!」 「ミーナ隊長は、 隠れ家を作って良いって言ってくれて、 破壊工作

ミーナ

行方不明になるのも、 なるべくやめてね。

ミーナの笑顔が少し引きずった。

ルッキーニ

ちゃん見たいだから好き。あとあと、あそこも一等賞物だよ。 「それにシンヤも大好きだよ、私と接してくれる時は、 まるでお兄

シャーリー

「確かにな」

シャーリーもニヤリと笑いトゥルーデが睨む。

ルッキー ニ

らだ~い好き!」 「ゴダードのおっちゃんも色々な遊びやイタズラを教えてくれるか

それを聞いた美緒とミーナは、苦笑した。

ルッキーニ

「だからだから~!」

にざぶ~ ルッキーニは、 んっと飛び込んだ。 女神エリス= ミネルヴァの像に駆け上がると、 お湯

「み~んな、だ~い好きだよ!」ルッキーニ

みんなを愛しみんなに愛される。

それがフランチェスカ・ルッキー 二である。

第十二話:消えたルッキーニ (後書き)

新田

三話 神聖なイベント。 団に案内する日でもある。 「お盆それは、 あの世にいる幽霊がこの世に帰り子孫や家族に会う そしてシンヤくんの家族を第501統合戦闘航空 お盆でシンヤの家族がやって来た!?」 次回 空の騎士テッカマンエビル

今日は、お盆。

第 5 0 ルロスとルイスの二人だけだった。 1統合戦闘航空団の整備兵の大半が実家に帰り今整備兵はカ

る ちなみにウィッチー ズは、 いつでも戦闘体制が出来る様に基地にい

???

[此処がシンヤのいる職場か・・・

ミユキ

「うん、 んに美人の彼女が出来ているなんて。 私も新田さん達と一緒に来た時驚いたものシンヤお兄ちゃ

た。 そう言いながら相羽ミユキは、 新田シンヤと新田マリアー緒に頷い

新田

うの火鳥さんと一緒にこんなにも最高評議会の連中を憎く思って息 子達を思って [シンヤくんには、 本当に感謝していますよ。 飛鳥と蓮の為に向こ

マリア

[本当ね!]

マリアも涙目になる。

??

[泣かないで下さいマリアさん。]

???

私達夫婦もシンヤがこんなにも立派な人間なって誇れますよ。

マリア

[相羽孝三さん。 奥さん。

マリアは、シンヤの両親に励まされた。

???

しかし、シンヤは、何処にいるんだか。」

???

`私も早く義理の妹顔を見たいわケンゴ。」

ケンゴ

ツは、忙しいとゴダードが言っていただろ。] [そう急ぐなフォン。 シンヤにも色々やることがあるんだぞ?アイ

そう言いながら捜す相羽ケンゴと相羽フォン。

ゴダード

[いたいた新田さん達に相羽博士。

何処からかゴダードがやって来た。

新田

[ゴダー ドさん、 先日はお世話になりました。]

新田夫婦は、ゴダードに挨拶した。

コタード

ンヤ坊にあわせます。] [いやいや儂は、ただ当然の事をしているだけじゃよ。今直ぐにシ

ゴダードは、そのまま一同をミーティング・ルームに移動する。

「これでよしおはぎが出来たね。シンヤ

芳佳

「そうですねシンヤさん。_

リーネ

「これが扶桑のお菓子?」

リーネは、おはぎを珍しく見る。

美緒

「おっ!もう出来たか。

美緒がやって来た。

シンヤ

作って手が離せないから。 「美緒、悪いけどテーブル片付けてくれないかな?僕たちおはぎを

美緒

「ああ、どころで相羽?」

シンヤ

「 何 ?」

美 緒

「実はゴダード殿が妙な客人達を連れて来たのだが・

シンヤ

「妙な客人達?」

て来た。 シンヤは、 意味が分からなかったがしばらくするとゴダー ドがやっ

ゴダード

[シンヤ坊。みんなを連れて来たぞ。]

すると新田夫婦と相羽一家がやって来た。

新田

[シンヤくん、芳佳ちゃんお久しぶりだね。]

新田夫婦がシンヤと芳佳に挨拶をした。

ラシンヤ

「新田さん、奥さんご無沙汰しております。.

芳 佳

「新田さん、マリアさんお久しぶりです。」

芳佳とシンヤは、 れていなく空笑いだった。 慣れているがリーネと美緒はその光景はあまり慣

トゥルーデ

「ん?これは、一体?」

目を丸くした。 トゥルー デもミー ティング・ルー ムに入るとゴダー ド以外の幽霊に

ミユキ

[あっ!バルクホルンさんお久しぶりです。]

ミユキがトゥルーデに挨拶した。

トゥルーデ

「これは、 相羽の妹のミユキさんお久しぶりです。

ケンゴ

[ミユキ!この子がシンヤのアレか?]

ケンゴがミユキに小声で聞く。

ミユキ

[そうよ。]

笑顔で言う。

するとケンゴ達がトゥルーデの前に来た。

トゥルーデ

「あの・・・・」

流石のトゥルーデも戸惑う。

そして最初に口を開いたケンゴがとんでもない発言をしてしまう。

ケンゴ

[私は、シンヤの兄の相羽ケンゴです。今日から私の事を義兄さん

と呼んでも構わない。]

フォン

「私も義姉さんと呼んでも良いのよ。バルクホルンさん。

トゥルーデ

「/////!?」

トゥルーデは、 いきなりおの事で顔を真っ赤にした。

シンヤ

ケンゴ兄さん!フォン!何言っているのおおおおおおお!!

シンヤも顔を真っ赤して言う。

ケンゴ

の瞬間から彼女は私達の大切な家族の一員だぞ!!それを拒むとは 「何を恥ずかしがっているんだああああ!! **!シンヤよぉぉ!**

どう言う事だぁぁぁ!!

フォン

「ケンゴの言う通りよ。 何故素直に慣れないの?」

ケンゴは、 と勘違いしている。 セルの様な口調でフォンはシンヤが恥ずかしがっている

シンヤ

・それは、 ケンゴ兄さん達の誤解だから!

シンヤは、 激しく突っ込む。

ミーナ

「何か騒がしいわね。

クルト

「どうしたんだろ?」

ミーナは、ようやく目を覚ましたクルトを見せようとミーティング・ ムに来たのは良いが何やら騒がしい。

ミーナ

「美緒?どうしたの?」

空笑いしている美緒に尋ねた。

美緒

んだ。 「実はな・ あの世にいる相羽の家族がこの世に来ているらしい

説明していると相羽夫婦がミーナの前にやって来た。

孝三

します。 [貴方がシンヤの上司の方ですか・・ 隣にいるのは、 私の家内です。 私のシンヤの父の孝三と申

相羽夫婦は、ミーナに挨拶した。

孝三

[これつまらない物ですが・ あの世名物の閻魔饅頭です。 ш

ミーナ

「あ・・ありがとうございます。

クルト

「大事に食べさせてもらいます。」

二人は、相羽夫婦に挨拶した。

ハンガーの倉庫では、 トを見せていた。 シンヤがあの世の一同にストライカーユニッ

新田

シンヤ

「ええ、構いませんよ。

[シンヤくん。グラニーを見ても良いかい?]

シンヤは、新田にグラニーを見せた。

新田

なりそうだな!] [すごい!これでエビルに変身するのか!これは、 世界平和の為に

マリア

[シンヤくん、 皆さんごめんなさいあの人こう言う物に目がなくて。

_

マリアは、懸命に謝る。

グラニー

【master?】

シンヤ

「グラニー・・・少し我慢していて。

グラニーも新田に色々見られて困惑していた。

シャーリー

「アンタもわかるのか?」

新田

[まあね、 これだけの高度の技術そんじょそこらじゃあ真似出来な

いよ。」

するとシャ IJ と新田は、 お互いに握手した。

シャーリー

「シャーロット・イェーガーだ。よろしく。_

新田

[新田シンヤだよろしくね。

第十三話・・・・お盆でシンヤの家族が来た!? (後書き)

クルト

騎士覚醒 ないのか? を開催した。 「お世話になっている小さな村で私達は、親睦を深める為に親睦会 前編」 次回 だが突如ネウロイが出現する。 僕には私には何も出来 空の騎士テッカマンエビル 第十四話 守護の

オリジナルキャラクター 2 (前書き)

今回は、キャラクター紹介です。

オリジナルキャラクター2

テッカマン名:テッカマンセイバー

人名:クルト・フラッハフェルト

元整備兵・音楽家

テッカマンタイプ:護衛型

テッカマン:オーガンをがモデルです。 カラーは、青と白。

武装:テックランサーでフェンシングのエペに似た剣型。

る 事。 能力:ウィッチー ズやエビルの護衛や絶対的な防御バリアーを作れ 的に常識人。 て防御だけしか能が無いワケでは無い。 ただし、攻撃面特に白兵戦でもエビルに匹敵する力を所持し ミーナとは、 両想い。 役柄・シンヤに続いて比較

PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きイ 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 ています。 の縦書き小説 ・ンター そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ 誰もが簡単にPDF形式 ト関連= ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 は 2 0 存書籍 タイ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n1062p/

空の騎士テッカマンエビル

2011年8月21日07時08分発行